

磐越自動車道関係発掘調査報告書

上 浦 遺 跡

2003

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 磐越自動車道関係発掘調査報告書

かみうら  
上 浦 遺 跡

2 0 0 3

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

磐越自動車道は新潟市から福島県いわき市に至る総延長213kmの高速自動車道です。平成9年に全線が開通し、日本海側と太平洋側を結ぶとともに、北陸・東北・常磐自動車道とも連結することで、沿線地域の産業・経済・文化の交流発展に貢献しています。

本書は、この磐越自動車道建設に先き立ち調査した上浦遺跡の発掘調査報告書です。上浦遺跡は古代から中世の遺跡で、古代の掘立柱建物跡や井戸、多数の溝などが検出されました。新津周辺の低湿地の開発が、古代から着実に実践されていたことがうかがえます。また、県内初例となる古代の銅製素文鏡の出土は、当時の律令政権との関係を物語っており、当時の人々の暮らしや政治・文化を考える上でも非常に貴重な資料となりました。

今回の調査結果が、地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助を賜りました新潟市教育委員会、地元の方々、並びに発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御配慮を賜りました日本道路公団北陸支社・同新潟工事事務所に対して厚くお礼申し上げます。

平成15年2月

新潟県教育委員会

教育長 板屋越 麟一

## 例　　言

- 1 本報告書は、新潟県新津市大字福島字上浦 290・稻場433番地ほかに所在する上浦遺跡の発掘調査記録である。
- 2 本調査は、磐越自動車道の建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託したもので、発掘調査は平成2・3年度は新潟県教育委員会（以下、県教委という）が、平成4年度は調査主体である県教委が財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団という）に委託し、実施したものである。
- 3 整理作業及び報告書作成に係る作業は、平成14年度に埋文事業団が県教委から受託しこれにあたった。
- 4 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。データの有無や閲覧希望は県教委に問い合わせ願いたい。
- 5 遺物の注記は上浦遺跡の略記号「上」とし、出土地点・肩位などを併記した。
- 6 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 遺物番号は種別に関わりなく通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 8 本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 9 自然科学分野に係わる各種分析は、以下の機関に委託してを行い、了解を得て編集した。  
珪藻・花粉・植物珪藻体分析、リン・カルシウム分析…パリノ・サーヴェイ株式会社  
木製品の樹種同定…株式会社パレオ・ラボ
- 10 造構図のトレース及び各種図版作成・編集に關しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。また、遺物写真撮影はデジタルカメラ（ニコンD100）で撮影し、造構写真とあわせCD化して編集を行った。なお、図版作成・編集作業に係り、業者に支給した資料は以下の通りである。  
本文・挿図：テキスト形式・Excel形式のデータ・トレース原図・貼り込み版下  
造構図面図版：原図（修正済）・レイアウト図・文字データ  
遺物図面図版：トレース図（個別）・拓影・レイアウト図  
写真図版：デジタルデータ（CD）・レイアウト図
- 11 本書の執筆・編集は坂上有紀（埋文事業団嘱託員）が担当した。ただし、第Ⅰ章1、第Ⅱ章については過去の新潟県埋蔵文化財調査報告書をもとに加筆編集したものである。
- 12 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。  
ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略　五十音順）  
赤澤　徳明　伊藤　秀和　小笠原正明　小川　重誠　川上　真雄　久保　智康　坂井　秀弥  
神　昌樹　新津市教育委員会　新津土地改良区　新津郷土地改良区　立木　宏明  
真柄　慎平　渡邊　朋和

## 目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業	1
A 一 次 調 査	1
B 二 次 調 査	1
C 調 査 体 制	2
D 整 理 作 業	4
3 上浦遺跡の名称について	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
A 周辺の遺跡	5
B 歴史的環境	8
第Ⅲ章 調査の概要	10
1 グリッドの設定	10
2 基本層序	10
第Ⅳ章 遺構	13
1 概要	13
2 記述の方法	13
A 遺構名の表記方法	13
B 遺構の形態分類	13
3 各説	14
A I 区	14
B II 区	19
第Ⅴ章 遺物	22
1 概要	22
2 古代の土器	22
A 記述の方法	22
B 分類	23
C 各説	27
3 中世の土器・陶磁器	32

4 土製品・石製品・金属製品 .....	32
A 土 製 品 .....	32
B 石 製 品 .....	33
C 金 属 製 品 .....	33
5 木 製 品 .....	33
A I 区 .....	33
B II 区 .....	34
第VI章 自然科学分析 .....	36
1 珪藻・花粉・植物珪酸体分析 .....	36
A 試 料 の 採 取 .....	36
B 分 析 方 法 .....	37
C 結 果 .....	38
D 水 域 環 境 .....	42
E 古植生について .....	43
F 遺構の性格について .....	43
G ま と め .....	45
2 木製品の樹種同定 .....	50
A 試 料 と 採 取 .....	50
B 結 果 .....	50
C ま と め .....	51
第VII章 ま と め .....	54
1 遺 構 .....	54
A 人為的に埋め戻された土坑について .....	54
B 遺構の変遷 .....	54
2 出土土器の編年的位置付け .....	57
3 遺跡の位置付け .....	59
《要 約》 .....	61
《引用文献》 .....	62

## 挿図目次

第1図 1次調査試掘位置と2次調査範囲	2	第12図 器種分類図（土器・黑色土器）	26
第2図 位置と名称	4	第13図 主要珪藻化石群集	40
第3図 周辺の地形	6	第14図 植物珪酸体組成	40
第4図 周辺の旧地形	6	第15図 硅藻化石顕微鏡写真	46
第5図 周辺の遺跡	7	第16図 花粉分析顕微鏡写真	48
第6図 グリッド設定図	11	第17図 植物珪酸体顕微鏡写真	49
第7図 土層柱状図	12	第18図 検出樹種の顕微鏡写真（1）	52
第8図 遺構の分類	13	第19図 検出樹種の顕微鏡写真（2）	53
第9図 鉄状遺構配置図	17	第20図 遺構の変遷	55
第10図 溝状遺構分類図	18		
第11図 器種分類図（須恵器）	24	第21図 主要遺構出土食器具の法量	59

## 表 目 次

第1表 分析試料一覧	36	第6表 木製品の樹種同定結果	50
第2表 珪藻分析結果	39	第7表 器種構成比率	58
第3表 花粉分析結果	41	第8表 食器具構成比率	58
第4表 植物珪酸体分析結果	42	別表1 遺構計測表	64
第5表 リン・カルシウム分析結果	42	別表2 遺物観察表	67

## 図版目次

### 【図面】

図版1 遺構全体配置図	図版23 遺構個別図12
図版2 遺構分割図1	図版24 遺構個別図13
図版3 遺構分割図2	図版25 遺構個別図14
図版4 遺構分割図3	図版26 遺構個別図15
図版5 遺構分割図4	図版27 I区 遺構出土土器1
図版6 遺構分割図5	図版28 I区 遺構出土土器2
図版7 遺構分割図6	図版29 I区 遺構出土土器3
図版8 遺構分割図7	図版30 I区 遺構出土土器4
図版9 遺構分割図8	図版31 I区 遺構出土土器5
図版10 遺構分割図9	図版32 I区 遺構出土土器6
図版11 遺構分割図10	図版33 I区 遺構出土土器7
図版12 遺構個別図1	図版34 I区 遺構出土土器8
図版13 遺構個別図2	図版35 I区 遺構出土土器9・包含層出土土器1
図版14 遺構個別図3	図版36 I区 包含層出土土器2
図版15 遺構個別図4	図版37 I区 包含層出土土器3
図版16 遺構個別図5	図版38 I区 包含層出土土器4
図版17 遺構個別図6	図版39 I区 包含層出土土器5
図版18 遺構個別図7	図版40 I区 包含層出土土器6・II区 出土土器・ 中世
図版19 遺構個別図8	
図版20 遺構個別図9	図版41 土製品・石製品・金属製品
図版21 遺構個別図10	図版42 木製品1
図版22 遺構個別図11	図版43 木製品2

【写 真】

- 図版 44 上浦遺跡周辺の景観、平成2~4年度調査区全景
- 図版 45 基本層序 I 区・II 区、SB1・10D-P1・SB2・7E-P6・SB3・6D-P6
- 図版 46 I 区 SB4・5D-P1・SB5・9C-P6・SE1・SK18・SK16・SK5
- 図版 47 I 区 SK15・SK21・SK74・SK20・SK64・SK65
- 図版 48 I 区 SK100・SK2・SK1・SK9・SK24・SK26・SK108
- 図版 49 I 区 SK93・SK14・SK46・SK42・SK112・SK19・SK7
- 図版 50 I 区 SK45・7E-P24・SK70・SK89・SK94
- 図版 51 I 区 SK36・SK87・SK55・SK54・SK56
- 図版 52 I 区 SK62・SK66・SK52・SK61・SK37・SK53
- 図版 53 I 区 SK34・SK39・11D・11E・8B~D・SD14・SD9
- 図版 54 I 区 SD4・SD27・SD51・SD53・11E・SD2・SD3・SD6
- 図版 55 I 区 SD22・SD29・SD65・SD77・SD79・SD85・SD89・10B・10C
- 図版 56 I 区 SD19・SD20・SD26・SD87・SD61・7D・7E・9D・9E・4~8B・4~8C  
II 区 SB39・SB51
- 図版 57 II 区 SB39-P1・4・SB51-P3・SE36・SE38・SE44
- 図版 58 II 区 SK30・SK27・SK26・SK56・SK18・SD14
- 図版 59 II 区 SK46・SK71・SK55・SK107
- 図版 60 II 区 SK123・SK124・SK93・SK96・SK92
- 図版 61 II 区 SK87・SK120・SK130・SK128・SK75・SX54
- 図版 62 II 区 SX108・SD2・SD8・SD33・SD35・SD50・SD72・SD73・SD52・SD58
- 図版 63 II 区 SD64・SD115・SD65・23~28グリッド、平成3・4年度調査区全景
- 図版 64 I 区 遺構出土土器1
- 図版 65 I 区 遺構出土土器2
- 図版 66 I 区 遺構出土土器3
- 図版 67 I 区 遺構出土土器4
- 図版 68 I 区 遺構出土土器5・包含層出土土器1
- 図版 69 I 区 包含層出土土器2
- 図版 70 I 区 包含層出土土器3
- 図版 71 I 区 包含層出土土器4・II 区 出土土器・中世
- 図版 72 土製品・石製品・金属製品・木製品1
- 図版 73 木製品2

# 第Ⅰ章 序 説

## 1 調査に至る経緯

磐越自動車道は福島県いわき市を起点として常磐自動車道から分岐し、郡山市で東北自動車道に連結・交差する。さらに会津若松市・新潟県東蒲原郡津川町を経て、新潟市で北陸自動車道と結ばれる。この総延長213kmの高速道路は、太平洋側と日本海側を直結させ、産業・経済・文化の交流を促進させる重要な役割を持っている。

磐越自動車道のうち上浦遺跡にかかる区間（新潟～津川間）は昭和53年12月に基本計画が決定された。昭和59年8月、日本道路公团新潟建設局（以下、道路公团）から県教委に、新潟～津川間の計画路線内及びその周辺の埋蔵文化財包蔵地の分布調査依頼がなされた。県教委は同年10月に周知の遺跡の分布調査を実施し、その結果を道路公團に回答した。またこれと同時に、平野部や段丘上には未周知の遺跡が存在する可能性があり、今後とも分布調査及び一次調査を実施する必要性がある旨を付け加えた。

昭和60年2月、道路公團に新潟～津川間（約46km）の工事施工命令が出され、昭和61年8月には最終的な路線発表を行った。県教委は新潟市～北蒲原郡安田町間の遺跡分布調査の依頼を受け、昭和62年4月、法線内の第1回分布調査を実施した。その結果、上浦遺跡を含む計17か所の埋蔵文化財包蔵地を確認し、平成2年2月～3月に一次調査を実施した。その結果、10,500m<sup>2</sup>について二次調査が必要である旨報告した。また、国道403号線より西側にも遺跡が広がることが判明した。磐越自動車道の工事工程や県教委の体制等を考慮した結果、平成2年度に二次調査を実施することになったが、これと並行して国道403号線より西側部分の一次調査も行うことになった。平成2年6月、西側部分の一次調査を実施し、11,733m<sup>2</sup>について二次調査が必要である旨報告した。調査工程の協議を重ねた結果、西側部分の調査は平成3・4年度に実施することとなった。

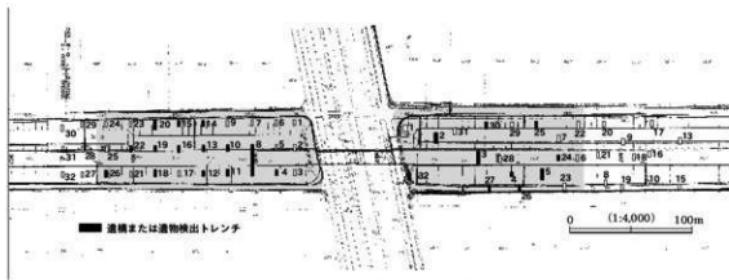
## 2 調査と整理作業

### A 一 次 調 査

当初は国道403号線の東側のみが調査対象地域であった。対象地域全体（20,416m<sup>2</sup>）に任意の位置にトレーンチを設定し、遺構・遺物の有無、土層の堆積状況などを確認した。32か所のトレーンチを調査した結果、溝・ピットなどが検出され、古代の須恵器・土師器が出土した。これにより遺構・遺物が確認された範囲10,500m<sup>2</sup>が二次調査対象となった。また、遺構・遺物の分布状況から国道を挟んで西側にも遺跡が広がる可能性が出てきたため、東側部分の二次調査と並行して西側部分14,333m<sup>2</sup>について一次調査を行った。32か所のトレーンチを調査した結果、東側同様、溝・ピットなどが検出され古代の須恵器・土師器・鉄製品が出土した。これにより遺構・遺物の確認された11,733m<sup>2</sup>が二次調査対象となった。

### B 二 次 調 査

調査は平成2年度から4年度の三か年にわたり実施した。調査区内を国道403号線及びこれに沿った



第1図 1次調査試掘溝位置と2次調査範囲

農業用水路が横断するため、調査区を二分した。平成2年度に調査した東側をI区、平成3・4年度に調査した西側をII区とした。調査区は沖積地であり周囲に水田・農業用水路などがあることから、調査区内の排水が不可欠であった。調査区周囲に幅50cm・深さ1mの暗渠排水溝をめぐらし、一か所に集水樹を設けて24時間排水を実施した。

I区(平成2年度) 10,500m<sup>2</sup>を対象に調査を行った。5月14日より、土層観察用のセクションベルトを残しながら重機による表土除去を開始し、6月5日からは作業員を投入して包含層掘削・遺構精査・遺構発掘作業を進めた。遺構の検出は地山面で行った。北側側道部分は遺構・遺物がほとんど検出されなかつたため、調査不必要と判断した。10月12日に空中写真撮影を行い、調査を終了した。

II区(平成3年度) 9月3日より、表土除去を開始、同月18日からは人力による包含層掘削・遺構精査・遺構発掘に入った。当初調査予定面積はII区11,733m<sup>2</sup>のうち国道側3,500m<sup>2</sup>であったが、予想より遺構・遺物が希薄であったため、次年度調査予定の5,070m<sup>2</sup>を追加した。追加部分については10月14日より表土除去を開始し、同月25日から包含層掘削などの作業に入った。なお、前年度同様、南北の側道部分は遺構・遺物がほとんど検出されないと判断し、調査不必要とした。11月19日に空中写真撮影を行い、調査を終了した。

III区(平成4年度) 残り部分3,510m<sup>2</sup>について調査を行った。7月16日より表土除去を開始し、同月23日から人力による作業を開始した。西側部分は、隣接する昨年度の調査区の遺物出土状況から調査不要と判断し、調査対象外とした。8月28日に空中写真撮影を行い、調査を終了した。

## C 調査体制

【一次調査 平成元年度】

調査期間 平成2年2月26日～3月3日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 田中邦正)

管 理	總括	大嶋 主己(新潟県教育厅文化行政課長)
	管 理	矢部 亮(〃 課長補佐)
調 査	庶務	今 文藏(〃 主事)
	調査指導	中島 実一(〃 埋蔵文化財係長)
	調査担当	坂井 秀弥(〃 主任)

## 〔一次調査 平成2年度〕

調査期間 平成2年6月11日～6月16日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 福川徹夫）

管 理	總 括	大嶋 圭己（新潟県教育行政課長）
	管 理	吉倉 長幸（〃 課長補佐）
	庶 務	境原 信夫（〃 主事）
調査	調査指導	本間 信昭（〃 理藏文化財第2係長）
	調査担当	北村 光亮（〃 主任）
	調査職員	小野塚徹夫（〃 文化財専門員）

## 〔二次調査 平成2年度〕

調査期間 平成2年5月9日～11月9日

調査主体・總括・管理・庶務は上記体制に同じ。

調 査	調査担当	北村 光亮（新潟県教育行政課主任）
	調査職員	川村三千男（〃 文化財主事）
		間 洋介（〃 文化財専門員）
		小野塚徹夫（〃 文化財専門員）

## 〔二次調査 平成3年度〕

調査期間 平成3年9月2日～11月30日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 福川徹夫）

管 理	總 括	大嶋 圭己（新潟県教育行政課長）
	管 理	吉倉 長幸（〃 課長補佐）
	庶 務	白石 雄哉（〃 主任）
調 査	調査指導	本間 信昭（〃 理藏文化財第2係長）
	調査担当	高橋 保雄（〃 文化財主事）
	調査職員	上林 章造（〃 文化財調査員）
		山田 昇（〃 文化財調査員）

## 〔二次調査 平成4年度〕

調査期間 平成4年7月16日～9月4日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調 査 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理	總 括	藍原 直木（事務局長）
	管 理	渡辺 栄吉（総務課長）
	庶 務	藤田 守彦（総務課主事）
調 査	調査統括	茂田井信彦（調査課長）
	調査指導	戸根与八郎（調査課理藏文化財第1係長）
	調査担当	望月 正樹（〃 主任）
調 査	調査職員	藤田 費明（〃 主任）
		須藤 高志（〃 文化財調査員）
		春日 真実（〃 文化財調査員）
		佐藤 恒（〃 嘱託員）

## D 整理作業

出土遺物の水洗・注記作業は、調査現場で発掘調査と並行して実施した。報告書に関わる本格的な整理作業は、埋文事業団が新潟県から委託を受けて行った。体制は以下のとおりである。

整理期間 平成14年4月1日～平成15年1月22日

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越輔一）

整理 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

總括	黒井 幸一（事務局長）
管理	長谷川司郎（總務課長）
庶務	高野 正司（總務課主任）
整理總括	岡本 郁栄（調査課長）
整理指導	北村 亮（＊ 整理担当課長代理）
整理担当	高橋 保雄（＊ 主任調査員）
整理職員	坂上 有紀（＊ 嘱託員）
作業	富裡佐登子 中村 忠美 木間 利子（以上、朝日分室嘱託員）

## 3 上浦遺跡の名称について

上浦遺跡は広大な範囲を有する遺跡である。今回報告する磐越自動車道建設に伴う調査の他にも、新潟市教育委員会（以下、新津市教委とする）が発掘調査しており、それぞれの調査区域の名称について混乱を招く恐れがあるため、ここで今一度整理しておきたい。

上浦遺跡は現在2地点に分かれている。国道403号線と磐越自動車道とが交差する付近と、現在新潟市工業団地となっている区域である（第2図）。前者のうち、事業団が調査した地点の南東側では、1992年に新津市教委による発掘調査が行われている。それについては「上浦A遺跡」として報告がなされている〔川上1997〕。また、後者の区域も同年発掘調査が行われており、未刊行ではあるが「上浦B遺跡」と呼称されている〔川上前掲、渡瀬1998〕。

今回報告する地点は、これに沿って呼称するならば「上浦A遺跡」の一部ということになる。しかし現時点において、遺跡カードでは上浦A遺跡・B遺跡の区別はなされていないため、本報告書は「上浦遺跡」として報告する。



第2図 位置と名称  
(国土地理院「白根」1:25,000原図 平成2年発行)

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

新津市は、新潟平野のほぼ中央に位置し、東西11.4km、南北12.1km、面積78.28km<sup>2</sup>、人口約6万6千人の中都市である。市の中央部を国道403号線・JR信越本線が縦貫している。また、かつては県内唯一といわれた油田を持ち、鉄道の町、石油の町と称されていた。地勢では、東に阿賀野川、西に信濃川、北には小阿賀野川と三方を川で囲まれた平野部と、標高約300mの新津丘陵から成り立っている。また、丘陵より北側では、丘陵東麓を北上して小阿賀野川に合流する能代川が、平野を東西に二分している。

新潟平野は、砂丘もしくは砂洲の形成により平野の出口を遮られて発達した沖積平野であり、信濃川・阿賀野川等の河川が運搬した土砂が厚く堆積している。その沖積層は厚く、150mにも及ぶという〔新潟珪藻グループ1979〕。そこには二大河川によって形成された自然堤防・氾濫原・蛇行跡などを見られる。

上浦遺跡は、その沖積平野上に位置し標高は2.2～3.5mを測る。現況は水田であり、周辺一帯は広大な田園風景が広がっているが、現在の景観は近世後期の治水事業・新田開拓によるところが大きい。上浦遺跡の存在した時代は沼沢が数多く点在し、湿地帯が広がっていた。遺跡の位置する信濃川・小阿賀野川・能代川に囲まれた沖積地には、地図上で表現不可能な起伏の小さい微高地や自然堤防が存在する(第3図)。①新津市街地から西方にのび小合まで続くもの、②新津市街地から北西方向にのび、長堀～覚路津までほぼ連続するもの、③能代川左岸で新津市街地から北上・田島へ続くもの、④満願寺から結の東方へ断続的に迫るものがあり、これらは阿賀野川が西から東へ流路を変化させてきた結果であると推測されている〔鈴木郁1989〕。第3図では②は確認できないが、上浦遺跡に近接して長沼遺跡、結遺跡も存在する(第4図)。よって上浦遺跡は、現在は埋没してしまった微高地・自然堤防上に位置していたものと考えられる。

### 2 歴史的環境

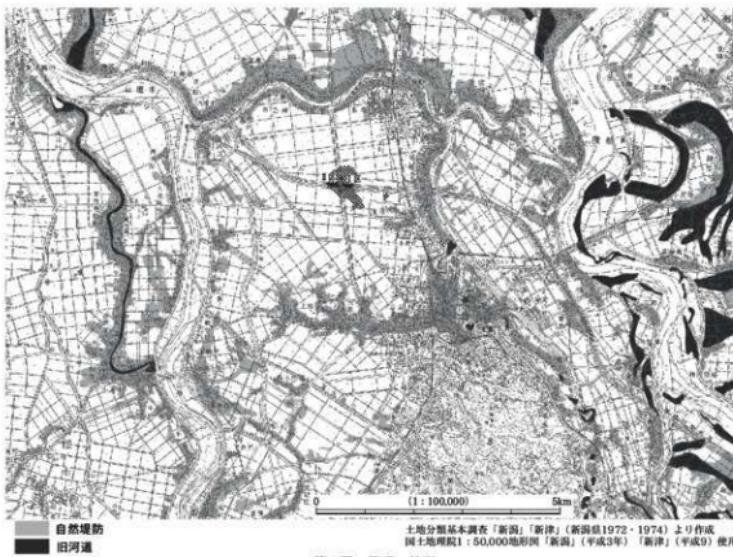
#### A 周辺の遺跡(第5図)

旧石器時代の遺跡は、わずかであるが新津丘陵・丘陵縁辺に存在する。八幡山遺跡、草水町2丁目窯跡ではナイフ形石器・石刃が出土している。また、縄文時代も同様に丘陵上・丘陵縁辺に分布している。発掘資料は少ない。採集資料では中期から後期、特に後期前葉の遺物が多い。草水町2丁目窯跡では草創期前半の遺物が出土している〔立木ほか1999〕。

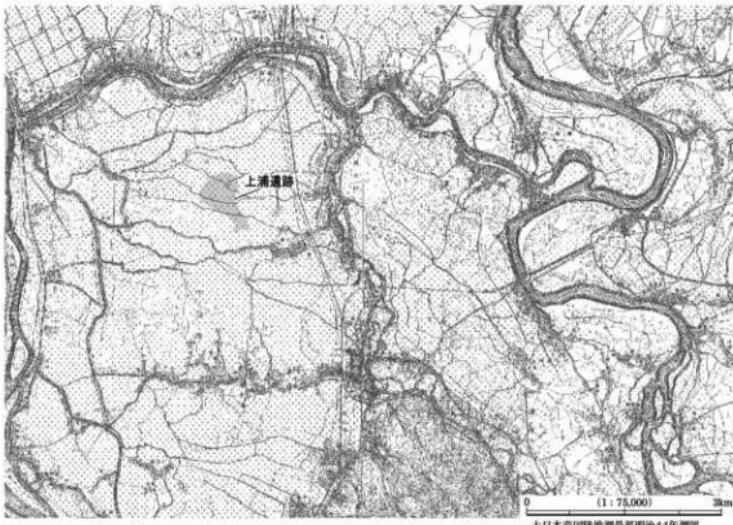
弥生時代の遺跡では、八幡山遺跡で高地性環濠集落が検出されている。その他、丘陵上・丘陵縁辺で後期の遺跡が数例あるが、平野部では現在舟戸遺跡〔川上1995〕で後期の遺物が見られるのみである。

古墳時代になると、沖ノ羽遺跡〔石川ほか1994、星野ほか1996〕や上浦B遺跡のように、丘陵や段丘の縁辺部に加えて平野部微高地にも遺跡が営まれるようになる。また八幡山古墳では、初頭に前方後方墳、前期には円墳が造営された。

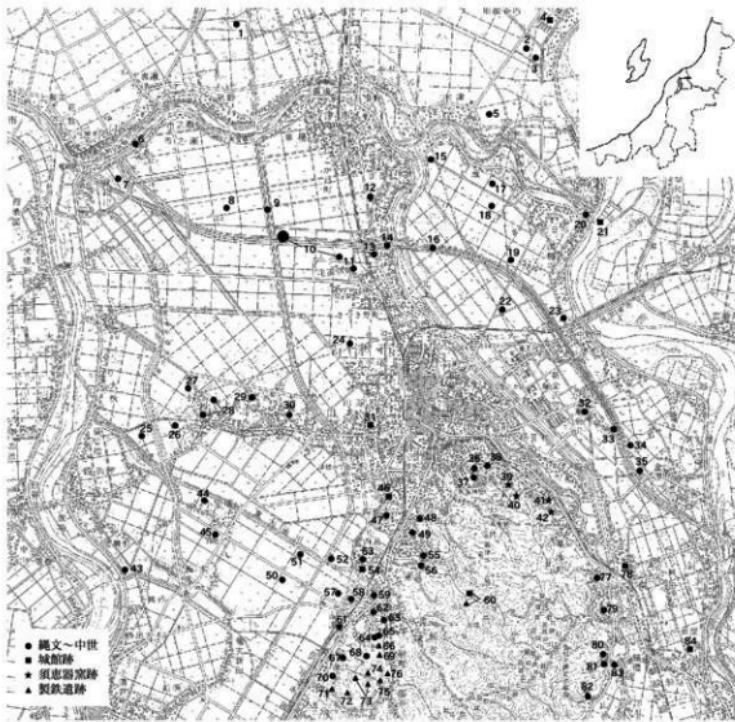
奈良・平安時代には、集落遺跡は平野部微高地に、窯跡・製鉄遺跡などの生産遺跡は丘陵・丘陵縁辺部



第3図 周辺の地形



第4図 周辺の旧地形



No.	通路名	時代	No.	通路名	時代	No.	通路名	時代
1	西前郷	縄文～平安	29	淨業	室町～安土桃山	57	北郷	奈良～平安
2	上郷	奈良～平安	30	龍藏	室町～安土桃山	58	舟戸	古墳・古代・中世
3	上郷B	奈良～平安	31	新津城跡	室町	59	鳴辛	奈良～平安
4	柳越館	室町	32	西江浦	平安	60	東島城跡	室町
5	天王寺	平安	33	寺道上	平安	61	二百川	縄文・古代
6	川原御	中世	34	木津橋	平安	62	吉津御詔社前	古墳
7	下等別当	古代～中世	35	觀池	平安・中世	63	高矢A	縄文(中～後期)
8	最弱	奈良～平安・中世	36	秋葉	縄文後期	64	埋葬地	縄文・弥生(中～後期)
9	祐	古墳(後期)・奈良・室町	37	秋葉・ブドウ園	縄文(中・後期)・古代	65	高矢B	縄文
10	上通	奈良～平安・中世	38	小手平	平安	66	古津初瀬B	奈良～平安
11	川口乙	平安	39	七本松古跡群	平安	67	鳥誓場	縄文(中・後期)
12	祐七島	奈良～平安	40	淺谷御跡	奈良～平安	68	八幡山	弥生(中～後期)・平安
13	川口甲	平安	41	草水町1丁目窓跡	臼石器・縄文・平安	69	古津初瀬A	奈良～平安
14	江内	中世～近世	42	草水町2丁目窓跡	平安	70	神田	縄文・奈良～平安
15	中谷内	平安・中世	43	通御野	古代	71	宿村A	平安
16	沖ノ羽	古墳・奈良～平安・中世	44	下梅ノ木	奈良～平安・中世	72	宿村B	平安
17	新久光の母	室町～近世	45	曾根	平安・鎌倉	73	宿村C	縄文・弥生(後期)・平安
18	内野	平安・中世	46	程島館	戦国	74	大人	平安
19	無頭	平安	47	山崎	縄文後期	75	金津初瀬A	奈良～平安
20	守崎	鎌倉	48	見足山	縄文・古代・中世	76	金津初瀬B	奈良～平安
21	長崎城跡	室町	49	原	縄文中・後期	77	御平	縄文
22	天下	平安	50	中部	平安	78	大間閣	中世
23	久保	平安	51	古通	平安	79	平	縄文(中・後期)
24	山谷北	古代	52	西島中谷内	奈良・平安	80	下野山	縄文(後期)
25	川根	奈良～平安	53	大門	平安	81	小穴山	縄文・弥生・古代
26	長左門沿	平安	54	西島館	中世	82	山崎城跡	奈良
27	西沼	平安	55	大坪	奈良～平安	83	山崎平	縄文・古代
28	小戸下組	奈良～平安・中世	56	善右衛門沢	弥生	84	下条	中世

第5図 周辺の通路

に集中する。丘陵西部では金津地区に製鉄遺跡群（金津丘陵製鉄遺跡群）が、丘陵東部では須恵器・土師器窯跡群（新津丘陵窯跡群）が分布している。製鉄遺跡群は9世紀第二四半期以降〔渡邊ほか1997〕とされる。窯跡群は8世紀前半～9世紀中頃が主な操業時期で、7世紀後半に遡る可能性がある〔立木ほか1998〕。集落遺跡では上浦遺跡のほか、沖ノ羽遺跡、中谷内遺跡〔立木ほか1999〕、細池遺跡〔小池ほか1994、立木ほか1998〕、寺道上遺跡〔小池ほか1994、渡邊ほか2001〕など近年の発掘調査により、沖積平野上に広大な範囲を持つ遺跡の存在が明らかになってきた。

中世の遺跡は、古代同様平野部微高地に存在するが、調査例が少なく実態は不明な部分が多い。細池遺跡では、中世以降の水田跡と思われる遺構が検出されている。また、城館跡が8か所確認されている。

## B 歴史的環境

古代において、新津市域は蒲原郡に属していた。当時の郡域は北限が阿賀野川、南限が見附市付近であったと考えられている。北陸地方は、古くは「越」と呼ばれており、7世紀後半（690年頃）には越国が三分割され、蒲原郡は頸城・吉志・魚沼とともに越中国に属した。なお、沼垂・石船（岩船）の2郡は越後国に属し、阿賀野川が両国の境となっていた。その後、702（大宝2）年に蒲原郡を含む越中国4郡の越後国編入、712（和銅5）年に出羽国が分立され、後世の越後国の領域が定まつたのである。これらは、淳足櫛・磐舟櫛設置と共に、大和政権の東北經營のなかに位置付けられる。時代をさかのぼれば、東山丘陵には八幡山古墳（新津市）や三王山古墳（三条市）が存在するが、このことは4～5世紀の段階で、蒲原地域に大和政権の支配が及んでいたこと、東山丘陵沿いに有力な首長が存在していたことをうかがわせるものである〔甘粕1998〕。

10世紀に成立した『倭名類聚抄』によれば、蒲原郡には「日置・桜井・勇礼・青海・小伏」の5郷が存在していた。これらの所在地には諸説あり、一致をみていないが、おおよそ日置郷は新津市周辺、桜井郷は弥彦村周辺、勇礼郷は三条市井栗、青海郷は加茂市周辺、小伏郷は三条市上保内布施谷に比定される。927（延長5）年に成立した『延喜式』神名帳には蒲原郡の式内社として「青海（2座）、宇都良波志・伊久礼・櫻田・小布施・伊加良志・伊夜比古・長瀬・中山・旦飯野・船江・土生田」の12社13座が記されている。伊夜比古神社は弥彦神社であることは諸説一致しているが、その他については一致をみていない。旦飯野神社は北蒲原郡笛神村とする説と新津市朝日とする説がある。北蒲原郡は古代においては沼垂郡と考えられていることから、笛神村説は成立しない。他の神社も郷との関連から三条市・加茂市などの丘陵沿いにあったと推測され、前述したように、古墳時代から開けていた地域である東山丘陵沿いに諸郷・式内社を設置されたと考えられる〔木村1988〕。県内では頸城地方が早くから開けていた地域であることが知られているが、遺跡の分布からみる歴史的環境や神位を有する神として『六国史』に見える頸城郡の居多神・大神神、蒲原郡の弥彦神の存在〔山田1981〕は、頸城郡と共に蒲原郡が政治経済的に進んでいたことをうかがわせる。加えて、前節で述べたように当地域は鉄製品と須恵器の大産地であったことも考慮すべき要因であろう。

古代末から中世にかけて、新津市域は金津保の保城であった。保城は、金津を中心に新津市から丘陵沿いに小須戸町・田上町を含んでいたと思われる。保の成立は、越後の諸保と同様に11世紀後半から12世紀の院政期と考えられる。金津保の地頭職を最初に得たのは、信濃國平賀郷を本拠地とする清和源氏の平賀氏である。史料の初見は『吾妻鏡』承久3（1221）年6月8日条に見える「金津（平賀）蔵人資義」であるが、地頭職を得たのはそれ以前の可能性がある。その後、資義の2人の子供にそれぞれ木津東方・

新津西方として分割譲与された。

「新津」という名称の初見は『吾妻鏡』建仁元（1201）年3月4日条、「城四郎長茂并伴類新津四郎已下、於吉野奥被誅畢」という記事である。城氏は11世紀半ばから12世紀を通して阿賀野川以北に勢力を有し、越後最大の在地領主として、国衙から独立した存在であった。新津四郎については詳細不明であるが、平賀氏の一族であると思われる。新津四郎が城氏の伴類（従者）であったことから、城氏の勢力が阿賀野川以南の金津保まで及んでいることがうかがえる。時代は下るが応永18（1411）年8月19日の居多神社社領注文〔『新潟県史』資料編4-2121 1983〕に、金津保域に含まれていたであろう木津（横越村木津付近）、金沢西（新津市金沢村近か）が在庁名として記されている。国衙は11世紀後半以降、在地領主達の武士化を遂げる足場とされ、彼らは在庁官人として国衙領の中に自分達の所領（在庁名）を形成していくが、金津保は在庁名の存在が確認できる北限である〔木村1988〕。これらのことから、金津保は城氏一族と国衙在庁官人層との競合の地であったことが推測される。

鎌倉時代後期には、北条氏一門である越後守護名越時家が、幕府滅亡後の1337（建武4）年段階では駿河・遠江守護今川氏の一族が地頭職を得ていた。

15世紀末から16世紀初めに作成されたと推測されている「蒲原郡段錢帳」は、新津丘陵周辺の所領状況をうかがうことのできる史料である〔『新潟県史』資料編 中世補遺-4450 1986〕。これによれば金津保は約328町もの広大な田地を有し、平賀氏や平賀氏から分派した新津氏・木津氏が領有していた。しかしその大半は、守護上杉氏直臣の長尾氏・飯沼氏などの所領や守護の御領所であった。鎌倉期以降、金津保を領有していたのは平賀氏一族であったが、地頭職からは前述のように早々に離れており、守護の一円領化が進んだと考えられるのである。その後、平賀氏とその一族は上杉氏家臣としての道を歩むことになる。

ところで、新津市の地名には「古津」、「新津」のように「津」のつく地名があり、注目される。古代においては信濃川・阿賀野川の河口付近にあったとされる淳足柵・蒲原津があり、新津市域はこれらの両河川と結ばれていた。蒲原津は『延喜式』において国津的な性格を持っていたとされ〔木村ほか1986〕、当初の越後国府の系譜を引くものであったとも推測されている。南北朝の動乱では、蒲原津をめぐって、阿賀野川を挟む地域で戦いが展開するなど、戦いにおいても津を押さえることが重要であったようである。蒲原津の背後にあった当地域は、内水面交通が主流であった当時、津を中心として展開する人と物の流れを押さえる重要な地域であったと考えられる。

近世になると治水工事・渕の干拓が進められた。しかし、大小の潟沼が散在していたため、開発にはかなりの月日を要した。遺跡の所在する「福島」（現在の小字名）を含む新津市北西部は一番の低湿地帯で度重なる洪水に悩まされていたため、村を移動した後、1651（慶安4）年に開発が行われた。現在に見える広大な水田地帯の初現である。

## 第III章 調査の概要

### 1 グリッドの設定

調査区の呼称 本遺跡は調査区内を国道403号線及びこれに沿った農業用水路が横断するため、国道403号線を境に調査区を二分した。平成2年度に調査した東側をI区、平成3・4年度に調査した西側をII区とした。

グリッドの設定 勝越自動車道のセンター杭を用いて、これをグリッドの基準線とした。STA.897（旧座標X=201855.916 Y=53212.490）とSTA.898（旧座標X=201860.874 Y=53112.613）を結ぶ方向を横軸とし、これに直行する方向を縦軸として、STA.898を起点に15mの方眼を組み、これを大グリッドとした。このため、グリッドの縦軸方向は真北より8度東傾している。また、グリッドは東西方向を算数字、南北方向をアルファベットとし、この組み合わせにより表示した。大グリッドはさらに3m方眼に25分割して1～25の小グリッドとし、3E5・7E16のように表記した。

### 2 基本層序

上浦遺跡の調査区は東西約340m、南北約50mで標高2.2m～3.7mを測る。調査前の現況は水田であり、一見ほぼ平坦なように見えるが、東側から西側に向かって緩やかに傾斜している。

調査区の層序は、場所によって一部土層の欠落、土質、色調に若干の相違が認められるが、基本的には地形の傾きに沿って堆積する。基本層序はI～V層に区分される。I・II～V層は調査区全域で共通するが、II層はI区とII区とは異なる。またI区では欠落している場所も多い。

I層：表土層。暗褐色～暗茶褐色を呈し、粘土質である。酸化鉄分を多く含む。

II層：I区とII区とでは差異があるため、I区をIIa層、II区をIIb層とした。

IIa層：灰黒色粘土層。非常に硬くしまる。微細炭化物粒を多く含む。

IIb層：褐色～茶褐色粘土層。II区北側では酸化鉄分を含み色調が明るい。

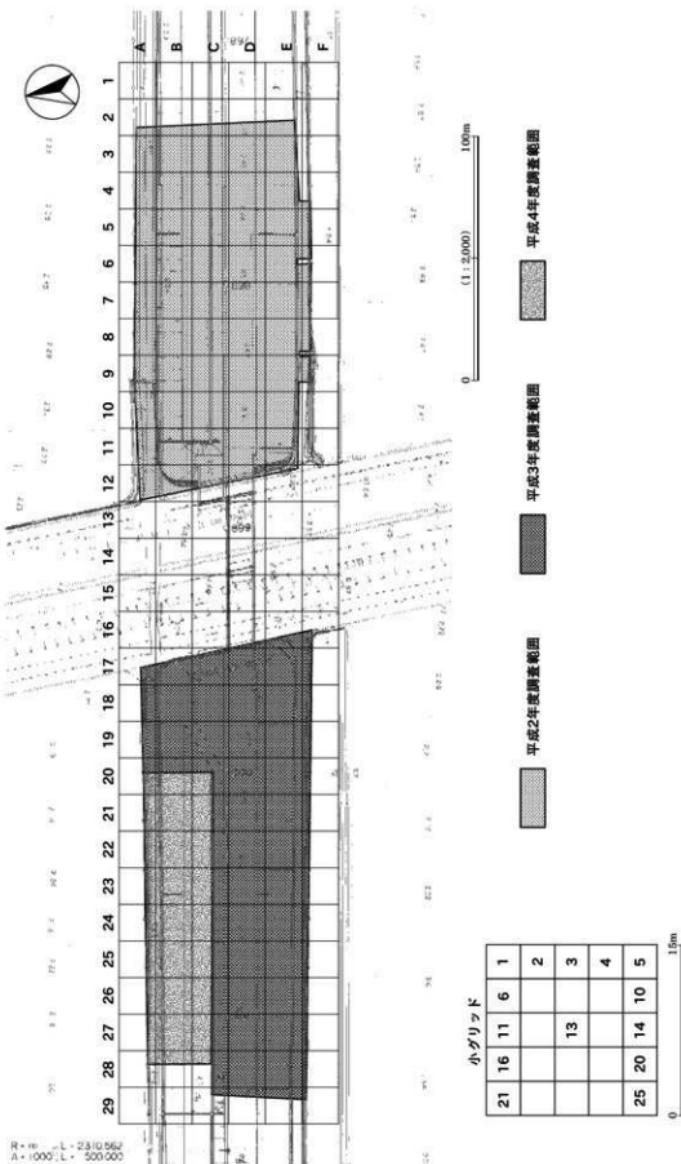
III層：微細炭化物粒の有無により2層に細分したが、II区南側では細分できない。古代～近世の遺物包含層である。

IIIa層：暗褐色または暗褐色シルト質土層。微細炭化物粒を含む。

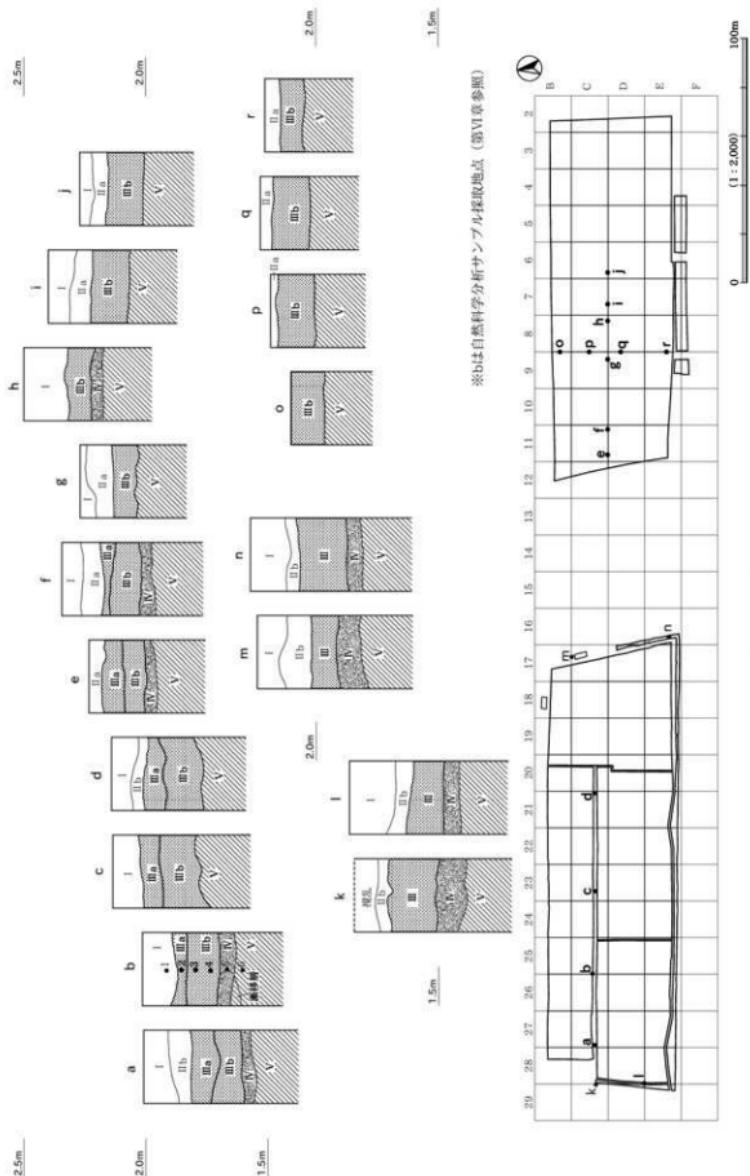
IIIb層：暗褐色または暗褐色シルト質土層。微細炭化物粒を全く含まない。

IV層：黒褐色粘土層。古代の遺物が若干出土する。

V層：青灰色シルトまたは粘土層。地山である。この層を遺構確認面とした。



第6図 グリフド設定期



第7図 土壠柱状図

## 第IV章 遺構

### 1 概要

上浦遺跡では掘立柱建物跡8棟、井戸4基、土坑175基、溝（鉢状遺構含む）229条、ピット183基が検出された。遺構は東側に集中し、西側では希薄である。特に溝は、I区全域では縦横に走っており、方向・幅の違いから数時期のものが重複していると考えられる。また、I区北東端で河川跡が検出された。II区では東側に掘立柱建物跡・井戸等が検出されたが、18グリッド以西では土坑と溝しか見られず、また遺物もほとんど出土していないことから、集落の西端に当たると思われる。

遺構の時期は、出土遺物から上限は奈良時代、下限は現代と思われる。しかし、遺物の出土状況は時期を決定づけるようなものが少なく、また多数の溝の切り合い関係が不明確であるため、時期の特定は困難である。よって遺構の各説は時代別ではなく、種別ごとに述べていきたい。

### 2 記述の方法

#### A 遺構名の表記方法

遺構種別は略称を用い、掘立柱建物を「SB」、井戸を「SE」、土坑を「SK」、溝を「SD」、ピットを「P」、不明遺構を「SX」とした。遺構名はこれらの略称と通し番号を組み合わせて表現した。

遺構番号は調査年度別に付した。I区では種別ごとに1番からの通し番号（例 SK1、SD1）である。II区では種別に関係なく1番から通し番号（例 SD1、SK2）となっている。年度によって同一の番号が生じるため、地区ごとに述べていくこととする。

掘立柱建物については、柱間の多い方向を「桁行」（長軸）、少ない方向を「梁間」（短軸）とする。方位は桁行方向が北を中心にして東西に偏する角度で示した。

#### B 遺構の形態分類

遺構の平面形態と断面形態の分類は、和泉A遺跡〔荒川ほか1999〕の分類基準に基づいて行った。

##### 平面形態

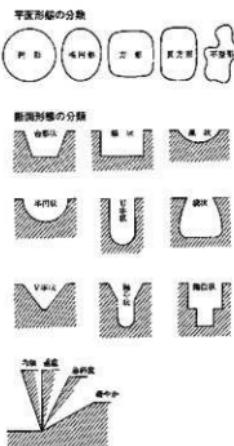
円形：長径が短径の1.2倍未満のもの

楕円形：長径が短径の1.2倍以上のもの

方形：長軸が短軸の1.2倍未満のもの

長方形：長軸が短軸の1.2倍以上のもの

不整形：凹凸で一定の平面形を持たないもの



第8図 遺構の分類

## 断面形態

- 台形状：底部に平坦面を持ち、緩やか～急角度に立ち上がるもの
- 箱 状：底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの
- 弧 状：底部に平坦面を持たない皿状で、緩やかに立ち上がるもの
- 半円状：底部に平坦面を持たない椀状で、急角度に立ち上がるもの
- U字状：確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの
- V字状：点的な底部を持ち、急角度に立ち上がるもの
- 漏斗状：下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの
- 階段状：階段状の立ち上がりを持つもの

## 3 各 説

各遺構については観察表を作成し（別表1）、記述は主要な遺構のみにとどめる。以下、地区別、種別ごとに述べていきたい。

## A I 区

## 1) 挖立柱建物

## SB1（図版12・45）

10Dに位置する。桁行2間（391cm）、梁間2間（324cm）で平面形は長方形である。平面積は $12.7m^2$ 、主軸はN-43°-Wである。柱間寸法は北側桁行が160・188cm、南側桁行が160・232cmである。梁間は北側が168・152cm、南側は中柱が検出されなかった。柱穴から遺物は出土していない。SD15・104・18は建物に付隨する溝とも考えられるが、建物の長さに比して長すぎるため断定できない。

## SB2（図版12・45）

7・8Eに位置する。桁行5間（960cm）、梁間は推定4間（632cm）で平面形は長方形である。平面積は推定 $60.7m^2$ （廻部分含む）、主軸はN-42°-Wである。一部調査区外へ延びるため不明であるが、身舎が桁行5間×梁間推定3間で、北側に1間の廻を持つ構造であると思われる。また、間仕切りと思われる柱穴列を有する。7E-P7・P9はそれぞれ7E-P8・P10の建て替えられたものであろうか。柱間寸法は桁行が東西両辺で176～208cm、梁間は廻部分が148cmだが、身舎北側では中間に柱穴が検出されなかつた可能性もある。SD53はこれに付隨する溝と考えられる。土器が比較的まとまって出土している。7E-P6から土師器・内面黒色土器の無台椀（図版27-1～3）が出土している。

## SB3（図版13・45）

6C・D、7C・Dに位置する。桁行4間（704cm）、梁間2間（456cm）で、平面形は長方形である。平面積は $32.1m^2$ 、主軸はN-45°-Wである。柱間寸法は桁行が144～224cm、梁間はほぼ等間隔で224～232cmである。中央に束柱をもつ。柱穴から遺物は出土していない。

## SB4（図版13・46）

5D・Eに位置する。桁行5間（840cm）、梁間2間（448cm）で平面形は長方形である。平面積は $37.6m^2$ 、主軸はN-37°-Wである。間仕切りと思われる柱穴列を有する。柱間寸法は桁行が104～

288cmで南側の1間のみ間隔が広い。梁間は208～232cmである。柱穴から遺物は出土していない。SD87は建物に付随する溝の可能性があるが、SB1同様断定はできない。

#### SB5 (図版12・46)

9Cに位置する。桁行2間(560cm)、梁間2間(468cm)で平面形は長方形である。面積は26.2m<sup>2</sup>、主軸はN-82°-Wで前述の4棟とは明らかに異なる。さらに、柱は打ち込まれており、掘方を有する他の4棟とは異なることから、この建物は時期を異にするものであると考えられる。柱間寸法は桁行が248～300cm、梁間が228cmである。9C-P1・P4～P8から柱根が出土しているが、土器等時期を決定づけるような遺物は出土しておらず、主軸方向を同じくする前述の4棟との新旧関係は不明である。

I区からは多数のビットが検出されており、上述の5棟以外にも掘立柱建物と推測されるようなビット配置が認められた。しかし、その配置は完全なものではなく、また覆土等の記録もなく確実性に欠けるため、本報告では掘立柱建物として扱えなかったことを付け加えておく。

### 2) 土 坑

覆土から大きく2種類に分けられる。短期間のうちに人為的に埋め戻されたと考えられるものと、そうでないものである。圧倒的に前者が多いが、それらの形態・規模は一様ではなく規則性は認められなかつた。まず、人為的に埋め戻されたと思われる土坑について形態別に述べ、次にそれ以外の土坑について述べることとする。

#### SK15 (図版7・14・47)

11E11に位置する方形の土坑である。断面形は箱状を呈する。埋土は青灰色シルト・灰黒色粘土などで、庶状に堆積している。遺物は出土していない。

#### SK20 (図版7・14・47)

11C・Dに位置する。平面形は不整形、断面は方形である。青灰色・暗灰色のシルト・粘土が不規則に堆積する。IV層を掘り込んでいる。遺物は出土していない。

#### SK1 (図版7・15・48)

11E23に位置する梢円形の土坑である。SD2・3の合流地点でもある。断面を見るとSD2を切っているように見えるが、SK1の最上層とSD2の覆土は同一層であり、切り合いの判別は難しい。SD3より古いと思われる。須恵器・土師器が微量出土している。

#### SK24 (図版8・16・48)

9D13に位置する長方形の土坑である。どの層も複数の上がブロック状に混じっており、水平に堆積している。断面形は台形状である。SD26に切られている。土師器が微量出土している。

#### SK7 (図版7・16・49)

10D・Eに位置する不整形の土坑である。長軸300cm、短軸224cmと比較的大型である。暗灰色・青灰色の粘土・シルトが不規則に堆積する。SD4・5・6(溝状造構A群、後述)に切られる。

#### SK89 (図版10・17・50)

3・4Dに位置する不整形の土坑である。下部は人為的な埋め戻してあると思われるが、上部はレンズ状の堆積が認められる。同類の造構としてはSK94(図版17)があるが、これら2基のみである。土師器が微量出土している。

**SK36** (図版8・17・51)

8C12に位置する円形の土坑である。堆積の様子が他の土坑とは異なるが、これも人為的な埋め戻しであると考えられる。SD32(溝状遺構C群)に切られる。遺物は出土していない。

**SK55** (図版9・18・51)

7C7・8に位置する円形の土坑である。埋土は炭化植物微細粒に明灰色粘土が混入したものが大部分を占める。同様の堆積は調査区内では他になく、1基のみである。土師器・箸状木製品・錢貨が出土している。

**SK54** (図版9・18・51)

7C3に位置する円形の土坑である。覆土は、ほとんどが明灰色粘土だが含有物が微妙に異なり、水平堆積している。底部付近には黒色腐食物層がうすく帯状に入る。底部からは牛または馬と思われる骨が出土した。その他、須恵器・土師器が微量出土している。同類の遺構としてSK56(図版18・51)がある。

**SK53** (図版8・19・52)

7C10に位置する。平面形は円形、断面形は壺んだ台形状を呈する。覆土はレンズ状堆積で17層に分層される。須恵器・土師器微量と木片が出土した。同類の遺構としてSK52がある。

**SK61** (図版9・19・52)

6Eに位置する不整形の土坑である。下部は人為的な埋め戻し、上部はレンズ状堆積である。深度は164cmと深い。調査時は土坑とされたが、堆積状況をみると井戸の可能性が高いと考えられる。黒色土器無台椀・木製品の椀、斎串・箸状木製品が出土しており、井戸祭祀が行われたと考えられる。

**SK34** (図版8・18・53)

9Dに位置する円形の土坑である。断面形は弧状を呈し、覆土はレンズ状に堆積する。SD20(溝状遺構C群)に切られる。

**SK39** (図版8・18・53)

8C・Dに位置する梢円形の土坑である。断面形は半円状を呈し、覆土はレンズ状に堆積する。下部は地山土と酷似している。SD30(溝状遺構C群)に切られる。

## 3) 犬状遺構 (図版8~10・20・53・54)

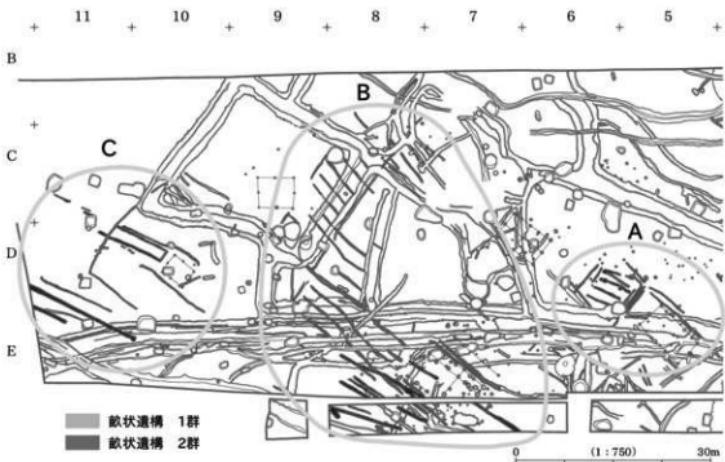
溝の方向から2つに大別できる。1つはN-43°-W前後(1群とする)、もう1つはN-58°-W前後(2群とする)である。さらにそれぞれまとまりを持ち、5D~6D付近(A)・8B~8E付近(B)・10D~11D付近(C)の3つに分かれる(第9図)。これら2つの群はSD4・6との切り合いから、1群は2群より古い時期のものである可能性を指摘できる。

歯状遺構1群 Aの範囲では、SB4北側に位置するSD87は建物に付随する雨落溝や区画溝の可能性もある。SB4北西側の小溝群は、SD71など2群の小溝4条を含むような形になっており、同時期のものである可能性も否定できない。Bの範囲は広大である。SD37は途中で方向が多少変わっており、ここを境として以北の小溝群と区別され得る。さらに、SD3・4・6と交差する付近では明確なつながりが見えないため、ここでも区別される可能性がある。SD53はSB2に付隨する溝とも考えられる。この溝からは土器が比較的多く出土している。底面からの出土ではないが、土師器無台椀や小泊産の須恵器無台杯が立つ。また、口縁は欠損しているが須恵器長頸瓶が2つに割れた状態で出土した。

Cの範囲には「歯状」と呼べるような小溝群は存在しない。SD15・18・104はSB1からやや離れて

いるが、付隨する溝かもしれない。SD11は建物の周間にめぐらされた区画溝の可能性もある。

歛状遺構2群 Aの範囲ではSB4北側に4条存在するが、上述したように同時期である可能性もある。Bの範囲では南側に集中する。2群とした中でも走行方向が微妙に異なる溝が多く、まとまりとするには若干疑問が残るところである。Cの範囲では、SD7・9・10とSD12・13・14で区別される。SD7・9は他の溝よりも幅・深度とも大きく、用途が異なるものかもしれない。



第9図 歛状遺構配置図

#### 4) 溝状遺構

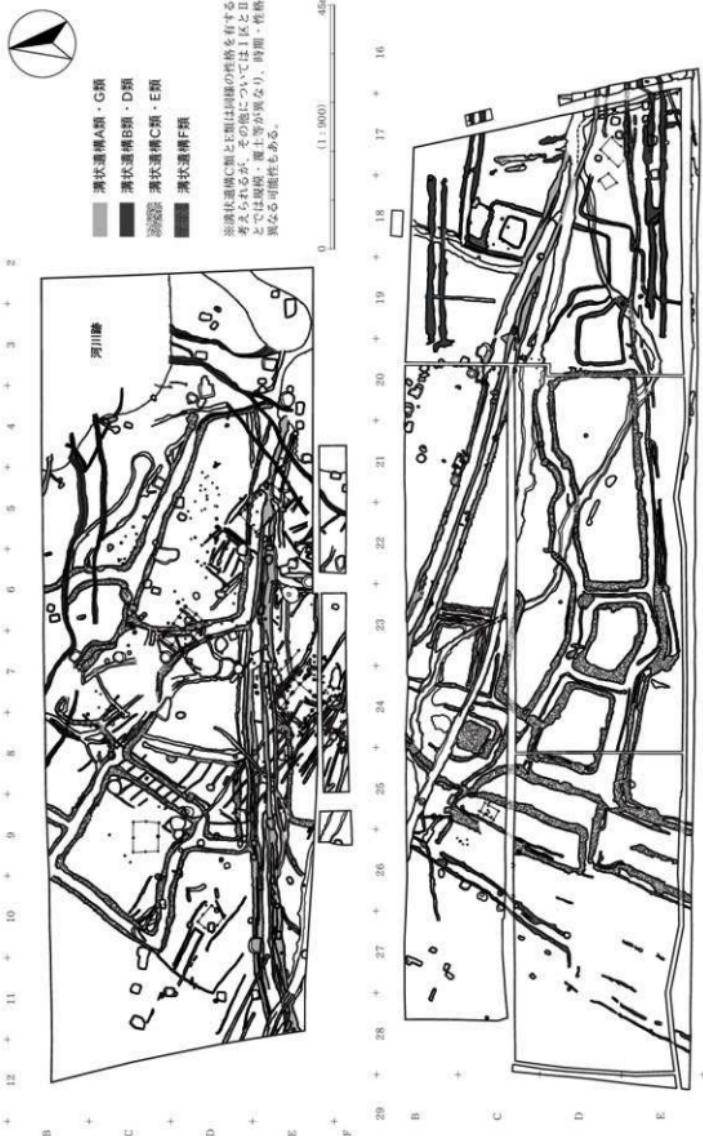
調査区からは多数の溝状遺構が検出され、いくつかはまとまりを持つものと考えられる。それらの溝状遺構を便宜的にA～Cの3群に分け、群ごとに記述することとする(第10図)。それら以外は個別の溝ごとに記述していく。

##### 溝状遺構A群(図版7～10・15・20・54)

4Eから11Eにかけて、それぞれ長短はあるが東西方向にのびる溝である。SD2・3・4・5・6・29がこれに該当する。幅は32～128cmと開きがあるが、深度は16～39cmでいずれも浅く、断面形は皿状もしくは半円状である。このうち、SD3からSD2が、SD3・29がSD6から派生もしくは分岐している。これらの溝のうち、SD29はより古いと考えられるが、他の溝については新旧関係が判然としない。SD2からは、杭が馬蹄形にめぐるような形で検出された。遺物は須恵器・土師器・陶磁器・木製品が出土している。特に7Eから土師器・須恵器が多く出土し、そのうちSD29では非ロクロの長甕が多く見られる。SD5からは遺物は出土していない。

##### 溝状遺構B群(図版21・55)

SD65・77とSD85・89・95がこれにあたる。SD65・77は4Bから8Bにかけて、東西へのびる



第10圖 球狀清潔分類圖

溝である。幅148／108cm、深度40／35cmで断面形はV字状である。2条の溝はほぼ並行に走り、それらの間隔は約2.5～5mある。道路状遺構の可能性もある。須恵器・土師器が少量出土している。SD78・79（溝状遺構C群）に切られる。

#### 溝状遺構C群（図版7～10・16・55・56）

B～Dグリッドに広がる、幅1cm、深さ10cm前後の浅い溝で、底面はやや凹凸がある。SD19・20・23・26・32・67・78・79がこれにあたる。方形や不定形にめぐる溝で、規模は様々だがそれらが約2m間隔で配置される。溝を周溝として、溝に囲まれた部分も含めて1つの遺構とすれば、これらは細池遺跡・寺道上遺跡A地点で検出された「門地遺構A類」に近似しており、水田跡の可能性もある。平面形は明確ではないが、規模などからSD42も同類と思われる。覆土は単一層で、大多数が暗灰色粘土である。SD20・26・32はそれぞれSK27・24・36を切っており、土坑群よりも新しいと考えられる。SD6などの東西に走る溝との新旧関係は不明であるが、検出状況や覆土から、こちらの溝群のほうが新しい可能性がある。SD23以外は須恵器・土師器が少量出土しているが、底面からの出土ではなく、III・IV層からの流入とも考えられる。

#### SD22（図版7・8・15・20）

8Dから10Eにかけて、蛇行する溝である。幅64cm、深度38cm、断面形は半円状を呈する。SD2・SK4より古く、SD29より新しい。SD29と交差する地点ではこれら2条の溝に切られる土坑がセクションから確認できるが、平面では検出できなかった。この土坑は人為的に埋め戻されたと考えられる。

#### SD1（図版20・54）

8Fから11Eにかけて北西方向へのびる溝である。II区でもこれに続く溝（SD25）が検出されている。最大幅272cm、深度39cmで断面形は弧状を呈する。昭和15～26年に行われた土地改良以前の用水跡で、1948年に米軍が撮影した航空写真にも記載されている。

#### 河川跡（図版9・10）

2Cから4Bにかけて広がる。遺物が出土しておらず所属時期は明確ではないが、覆土から古代と推定される。対岸は調査区内では検出されず、幅は24m以上になるところもある。川岸は緩やかに落ち込み、テラス状遺構などは検出されなかった。自然河川の跡と考えられる。上浦B遺跡でも調査区北側で河川跡が検出されており、同一河川跡の可能性も考えられる。

## B II 区

### 1) 挖立柱建物

#### SB39（図版21・56）

17Dに位置する。桁行2間（444cm）、梁間1間（304～320cm）で平面形は長方形である。南端の柱は検出できなかつたが、推定平面積は $13.4\text{m}^2$ 、主軸はN-67°-Eである。柱間寸法は桁行が212～232cm、梁間が320cmである。P1・3・4からは柱根が検出された。P3・4の柱根はスギ材である。

#### SB51（図版21・56）

17D・18Dに位置する。建物跡ではなく、簡易的な上屋構造を持つ遺構の可能性もある。桁行1間（200～239cm）、梁間1間（212～228cm）で平面形はやや歪んでいるが方形である。平面積は $4.8\text{m}^2$ 、主軸はN-74°-Eである。P4からはクリ材の柱根が検出された。

## SB134 (図版3)

25Cに位置する。SB51同様、簡易的な上屋構造を持つ遺構である可能性が高い。桁行1間(72cm)、梁間1間(116cm)で平面形は長方形である。面積は0.83m<sup>2</sup>、主軸はN-39°-Eである。柱根等の遺物は出土していない。

## 2) 井 戸

## SE36 (図版6・21)

17D5・10に位置する素掘りの井戸である。長径56cm、深度66cmを測る。SD33に切られている。覆土は單一層で腐植物・タール状の石油と思われるものを多く含む。曲物と漆塗り椀が出土した。

## SE38 (図版6・21)

17D14・15に位置する素掘りの井戸である。長径60cm、深度96cmを測る。覆土は水平堆積で人為的な埋め戻しを行っていると考えられる。遺物は出土していない。

## 3) 土 坑

I区同様、人為的に埋め戻されたと考えられる土坑がほとんどである。ただし、全体的にみると地山ブロックを含む割合が少なく、単一層である場合が多い。また、I区では調査区全体から検出されているに対し、II区では分布に偏りが認められ、17D・Eと20・21B・C、26・27B・Cの3か所に集中している。20・21B・Cでは土坑がほぼ円形にめぐっている。それらの土坑の覆土は全て同一というわけではないが、意図的に配置されたような印象を受ける。

## SK27 (図版22・58)

17D10に位置する方形の土坑である。覆土は暗褐色粘質土に地山ブロックを含む単一層である。南北隅から木片が検出されたが、遺物は出土していない。

## SK46 (図版22・59)

19E12・17に位置する円形の土坑である。本遺跡では幅に対して深度が大きい土坑は数少ないが、これはそのうちの1つである。覆土は黒褐色粘質土に地山ブロックを含む単一層である。

## SK93 (図版24・60)

21B・Cに位置する不整形の土坑である。底面の凹凸が著しい。覆土は、暗灰色粘土と青灰色粘土が同じ比率で混ざった単一層で、人為的な埋め戻しと考えられる。遺物は出土していない。

## SK120 (図版25・61)

26B14・15に位置する。覆土は暗褐色土の単一層で、深度は7cmと浅い。この他にもSK130など調査区西側に同類の土坑が存在するが、自然の落ち込みである可能性もある。

## 4) 溝

I区同様、いくつかの溝群が認められるため、II区でもこれらをD~Fの3群に分類して記述する。それ以外は個別の溝ごとに述べていくこととする。

## SD33 (図版3~6・25・62)

17~24グリッドにわたって蛇行する溝である。覆土は黒褐色粘質土で、重複する全ての遺構に切られしており、一番古い溝であると考えられる。須恵器・土師器が微量出土している。

**溝状遺構D群** (図版5・6・26・62)

2条の溝が東西方向に、ほぼ並行に走るものをD類とする。SD1・2、SD7・8、SD29・31がこれに当たる。

SD1・2は17C・18Cに位置し東西にのびる溝である。深度は10cm前後と浅く、底面の凹凸が著しい。2つの溝は約1m間隔で並行している。これらの北西側にあるSD7・8もほぼ同じ間隔で2条並行しており、覆土も似ていることから同類と思われる。

SD29・31は17E～19Eにかけて東西にのびる溝である。SD1・2同様2条の溝が並行に走り、その間隔は1m前後である。深度は15cm前後、覆土は暗褐色粘質土を主体とするため、上述の溝とは時期を異にするものと思われる。

**溝状遺構E群** (図版2～6・25・62・63)

歪みはあるが、ほぼ長方形に溝がめぐるものである。SD52・58・61・64・66がこれに当たる。幅は約1m～1.5m、深度は約10～15cm、幅広で浅い溝である。底面は凹凸が著しい。I区の溝状遺構C群と同じものであろうと考えられ、細池遺跡の「凹地遺構A類」に類似している。覆土は暗褐色粘質土の単一層で、底面の凹凸が著しい。遺物はSD52から土師器片が少量出土しているが、流れ込みの可能性がある。また、上述の溝群と並行するように走るSD35・50・58・60・65・79・80・109・110・117・133は、規模・覆土ともほぼ同じであり、一連の遺構と考えられる。また、SD98～104は覆土が異なるが、配置から同類である可能性がある。

**溝状遺構F群** (図版5・6・26)

SD5・6・10・11・37・45・47・48・72・73がこれにあたる。幅34～78cm、深度4～15cmで、底面は凹凸が著しい。上述の溝群よりも幅が狭いが構成は類似しており、同様の性格を持つ遺構かもしれない。SD37はSD35に切られていることから、溝状遺構E群よりも古い可能性がある。

**溝状遺構G群** (図版4～6・25・63)

17Dから23Bにかけて、北西にのびる溝である。SD13・14・17がこれにあたる。約1～2m間隔で並行して走る。SD13・14はSD25に切られる。SD14・17はそれぞれSK9・16に切られる。逆に、それより北西側の土坑は全て切っている。3条とも覆土は南東側では暗褐色粘質土を主体とし、北西側では黒褐色粘質土となる。写真で確認したところどちらも同様の覆土と思われる。調査年度が異なるため、調査員の認識の違いによるものかもしれないことを付け加えておく。

**5) 不明遺構****SX54** (図版4・25・61)

21D20・25に位置する。楕円形を呈し、深度は8cmと浅い。覆土は黒褐色粘質土の単一層である。SX59も覆土から同類と思われるが、自然の落ち込みの可能性も否定できない。

**SX108** (図版3・26・62)

24B・24～25Cに位置する。最大幅536cm、深度11cmである。細池遺跡の「凹地遺構C類」に近似しており、水田跡の可能性があるということで自然科学分析による調査を行ったが、断定されるまでは至らなかった（第VI章参照）。

# 第V章 遺物

## 1 概要

上浦遺跡から出土した遺物は、奈良時代から近現代に及ぶ。このうち主体をなすのは古代の土器である。遺物量は土器・土製品が平箱で125箱、石製品・金属製品3箱、木製品29箱である。遺物は遺構から出土したものを中心にして、残存率の高いもの及び出土例の少ないものを選択して図化した。

## 2 古代の土器

古代の土器は須恵器・土師器があり、灰釉陶器・綠釉陶器は調査区からは出土していない。遺構から出土した土器では、SD51・53とSK108、SD3・6・29が分岐する地点でまとまって出土している。他は細片が多く散発的である。全体的にはEグリッド、特に7Eからの出土が目立つ。

### A 記述の方法

遺物は遺構ごとに報告し、その後包含層出土土器について述べる。土器の時期区分は田嶋氏の編年〔田嶋1988〕に倣った。調整技法の記述にあたっては、以下のように表現を統一した。①ロクロの回転を利用したナデ・削り・ハケ目をそれぞれ「ロクロナデ」・「ロクロケズリ」・「カキ目」とした。②ロクロを使用しないナデ・削り・ミガキ・ハケ目はそれぞれ「ナデ」・「ヘラケズリ」・「ヘラミガキ」・「ハケ目」とした。③いわゆる「ロクロ」ではない回転を利用したナデは、「ヨコナデ」とした。非ロクロ窯の口縁部によく見られる。④貯蔵具・煮炊具のいわゆる「タタキ」については外面を「タタキ具痕」、内面を「当て具痕」とした。これらは木目の入り方によって分類されるが、遺跡からは限られた種類しか認められないため、特に分類は行わなかった。ただし「平行タタキ」については、タタキ具の彫り込みに対して木目が直交するものが多く見られる。これを春日氏の呼称に倣い「擬格子タタキ」とした。

須恵器の胎土については山三賀II遺跡の報告〔坂井ほか1989〕以降、新潟県内でも検討されるようになっており、土器の生産と流通を知るために重要な指標である。ここでは、山三賀II遺跡と吉田町史〔春日2000〕の分類を参考に4つに区分した。ただし、肉眼観察による分類であるため、鉱物などの名前は厳密に言うと正確でないものもあると思われるが、ご容赦願いたい。個々の土器の胎土は、観察表(別表2)に記したが、以下の4群以外のものは空白とした。

A 群 胎土が粗く、径2~5mm前後の白色粒子・石英・長石を多く含む。器面はざらつく。これらの多くは笛神丘陵の笛神・真木山窯跡群を中心とする阿賀北地方の須恵器と推定される。

B 群 胎土が精良で、径0.5mmほどの白色粒子を含む。特に無台杯は器面が滑らかで混和材が少ないものが多い。また器壁が薄く軽量なものが多い。佐渡の小泊窯跡群の須恵器と考えられる。

C 群 胎土は粘土質で滑らかであり、径1mm前後の石英・長石の粒子を比較的多く含む。海綿骨針を含むものもある。これらの多くは新津市七本松窯跡・五泉市山崎窯跡など新津丘陵窯跡群の須恵器と考えられる。C群の中には酸化焰焼成のものが見られ、新津市寺道上遺跡〔渡邊ほか2001〕でも認められる。

D 群 胎土の粒子は砂質が強く、海綿骨針を含むものが多い。また、径1~2mm前後の白色粒子も比較的多く含む。赤褐色を呈する土器も多く見られる。これらの多くは寺泊町から出雲崎町の西山丘陵北端に広がる、西古志窯跡群の須恵器と推定される。

掲載した全ての遺物については、出土位置・種別・法量・調整・胎土・焼成・色調などを観察し、巻末の遺物観察表としてまとめてある。よって、この章では観察表からは読み取れない情報を中心に、特徴的な遺物についてのみ記述を行うこととする。最初に遺構出土土器、次に包含層出土土器について述べる。遺構の順序は「第IV章 遺構」の記述順序に準じる。

## B 分類

### 1) 須恵器 (第11図)

食膳具と貯蔵具に大別できる。食膳具には無台杯・有台杯・杯蓋・稜椀が、貯蔵具には鉢・壺蓋・長頸瓶・短頸壺・横瓶・提瓶(か)・淨瓶または水瓶・甕がある。以下器種ごとに概要を述べる。分類は第11図に示した。また、貯蔵具の名称・分類は【北野1999】を参考にした。

**無台杯** 杯のうち、高台を持たないもの。底部切り離して全て回転ヘラ切りで、無調整のものが多い。胎土B群の杯類については研究が蓄積されており、他群の杯類との違いが比較的判別しやすく、形態から変遷を追うことがある程度可能である。よって胎土B群(I類)とそれ以外(II類)に分けて行った。I類は口径が12~13.5cmの範囲にまとまり、径高指数と器形によって分類した。径高指数25以上をA類、25未満をB類とし、A類のうち体部の立ち上がりが急角度のものをA1類、体部の立ち上がりが緩い角度のものをA2類とした。II類は底部形態と口径により分類した。A類は丸底、B類は平底のもので、B類はさらに口径14cm以上を1類、13cm以上~14cm未満を2類、13cm未満を3類とした。

**有台杯** 杯のうち、高台を持つもの。口径と体部の形態により分類した。A~C類は身が浅いもので、口径15cm以上をA類、12cm以上15cm未満をB類、12cm未満をC類とした。また、体部が直線的またはやや内湾するものを1類、体部が大きく聞くもの・口縁部が外反するものを2類とした。D・E類は身が深いものである。D類は体部が直線的にのびるD1類と、口縁部が外反し長い高台を持つD2類に分けられる。E類は小型で、1点のみの出土である。F類は体部に沈線を持ち、金属器模倣と考えられるものである。

**杯蓋** つまみの形態と返り・縁部の形態により細分した。つまみが凝宝珠形を呈し中央部が盛り上がるものをA類、ボタン状を呈し中央部がほぼ平らになるものをB類、ボタン状を呈し中央部が窪むものをC類とした。また、縁部の形態から返りのあるものを1類、縁部が長く、外反あるいは直立するものを2類、縁部が内湾し断面三角形になるものを3類、縁部が内面に巻き込まれるような形で、断面が丸くなるものを4類とした。破片しか残存せず全形が不明なものは、例えば「A類」「3類」などそれぞれ単独の分類とした。

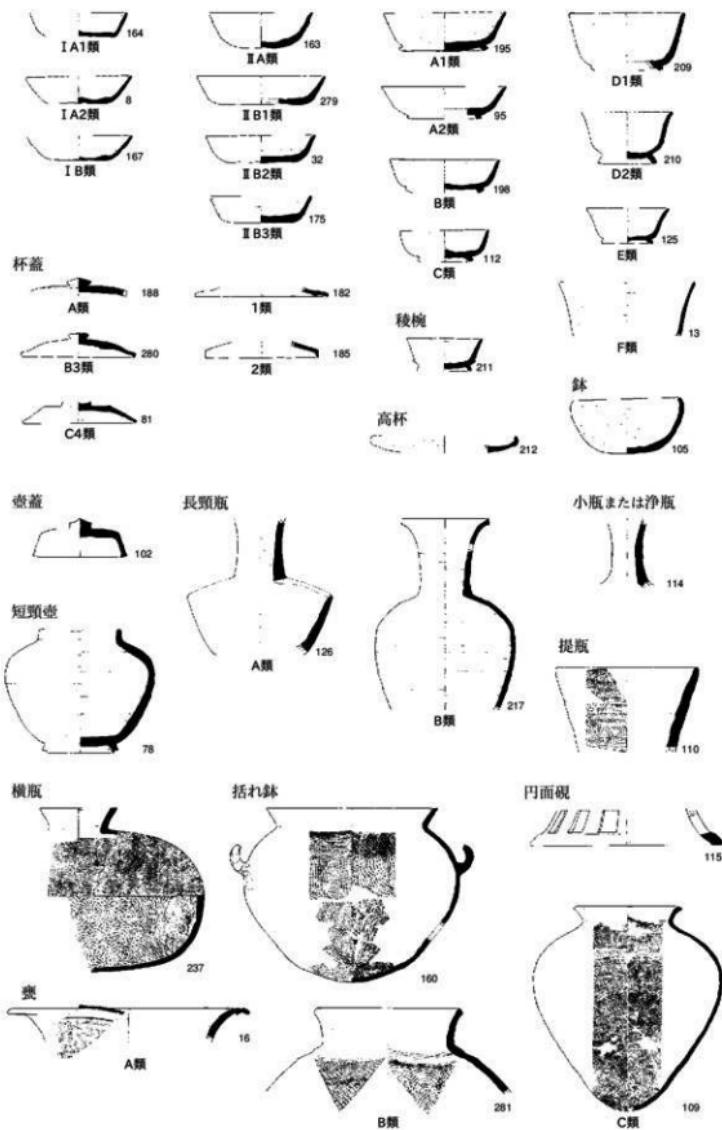
**鉢** 鉄鉢模倣と考えられるもの。体部下半はロクロケズリされる。1点のみ出土している。

**稜椀** 体部に稜を持ち、口縁は緩やかに外反する。金属製品模倣と考えられているものである。小型品で、1点のみ出土している。

**高杯** 杯部の破片で、1点のみ出土した。

**壺蓋** 短頸壺の蓋。2点出土している。どちらも天井部より縁部の径が大きく、縁端部は面を有する。

**短頸壺** 口縁が短く直立し、球胴形の体部を持つもの。体部下半はケズられるが、ロクロケズリされる



第11図 器種分類図（須恵器）

ものとヘラケズリされるものがある。肩部に沈線を有するものもある。

**長 頭 瓶** 体部の形態により分類した。肩部に稜を持つA類と、なで肩のB類に分けられる。また、小型品もA類・B類それぞれ1点ずつ認められる。

**水瓶または淨瓶** 頭部しか残存しないため、どちらの器種か判断しかねるものである。1点のみ出土した。

**提 瓶** 鏡餅に似た形の体部に、筒状の口縁部が付くもの。口縁部しか認められないが、口径からおそらく提瓶であろうと推定した。

**横 瓶** 俵形の体部に「く」の字状に外反する口縁部が付くもの。出土量は少ない。

**括 れ 鉢** 頭部が屈曲する鉢。全形がわかるものはこの1点だけで、把手を持つものである。

**甕** 口縁の形態により分類した。A類は口縁上端付近に凸帯を有し、大きく外反するもの。波状文を施す場合が多い。B類は口縁部の開きが少ないもの。端部の形態は様々だが、数が少ないと細分は行わない。C類は上記以外のものを一括した。甕は、破片数は多いが全形のわかるものは109のみである。体部外は平行タタキが多く、格子タタキも少量存在する。放射状タタキは認められなかった。内面は同心円当て具が多く、平行當て具も少量認められる。

## 2) 土 師 器 (第12図)

食膳具と煮炊具に大別できる。食膳具には無台椀・杯・小皿・有台皿が、煮炊具には甕・鍋・瓶がある。

**無 台 椽** 径高指数と口径により細分した。径高指数26~29をA類、30~34をB類、35以上をC類とした。また、口縁上端が屈曲し外反するものが1点あり、これをD類とした。灰釉陶器模倣と考えられる。さらには口径14cm以上のものを1類、14cm未満のものを2類とした。多数のものは体部が緩やかに立ち上がり、内湾する。しかし、B1類には体部が直線的に立ち上がるものがあり、2つの形態が認められるが細分は行わなかった。

**杯** 1点のみ。体部下半に稜を持ち、内面体部下半はヘラミガキされる。

**有 台 杯** 1点のみ。形態は須恵器だが、胎土は土師器と同じであるため、ここに分類した。須恵器を模倣したものと思われる。

**無 台 皿** 器高が2~3cmと浅いもの。底部との境は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。

**有 台 皿** 小皿に高台が付いたもの。底部中央に孔が開けられるものが1点ある。

**甕** 類 ロクロ成形のものと非ロクロ成形のものがある。非ロクロのものは口縁部から底部まで復元できるものがなく、口径は20cm前後に集中している。よって本報告では非ロクロの甕は細分せず、単に「甕」とした。ロクロ成形のものは長甕と小甕に大別した。細分は口縁形態によって行った。

**甕(非ロクロ)** 主に頭部の屈曲度合いで4細分した。A類は口縁部が大きく外反し、頭部の屈曲が強いもの。B類は頭部が「く」の字状になるもの。C類は頭部のくびれが弱いもの。D類は口縁の開きが少なく、体部は張る器形である。体部上半からヘラケズリされ、器壁は薄い。武威型の台付甕と考えられる。

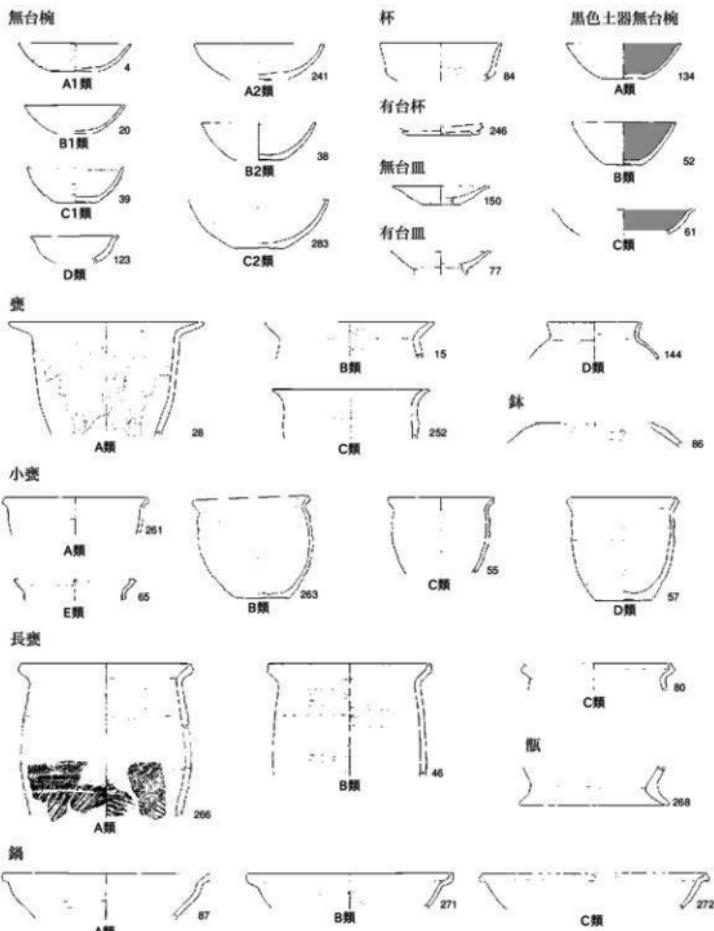
**小 甕** A類は単純口縁のもの。B類は口縁部が上方につまみ上げられるが、度合いが弱いもの。口縁部断面が長三角形状に肥厚する。C類は、口縁部が上方あるいは斜め上方につまみ上げられる。口縁上端を強くつまみ上げ、嘴状になる。D類は口縁部が上方につまみ上げられるが、B類に比して度合いが強く、断面が逆「く」の字状になる。E類は上記以外のものを一括した。

**長 甕** 全形がわかるものがないため、小甕同様に口縁部のつまみ上げの度合いにより細分した。A類は単純口縁のもの。ロクロナデにより口縁内面が若干内湾するものもある。B類は口縁部がつまみ上げさ

れ、断面が長三角形状になるもの。口縁は内湾するものと直立するものがある。C類は口縁部つまみ上げの度合いが強く、逆「く」の字状になるもの、とした。

**甑** 底部近くで屈曲し、外側に聞く形のものである。1点のみ出土した。

**鍋** 全形がわかるものではなく、口縁部形態で細分した。A類は口縁部が外反あるいは内湾気味となり、端部に面を持つ。B類は口縁がつまみ上げられ上方にのびる。端部は丸く、肥厚するものもある。数は少ない。C類は口縁部内面に屈曲ができるもので、断面は三角形状になる。



第12図 器種分類図（土師器・黒色土器）

### 3) 黒色土器 (第12図)

無台椀のみ認められる。径高指数30~34のものをA類、35以上のものをB類とした。口径は12.7~15.5cmで、数が少ないため口径による細分は行わない。また、口縁上端が外側に屈曲したものをC類とした。これも、土師器無台椀の説明で述べたように灰釉陶器の模倣品と考えられる。C類は1点のみである。

#### C 各 説

##### 1) I 区

###### SB2 (1~3)

1~3とも7E-P6から出土した。1は土師器無台椀で、体部外面に倒位で「束」と墨書きされている。倒位の文字はこの1点のみである。「束」の字は、県内では現在のところ新潟市駿駒堂遺跡〔江口ほか2000〕に類例があるのみである。土師器無台椀のほか、内面黒色土器の無台椀が出土しているが、微量である。

###### SE1 (5・6)

5は土師器無台椀B1類。体部が直線的に立ち上がるタイプのものである。6は甕B類、胎土B群である。破片はSK61・SD3出土土器とも接合した。体部外面は格子タタキでカキ目が入る。

###### SK100 (8)

須恵器無台杯で、遺構検出面直上で出土した(図版48)。完形品である。胎土B群で底面には墨書きが見られる。おそらく「教」の字と考えられる。文字が二重になっているのは、筆削れしたまま書いたためであろう。「教」の字は上浦A遺跡A地点でも見られるが、現在のところ県内では他に類例はない。

###### SK64 (11・12)

11は胎土A群の有台杯と思われる。12は胎土C群の有台杯で口径11.5cm、V期に属するものと考えられる。

###### SK108 (17~25)

この土坑は下部が一括埋立て、上部はレンズ状堆積である。その上部層を剥いだところから土師器無台椀・須恵器無台杯・杯蓋が出土した(図版48)。遺物は食膳具のみである。17・18はどちらも胎土B群の須恵器無台杯である。17は底部外面に墨書きされる。「○」の記号と考えられる。上浦A遺跡A地点でも出土している。18は内外面に墨痕が残る。形状から、体部を打ち欠いて硯に転用したものと思われる。17~24は土師器無台椀である。24は内外面とも体部と底部の境が明瞭で、底部切り離し径より見込み径が大きい。このような器形はこの1点のみである。

###### SK53 (28)

非クロコの甕A類である。256~260のような平底の底部がつくものと思われる。ハケ目の条は細かい。工具幅は1cmほどと推定される。本遺跡出土土器のうちでも最古の部類に入るものであろう。

###### SK111 (31)

須恵器無台杯のII類、胎土D群である。底面はほぼ反時計回りにヘラケズリされる。底面がヘラケズリされるものは、調査区ではこの1点のみである。破片はSD29出土土器と接合した。

###### SD51 (34~47)

この溝と、隣接するSD53から復元できる土器が比較的まとまって出土した。須恵器はほぼ全て胎土B

群である。34・35は須恵器無台杯で両者ともI A2類である。36は長頸瓶B類である。2つに割れた状態で数十cm離れて出土しており、1つはSD53との合流地点から検出された。体部内面は一部炭化物が付着している。38～40は土師器無台椀で、38はB1類、39はC1類である。どちらも器壁がやや厚手である。41～43は小甕である。41・42がB類、43はC類であるが口縁のつまみ上げが弱く、法量に比して器壁が厚い。45は鍋C類で、口縁部外面に厚くススが付着している。46は長甕B類で、47と同一個体の可能性がある。

#### SD53 (48～59)

SD51と似た様相を示す。48・49は須恵器無台杯で、胎土B群である。須恵器食膳具は全て胎土B群のものであるが、50の短頸壺は胎土C群である。51・53は土師器無台椀でそれぞれB類・C類である。52・54は黒色土器無台椀B類である。52は径高指数41で調査区では最大値である。55は小甕C類、56・57は小甕D類である。56の口縁つまみ上げは上端近くだけであるのに対し57は長く、屈曲部に凹みが認められる。58・59は鍋である。58は端部が丸いB類としたが、内面の凹みが少ない。鍋にしては器壁が薄い。

#### SD43 (60～62)

60は須恵器有台杯D1類で、胎土D群はこの1点のみである。赤褐色を呈す。61は内面黒色土器無台椀である。器形は灰釉陶器を模倣していると考えられる。SD52出土破片と接合した。

#### SD101 (69～74)

69は須恵器無台杯I A2類である。70は短頸壺の肩部と思われる。自然軸がかかること。71の長甕底部は平行タタキがなされる。73・74は鍋でどちらもA類である。73は口縁端部の面に沈線状の凹みが入る。74の体部はカキ目の後、一部ハケが施される。

#### SD22 (78～80)

78は短頸壺である。肩部に沈線が2条入り、体部下半はヘラケゼリされる。見込みはロクロナデ成形後にナデがなされる。方向は一定ではなく、放射状になっている。79は瓶類の底部であるが、114(淨瓶または水瓶)と同一個体の可能性もある。

#### SD3・6・29 (81～105)

これら3条の溝は第IV章で述べたとおり隣接しており、SD6からSD3・29が分岐している。よって遺物も接するものが多く、まとめて説明したい。81は須恵器杯蓋C4類である。胎土B群だが砂質が強くざらざらしている。黒色の吹き出しが多く見られる。83～87は他の遺構と接合している例もあるが、SD29から出土したものである。83は短頸壺である。肩部から体部下半まで自然軸がかかること。底部内面はロクロナデ後一方向にナデが施される。84は土師器杯で、この1点のみである。内面体部下半はヘラミガキがなされる。6世紀代から続く形態のものである。86は土師器の鉢と思われる。ただし小片からの復元実測のため、口縁部の内湾する角度がもう少し立ち上がり気味になる可能性はある。88の須恵器杯蓋は口径16.0cmと大きい。胎土D群で、赤褐色を呈す。7世紀末～8世紀前葉のものであろう。89～94はSD3・29の分岐点付近からの出土である。90は長頸瓶の口縁部と体部下半で、同一個体と判断した。頸部に凸帯を持ち、V期に属すると思われる。頸部は打ち欠かれている。95～98はSD6とSD3・29の分岐点付近から出土したものである。97は口径21.4cmと大きいが器壁は薄い。頸部が長いため長頸瓶としたが、別器種の可能性も考えられる。99～105はSD3からの出土(100の破片はSD6と接合)である。101の須恵器有台杯の底部は最大厚15mmもある。口径は推定16cm以上になり、7世

紀末～8世紀前葉に位置づけられよう。102は短頸壺の蓋である。縁部は広い面を持ち、内端接地である。外面全面に自然軸が厚くかかる。104は甕A類で、口径61.2cmと調査区内で最大である。長くのびる口縁部に沈線を2段配した後、波状文（6条1単位）をめぐらせる。105は鉄鉢模倣の須恵器である。SD2との分歧点付近から出土した。口縁は内湾し、端部に面を持つ。体部下半はロクロケズリされる。胎土D群、8世紀前半頃に属するものであろう。

#### SD2（106～109）

106・107は胎土B群須恵器無台杯である。胎土B群の土器は粘土質のものが多いが、107はやや砂質で内面は灰褐色を呈す。109は甕C類で、肩部が張るタイプである。器面は全面赤褐色を呈するが、硬質である。当具痕は同心円の縁辺部を使用しており、体部上半では左回りに進んでいるが、下半では方向が一定ではなく交差している。

#### SD4（110・111）

110は提瓶の口縁と推定されるが器壁が厚い。口縁端部は内傾し面を有する。外面は口縁上端を除き全面カキ目に入る。また沈線が2条入りその間に斜め方向のキザミが施される。

#### SD78（113）

ゆがみが著しく、口縁は梢円形となる。体部下半から底部はロクロケズリされる。見込み全面に自然軸がかかる。

#### SD79（115）

円面観の脚部である。甕の口縁部を逆さにした器形で、長方形の透かしが入る。実測図では透かしが巡るものとして復元したが、透かしは巡らず複数箇所にあけられた可能性もある。

#### SD82（126）

長頸瓶A類である。頸部と体部・底部片から復元実測した。外面は自然軸が厚くかかりオリーブ灰色を呈す。頸部の付け根部分は打ち欠いた痕跡が見られる。破損後転用されたことが窺える。

#### SD103（127～132）

須恵器は127の瓶類体部以外は小片が数点出土しただけであるが、土師器は比較的多く、特に無台椀が多く出土した。器形のわかるものではA類は認められず、器高の高いものが多い。132は内面が赤彩されている。

#### SD80（138・139）

138は須恵器無台杯II A類である。底部は厚く丸底で、口縁部は外反する。139は須恵器の杯蓋で返りのあるものだが、返りは扁平である。酸化焰焼成である。どちらも7世紀末から8世紀前葉に属するものと考えられる。

#### SD69（140・141）

141は土師器甕である。頸部に沈線が2条入る。このように口縁・頸部に沈線を有する「沈線文土師器」は主に東北北部に分布し、北海道との関わりを持つ地域色の強い土器と理解されている〔宇部2000〕。胎土は在地のものと同じであるが、搬入品かどうかは判断できない。沈線は浅いがナデによる段ではないこと、また多条であることから、8世紀代のものと考えられる。県内では豊栄市松影A遺跡〔加藤ほか2001〕に類例がある。また、東北と関連するものでは、砂底土器と思われる底部破片が出土している（図版73）。砂粒は径1～2mmで、県内他遺跡で見られるもの（山三賀II遺跡など）よりも砂粒が粗いが、東北北部でも粗粒のものが存在するという。時期は9世紀後半から10世紀に限定されるものであるが、

本県ではそれらは7世紀代に位置づけられており、検討が必要である。本遺跡出土の破片は包含層出土であるため、141に共伴するものかどうかは不明で時期の特定は困難である。今後の資料増加を待ちたい。

#### SD61 (143・144)

143は胎土C群の須恵器無台杯である。体部は灰白色、底部は橙色を呈し軟質である。器壁は厚い。底部には2本の平行線状のヘラ書きがある。底部中央よりやや外に偏り、5cm前後の線が2本、1.5cm間隔で書かれている。144は武藏型の台付甕であろう〔荒井ほか1999〕。体部が張り球胴を呈すと思われる。また体部上半からヘラケズリされ器壁が薄い。胎土は在地のものと異なり黒褐色を呈し、石英・長石などの混和材を含まない。8世紀代のものと考えられる。

#### SD1 (153～158)

昭和時代の土地改良以前に流れていた溝で、新しい遺構であるが、平安時代の遺物も流入している。

154は甕B類、胎土B群である。肩部の上方はタタキの後ロクロナデがなされている。外面は全面格子タタキであるが、当て具痕は体部上半が同心円タタキ、下半は平行タタキである。157は須恵器無台杯。墨書きされているが、破片のため解読不能である。「二」の一部である可能性もあるが、上浦A遺跡で「山」や「川」(または縦線3本の記号か)の文字が見られることから、どちらかの文字である可能性も考えられる。底部には板状圧痕が見られる。胎土B群である。

#### SK1 (159～161)

160は括れ鉢で、これ1点のみである。口縁部は外側につまみ上げられ、端部は水平な面を持つ。体部上半に角状の把手が付される。カキ目が全面に施され、底部で同心円状に収束する。体部に最大径を持つ器形は珍しい。胎土C群である。

#### 包含層 (162～272)

**須恵器 (162～237・245)** 162～181は無台杯である。162は厚手で、底部厚1.1cmに及ぶ。内面全面、特に見込み部分に自然釉がかかる。163は138と同類のもので、丸底に口縁外反という要素を持つ。7世紀末から8世紀前葉のものであろう。164～170は胎土B群である。167は底面に墨書きされ、「眞」という字と考えられるが、類例が見られず判読できなかった。168は酸化焰焼成で橙赤橙色を呈するが、胎土はB群のそれと同じであり、I B類とした。170はI B類である。やや丸底気味であり、より新しい様相を呈す。10世紀前葉に位置づけられる。171～174はII B2類、175～181はII B3類である。口縁は体部から直線的にのびるものが多い。181は歪んでおり、本来は破線で書いたような器形になると思われる。182～193は杯蓋である。返りのある1類については、図化できるものは全て実測したため多くあるように見えるが、全体に対する比率はわずかである。184は内面に墨痕、外面にタル状のものが付着している。内面はやや摩耗している。185は縁部が長い。191は胎土C群で径12.8cm、縁部は丸く收まりV期に属するものと考えられる。194～210は有台杯である。器形は、立ち上がりが直線的で口縁の開きが少ないものが多い。高台の形状は、196～198のような内端接地で四角形のものがやや目立つが、様々な形が認められる。194は転用甕であろう。底部端に沿って打ち欠かれており、平面形を丸くしている。内外面とも摩耗し、器面は滑らかである。195は底部が高台よりも盛り上がる。体部下半はロクロケズリされ、東海系の技法が認められるが、高台の形態は畿内・北陸系であり、両者の影響がうかがえる。底部外面と高台端部の面は摩耗し器面が滑らかになっている。高台の内側は墨痕が付着する。高台端部は接地面だけでなく全面が摩耗しており、単なる転用甕と言え得るのだろうか。どのように使用されたのか興味深い。196～198はそれぞれ胎土が異なるが器形が近似している。196は推定

口径16cm前後で、いずれも古い時期に位置づけられよう。203は体部下半がロクロケズリされる。口径も14cmを超えると推定され、7世紀末から8世紀前葉に属すると考えられるものである。204～208は杯身に比して高台径が小さいものである。208は口径も11.2cmと小さく、上述のものよりも新しい時期のものである。207は胎土A群で、体部がほぼ直立し口縁部が外反する。このような器形のものは少ない。209は胎土B群唯一の有台杯である。210はD2類で1点しか出土していない。このように高台が長く深身のものは頸をみない。体部下半はロクロケズリにより稜を有する。高台接合時、底部中央までロクロナデを施している。211は稜枕とした。小型で、つくりが丁寧である。217～225は壺・瓶類である。219は瓶類の口縁だが、広口瓶になる可能性もある。221の底部はタタキ痕が消しきられずに残っている。223・224は小型瓶である。体部の器形は長頸瓶A類・B類にそれぞれ対応している。224の底部内面はロクロナデによる凹凸が大きく、中央が角状に盛り上がっている。225は口縁部が欠損している。筒状で、上部に幅3mmの沈線が2条間隔をあけてめぐる。提瓶の口縁部であろうか。深身の筒状を呈する杯の可能性も否定できない。226の底は体部外面に自然軸がかかる。特に頸部の屈曲部には厚い。当て具痕から、時計回りに整形したことがうかがえる。232は器壁が厚く、平均15mmほどである。口縁端部の下部は深い沈線を引いたように凹む。233～235は底の体部破片である。233の内面は2種類の当て具痕が認められる。横方向は平行タタキ、縦方向は平行ではなくやや円弧状に重なっており、同心円当て具の縁辺部を使用しているのかもしれない。これら2種は互いに切り合っており、当て具を使用した順序が、例えば横方向→縦方向などといった単純なものではないことを示している。235は底の肩部である。内面は体部に向かって縦方向にハケ目が見られ、同心円当て具を切る。ハケ工具はカキ目で使用したものと同じであると思われる。236・237は横瓶である。236は側面に近い部分で、閉塞円盤の接合部分で割れている。側面側は磨滅している。237は半分しか残存していない。横瓶は製作時には立てて成形するものであり、両側面は対照になるとは限らないので反転圓化は行わなかった。内面の当て具痕を観察すると、側面側の同心円の縁辺部を用いた当て具痕の進行方向と、体部の同心円当て具痕の進行方向は一致しない。これは製作当初下側であったことを示すものと考えられる〔春日2001a〕。カキ目は見られない。口縁内面と側面内面に、自然軸がかかる。胎土はA群で、小縫が多く露出している。

**土師器 (238～244・246～272)** 238～245は無台椀である。241はA2類である。A2類で全形のわかるものはこの1点のみである。底部は「中」とへラ書きされる。242は糸切り痕が体部まで及ぶ。これは左回転であるが、左回転のものはごくわずかで、右回転のものが圧倒的に多い。246は須恵器模倣と考えられる有台杯である。高台は内端接地である。247は有台皿だが中央に径7mmの孔が開いている。類例を見ないが無台椀に穿孔した例は加茂市馬越遺跡で見られる。249～259は非ロクロの底である。外表面は縦方向のハケ。内面は横方向のハケ調整のものがほとんどである。数は少ないが底部にもハケ目が見られる(256・257)。259はタタキ目の可能性があるが、幅が一定でないため断定できない。261～263は小壺、264～267は長壺である。

非ロクロの底は5Dグリッド、特に5D1からの出土が多い。67は摩耗のため拓影が見づらいが、内面のタタキ目は平行タタキである。268は壺の底部と考えられる。底の口縁を逆さにしたような器形は一般的ではないようだが、吉田町助次郎遺跡〔春日2000〕で出土している。269～272は鍋である。ここでは口径50cm前後のもの(269・270)と35cm前後のもの(271・272)に分かれているが、全体からみると法量分化は認められない。

## 2) II 区

土器は小片がほとんどで、出土量は平箱で3箱にも満たない。

## SD33 (274・275・282)

274・275は須恵器無台杯である。274はI A1類である。底部と体部の境は明瞭で、直線的に立ち上がる。細かい白色粒子が多く見られる。275はII B3類である。胎土は精良、粘土質で器面は滑らか、混入物は少ない。282の土師器無台椀はC2類で法量は283とともに最大である。

## SD109 (280)

図上では表現できなかったが、かなり歪んでいる。胎土は非常に滑らかで緻密である。つまみの上面以外は自然釉が厚くかかり、一部他個体の溶着が見られる。

## SD25 (281)

甕B類でタタキ痕・当て具痕が非常に明瞭である。外面とも頸部と体部の境ではタタキ痕・当て具痕がロクロナデに切られる。口頸部を別作りして体部と接合した後にロクロナデを施したものと思われる。鉢分かと思われるものが付着しており、オリーブ黒色を呈す。

## 3 中世の土器・陶磁器

ごく少量だが、青磁碗・珠洲焼の甕・壺・片口鉢が出土した。284は龍泉窯青磁の碗で、鎬を持つ蓮弁文が施される。13世紀代に比定されるものである。285～288は珠洲焼である。285は壺である。口縁がつまみ出され断面嘴状になり、肩部はなで肩気味である。吉岡氏の編年【吉岡1994】で珠洲IV期に比定されよう。286は甕である。短く丸い口縁を有し、肩部はあまり張らない。珠洲IV～V期と思われる。287・288は片口鉢である。どちらも口縁端部が水平となり、287は内縫部がシャープである。鉢し目は1単位幅2cm前後で、8～9目である。両者とも珠洲IV期にあたると思われる。

## 4 土製品・石製品・金属製品

## A 土 製 品

289～292は手づくね土器と考えられる。底部のみが出土している。289はSK50、290はSK99出土。293～295は棒状の土製品である。形状は土錘に類似しているが、孔が開けられていない。つくりは粗雑であるため、土錘未完成の可能性も考えられる。すべて包含層出土である。296～299はカマドの支脚とされているものである。形態はそれぞれ微妙に異なる。299は体部が筒状で断面形も菱形に近く、他のものとは異なるが、法量からここに含めた。300・301は円筒状土製品である。300は外面全面ハケ目が見られ、輪積み痕が明瞭に残る。301は底部の厚さが4cm前後と厚いことから、円筒状土製品と判断した。302は紡錘車である。断面は台形を呈する。上面径は3.8cm、下面径は4.4cm、孔径は0.8cmを測る。303は輪の羽口である。端部は一部溶解している。直径は推定5.8cm、孔直径は推定2.2cmである。

## B 石製品

304～307は手持ち砥石である。304・305はくびれを持つが、306・307はくびれがなく直方体を呈するものと思われる。石材はすべて凝灰岩である。304～306は表裏・両側面に作業面を持つ。304の表面には断面皿状の浅い擦り溝が見られる。308は軽石製品である。表面は平坦面を持ち、中央に直径1.3cmの孔が両側から開けられる。右側面には人為的と思われる線状の溝が見られる。II区SD33から出土しており、所属時期は古代と考えられる。

## C 金属製品

309はSD3から出土した銅製の素文鏡である。直径4cm、厚さ0.15cmを測る。縁部は内傾した面を持つ。文様はない。県内では現在のところ類例はない。北陸では石川県羽咋市寺家遺跡〔小嶋ほか1988〕、福井県敦賀市松原遺跡〔山口1986、川村俊1988〕から出土しているが事例は少なく、かなり希少なものである。時期は8世紀代から9世紀初頭と考えられる。310は銅製品だが、種類・用途は類例が見られず不明である。握りを有する把手のようなものが逆L字状の板についている。板のもう一方には断面円形の突起がつく。突起は基部径1.4cmだが、先端は細くなっている。311～313は釘である。311は断面方形を呈す。SK7から出土しており、古代に帰属するものと思われる。312は一端を折り曲げて頭部を作り出している。SD1からの出土であるため所属時期は不明で、新しい時期の可能性もある。313は全長3.9cmと短いが、釘の一種であろうか。314は中世の鉄鎌である。上端は欠損しているが、二又に分かれ逆八の字状となる。上部は断面扁平だが先端部は方形となる。315は錢貨である。天祐通宝、初鋤年度は1017年である。また、至道元宝（初鋤995年）が1点、II区から出土した（調査時の台風による遺物紛失で掲載不可）。

## 5 木製品

木製品の出土した遺構は限られており、数は少ない。用途の推定できるものでは農具・容器・食事具・祭祀具が認められるが、大半が用途不明品である。木製品の分類・呼称については『木器集成図録 近畿古代編』〔奈良国立文化財研究所1985〕に従った。

### A I 区

#### SK62 (319・320)

319は先端を2方向から加工しているが用途は不明である。樹種はスギである。320は箸状木製品と思われる。

#### SK61 (321～324)

321は挽物の容器で、稜を有する。口径40.0cm、厚さは0.8cmを測る。体部は稜というより1本の降線のような段を有する。口径40cmの椀皿類は類例が見られない。口径から見ると大型の盤となるが、器壁が薄い。段を有することからも椀皿類としておきたい。樹種はケヤキである。木取りは横木地を絞目取している。内面には黒色漆が塗られている可能性もあるが、器面が剥落しており不明である。322は斎串と考えられる。頭部は山形を呈し筒を持つ。左右に抉りが入っている可能性もあるが欠損のため不明

である。323は箸状木製品としたが、他のものよりひと回り大きく、最大径0.9cmを測る。324は先端が削られ穿孔されている。用途は不明である。これらの所属時期について詳しく述べるが、古代と考えられる。

#### SD2 (326・327)

326は下部が欠損しているが、上部と対称的な形状になると思われる。上部に1か所穿孔され、左側に半三角形状の切り込みを有する。草履の芯と考えられるもので、左右対称形の2枚を用い1足足とする。広島県草戸千軒町遺跡〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1996〕で多く出土しているが、県内では白根市馬場屋敷下層遺跡〔遠藤ほか 1983〕に類例が見られる。327は下端部に加工が施されるが、種類は不明である。

#### SD3・29 (328)

刃物等の柄と考えられる。途中から二叉に分かれており、基部を挟んで固定するタイプのものと思われる。しかし、二叉になっている部分には何かを巻きつけたような痕跡は認められなかった。孔は先端の1か所のみである。基部は丸く加工される。断面形は楕円形で、径2.3～3.3cmを測る。樹種はスギである。

#### SD94 (329・330)

どちらも箸状木製品である。面取りされるが断面はほぼ方形である。樹種はスギと考えられる。

#### SB5 (331～333)

8基の柱穴のうち、6基で柱根が検出された。心持丸太材ではなく、分割された材を使用している。樹種はクリである。331は端部を平坦に、断面を方形に加工している可能性があるが、腐蝕が著しいため不明である。腐蝕のため加工痕もほとんど見えない状態だが、側面下部にわずかながら認められる。332も腐蝕が著しく、断面形はもとの形状をとどめていない。333も331同様、端部を平坦に加工していると考えられるが、腐蝕のため不明である。

#### 包含層 (334・335)

334は杓子状木製品と考えられる。持ち手にあたる部分は欠損しているが、幅約3.7cmと推定される。表面に刃物で切りつけたような痕跡が残る。また、上下に溝状の凹みが見られる（アミかけの部分）。縄等で縛った痕跡の可能性もある。335は板状で、表面に刃痕が見られる。上・左右は欠損しており、形状から容器類の底板である可能性も考えられる。

## B II 区

#### SE36 (337・338)

この井戸は覆土にタール状のものを多く含んでおり、遺物にも付着していた。スクリーントーン部分はタールの付着を示す。337は円形曲物の底部である。側板は底板の外側に巻かれ、木釘で固定される。この固定法は、8世紀以降主流の方法という〔上原 1996〕ことで、土器の年代と一致する。しかし北陸北東部では該期に皮継じの曲物が多く見られ〔川村誠 1997〕、時期の特定は難しい。338は漆器椀である。内外面とも黒色漆が施されていると思われる。底部外面上にはロクロ挽き工具の固定痕・ロクロ挽き痕と思われる痕跡が残る。また、細かい擦痕が見られる。内面にはタール状のものが固まって付着している。樹種はウコギ科である。337・338は井戸からタール状のものを汲み取る容器として使用された可能性も考えられる。

**SB39 (340)**

P4 から出土した柱根で樹種はスギである。断面は台形状を呈し、端部は平坦に加工される。表面には面取りのような痕跡を残す。裏面左側も面取りされる。平坦にするためのものと思われる。

**SB51 (341)**

P4 出土である。樹種はクリである。腐蝕が著しく進んでおり、端部の加工は部分的にしか認められない。心持丸太材を使用している。

**包含層 (336・339)**

336 は筈状木製品の完形品である。1面には面取りの痕跡が残る。339 は曲物の側板と考えられる。目釘痕が1か所認められる。ごく一部に黒色の付着物が認められるが、特定できない。部分的であることから、欠損した際の接着痕の可能性も考えられる。また、337・338 同様、汲み取り容器として使用された可能性も否定できない。

# 第VI章 自然科学分析

## 1 珪藻・花粉・植物珪酸体分析

上浦遺跡の発掘調査では、方形に巡る溝状遺構や一時に埋め戻された多様な形態を有する土坑が多く検出されている。新潟県埋蔵文化財調査事業団からの依頼により、当社技術1名が現地調査及び試料採取を行い、調査担当者と協議の上、以下に示す目的を設定して自然科学的な調査を実施することとした。

### 溝状遺構に関する調査

方形に巡る溝状遺構からは遺物がほとんど出土していないため、構築時期を推定できる情報に乏しいが、平安時代の遺物包含層を掘り込んで構築されているものがあり、平安時代以降の所産と推定されている。性格・用途については不明な点が多く、これらに関する情報を得るために遺構埋植物を対象に珪藻化石（水域環境）、花粉分析（古植生）、植物珪酸体（イネ科植物相と稻作の有無）の分析を実施した。

### 土坑に関する調査

平安時代の遺物包含層を掘り込んで構築された土坑が検出されているが、考古学的所見からはその用途が不明である。これまでの発掘調査事例から墓壙・貯蔵穴・井戸などがあるとして想定されているが、その識別は難しい。そこで今回、墓壙の可能性について検証するためにリン・カルシウム分析を、また井戸の可能性について検証するために珪藻分析を実施した。

### A 試料の採取

本遺跡の基本層序は、下位から大きくV～III、I層に区分される（第三章参照）。試料は層位試料としてSD109から7点（図版25）、SX108から4点（図版26）、SK95から13点（図版24）、25Cグリッドから

遺構名	時代性	層序	試料番号	土質等	分析項目				
					珪藻分析	花粉分析	イネ属同定	植物珪酸体分析	リンカル分析
SD109	平安時代以降	III b	3	暗灰黄色粘土質シルト	○	○	○	○	
SX108	平安時代以降	III b	3	オリーブ褐色シルト	○	○	○	○	
25C	平安時代以降	III b	3	黒褐色粘土	○	○	○	○	○
	平安時代	IV	5	黒褐色粘土	○	○	○	○	
SK95	平安時代以降	1	1	黒褐色粘土質シルト	○				○
		3							○
		4		オリーブ褐色粘土質シルト					○
		5		黒褐色粘土質シルト					○
		6		黒褐色粘土質シルト					○
		7		黒褐色粘土質シルト	○				○
		8		黒褐色粘土質シルト					○
		9							○
		10		暗オリーブ褐色粘土質シルト					○
		11		黒褐色粘土質シルト					○
		12							○
		13							○

第1表 分析試料一覧

6点（第7図-b）採取した。分析には、これらの試料から目的に応じて選択したものを使用した。第1表に採取試料と分析項目を示す。

## B 分析方法

### 1) 珪藻分析

湿重約10 gについて、過酸化水素水と塩酸により試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去したうえで珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、L字形管分離で砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作成する。

検鏡は油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、珪藻殻が半分以上破損したものについては、同定・計数を行っていない。珪藻の同定については、K. Krammer & Lange-Bertalot [1986～1991]などを参考にした。

群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生・海水～汽水生・汽水生・淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は塩分・pH・水の流動性の3適応性についても生態分類し第2表に示した。

堆積環境の変遷を考察するために、珪藻化石群集変遷図（第13図）を作成した。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、2%以上の出現率を示す分類群についてのみ表示した。図中には海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・水流の相対頻度について図示した。また、産出した珪藻化石が現地性か他所から運搬堆積した異地性の化石であるか否かを判断する基準の一つとして、殻の破損していないものを完形殻、破損したものを非完形殻として表示する。

### 2) 花粉分析及びイネ属同定

花粉・胞子化石は、湿重約10 gの試料についてKOH処理、重液分離（ZnBr<sub>2</sub>：比重2.2）、HF処理、アセトトリス処理の順に物理・化学的な処理を施して、試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入し、プレパラートを作成した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数を行う。また、検出されるイネ科花粉については、ノマルスキーミク干渉装置を使用して表面微細構造を観察し、発芽孔周辺の肥厚状況・花粉粒径を考慮しながら、栽培植物とされるイネ属と他のイネ科に区分する。

結果は第3表に示すが、表中で複数の種類をハイフオン（-）で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

### 3) 植物珪酸体分析

試料約5 gについて、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、重液分離（臭化亜鉛：比重2.3）を順に行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。これをブリュウラックスで封入してプレパラートを作成する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラートを全面走査し、出現するイネ科の植物珪酸体を近藤・佐瀬 [1986]

を参考に分類した。その中でイネ科植物の葉部（葉身と葉鞘）の短細胞に由来する植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体）及び葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体）を同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を第4表に示す。また、各種類（Taxa）の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図（第14図）を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。

#### 4) リン・カルシウム分析

測定方法は、土壤標準分析・測定法委員会〔1986〕・土壤養分測定法委員会〔1981〕・京都大学農学部農芸化学教室〔1957〕・ペドロジスト懇談会〔1984〕などを参考にして、以下の操作工程で分析を行った。

試料を風乾後、軽く粉碎して2mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105°C、5時間）により測定する。風乾細土試料2gをケルダール分解フラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO<sub>3</sub>）約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO<sub>4</sub>）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容し濾過する。濾液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）濃度を測定する。別に濾液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン含量（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

### C 結 果

#### 1) 珪藻化石の産状（第2表・第13図）

珪藻分析は、25Cグリッドで2試料、SD109で1試料、SX108で1試料、SK95で2試料の合計6試料を選択して行った。そのうちSK95試料番号7からは珪藻化石が多産するが、他の5試料は極めて少ないと、または皆無であった。産出した珪藻化石は、海水生種・汽水生種をわずかに含むものの大半が淡水生種で構成され、24属・47種・13変種・種不明（属レベルまでしか同定できなかったもの）4の計64分類群であった。

#### 25Cグリッド・SD109・SX108

最も産出量の多い試料でも12個体であり、特に卓越する種は認められず、これといった特徴が見出せない。ただ、25Cグリッド試料5において、海水生の絶滅種が認められた点が他の試料と異なる。

#### SK95

試料1で産出量が少なく27個体であったが、試料7で多産している。試料7の産出種群の特徴は、珪藻の3適応性についてみると、以下のような傾向が認められる。塩分濃度に対する適応性では、大半が貧塩不定性種であり、全体の70%を占めている。貧塩好塩性種及び貧塩嫌塩性種は、両者とも20%以下である。pHに対する適応性では、好アルカリ性種が最も多く55%程度産出しており、次いでpH不定性種が25%である。好酸性種は15%と低率である。流水に対しては、流水不定性種が60%程度を占めており、好流水性種は約20%、好止水性種が15%の産出率を示す。

特に卓越するものは認められないが、比較的高率であったものとして流水不定性種の *Rhopaliodia gibberula*、好止水性種の *Stauroneis phoenicenteron*、*Neidium ampliatum*などがある。

Species Name	Ecology			SD109 3	SX108 3	25C グリフ 3	SK95 5	I 1	II 7
	H.R. Euh	pH Euh	C.R. Euh						
<i>Denticulales hyalina</i> (Schradler) Simonsen	Euh			—	—	—	1	—	—
[B] <i>Purula subcasea</i> (Ehr.) Cleve	Euh			—	—	—	1	—	—
[A] [B] <i>Thalassiosira nitczschiana</i> Grunow	Euh			—	—	—	1	—	—
<i>Nitzschia cornicula</i> var. <i>subcornicula</i> Grunow	Euh-Meh			—	—	—	1	—	2
[E2] <i>Nitzschia longissima</i> var. <i>subtilis</i> Grunow	Meh			—	—	—	—	—	1
± [D] <i>Achmatthes jaegeri</i> H. Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	—	—	—	—	1
<i>Anabaena cylindrica</i> (Kutz.) V. Heurck	Ogh-ind	al-il	unk	—	—	—	1	1	4
[M] <i>Audouinella gracilis</i> (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	—	—	—	1	—	1
<i>Aulosphaera taikwa</i> (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	1	—	—	—	—	—
<i>Caloneis bacillaris</i> (Grun.) Merezhkowsky	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	—	—	—	—	11
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	—	—	—	1
<i>Caloneis silicula</i> var. <i>intermedia</i> Mayer	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	—	—	—	2
<i>Cyclotella</i> sp.	Ogh-ind	unk	unk	—	—	—	—	—	1
[O] <i>Cymbella ehrenbergii</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-bi	—	—	—	—	—	1
<i>Cymbella heteropoda</i> var. <i>minor</i> Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph	—	—	—	—	—	—
[O] <i>Cymbella nemiciformis</i> Auerwald	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	—	3
± [E] <i>Cymbella stellata</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	—	4
± [K] <i>Cymbella sinuata</i> Gregory	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	—	—	—	—	1
± [K] <i>Diatomella bihamata</i> var. <i>mediterranea</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	—	—	—	—	1
<i>Diplomis parva</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	—	2
<i>Diplomis</i> sp.	Ogh-ind	unk	unk	—	—	—	—	—	—
<i>Eudorina cerasodes</i> var. <i>undulata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	—	—	—	—	—	1
[O] <i>Eunotia pertusalis</i> var. <i>minor</i> (Kutz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ind	ind	—	—	—	—	—	1
[J-B] [O] <i>Eunotia praeprusa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	—	—	—	—	—	6
[P] <i>Festuella rhomboides</i> (Ehr.) De Toni	Ogh-hob	ac-bi	l-bi	—	—	—	—	—	2
<i>Fraudia vulgaris</i> (Tiwatl.) De Toni	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	—	1
[O] <i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	l-ph	—	—	—	—	—	1
<i>Gomphonema parvum</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	—	—	—	13
± [E] <i>Gomphonema punctatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	—	—	—	1
[J] <i>Gomphonema rotundatum</i> Fricke	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	—	1
J-A <i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	—	—	—	5
[K] <i>Melosira varians</i> Agardh	Ogh-hill	al-bi	r-ph	—	—	—	—	—	1
± [K] <i>Mendion circularis</i> var. <i>constricta</i> (Ralfs) V. Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	—	—	—	—	—	—
J-1 <i>Nanocystis bryosiphon</i> Bebe-Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	—	—	—	1
± [J] <i>Nanocystis contorta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	—	—	—	1
± <i>Nanocystis cyprina</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	ind	—	—	—	—	—	1
[O] <i>Nanocystis elongata</i> (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	—	—	—	—	5
<i>Nanocystis elongata</i> var. <i>gracilis</i> (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	—	—	—	—	6
J-1 <i>Nanocystis matica</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	—	2
<i>Nanocystis papula</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	—	—	—	5
<i>Nanocystis papula</i> Cleve	Ogh-hob	ind	ind	—	—	—	—	—	1
± [E] <i>Nanocystis viridis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	—	—	—	—	9
[K] <i>Nanocystis viridis</i> var. <i>rostellata</i> (Kutz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	—	—	—	—	1
Nanocystis viridis	Ogh-ind	ind	l-ph	—	—	—	—	—	12
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-hill	al-il	ind	—	—	—	—	—	4
<i>Nitzschia obesa</i> var. <i>scopulifera</i> Grunow	Ogh-hill	al-il	ind	—	—	—	—	—	5
± <i>Nitzschia palma</i> (Kutz.) W. Smith	Ogh-ind	al-bi	ind	—	—	—	—	—	7
<i>Nitzschia tricholeuca</i> var. <i>victoriae</i> Grunow	Ogh-hill	al-il	ind	—	—	—	—	—	3
[O] <i>Pinnularia acutispera</i> W. Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	—	—	—	—	—	1
[O] <i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	—	—	—	—	—	6
<i>Pinnularia microstaurina</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	al-l	l-ph	—	—	—	—	—	1
± <i>Pinnularia microstaurina</i> W. Smith	Ogh-hob	ac-il	ind	—	—	—	—	—	5
<i>Pinnularia microstaurina</i> (Ehr.) W. Smith	Ogh-hob	ac-il	ind	—	—	—	—	—	3
± [B] <i>Pinnularia molarius</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	—	5
<i>Pinnularia repens</i> Hantzsch	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	—	1
J-B <i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	—	8
[O] <i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	—	—	—	—	—	4
<i>Pinnularia</i> sp.	Ogh-ind	unk	unk	1	—	—	—	—	—
<i>Pinnularia gibberula</i> (Ehr.) O. Muller	Ogh-hob	al-bi	ind	—	—	—	—	—	7
<i>Sauvagesia acuta</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind	—	—	—	—	—	25
[O] <i>Sauvagesia phoenicorum</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	—	2
<i>Syndidium albus</i> (Kutz.) Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	—	—	—	—	—	12
				1	—	—	—	—	3
Total Number of Diatoms				3	0	2	12	27	209

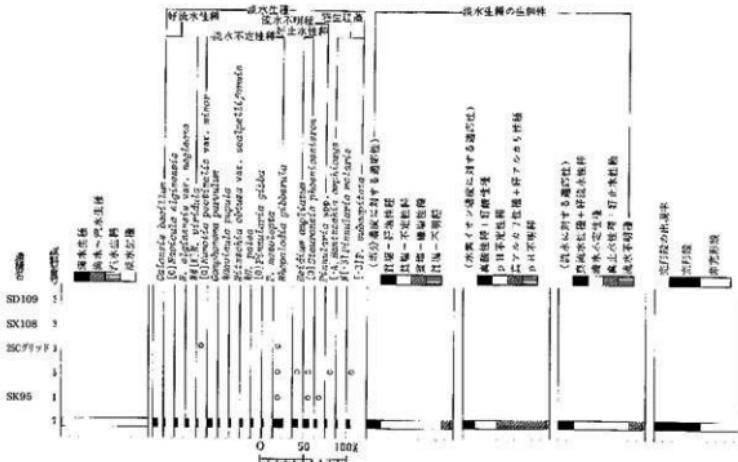
## 凡例

H.R. : 鹽分濃度に対する適応性	pH : 本藻イオン濃度に対する適応性	C.R. : 淡水に対する適応性
Euh : 海水生種	al-bi : 真アルカリ性種	l-bi : 真海水性種
Euh-Meh : 海水生種・汽水生種	al-il : 好アルカリ性種	l-ph : 好淡水性種
Meh : 汽水生種	ind : pH不明種	ind : 淡水不定性種
Ogh-ind : 貧塩不適性種	ac-il : 好酸性種	r-ph : 好淡水性種
Ogh-hob : 貧塩耐性種	ac-bi : 真酸性種	r-bi : 真海水性種
Ogh-ind : 貧塩不適性種	unk : pH不明種	unk : 淡水不明種

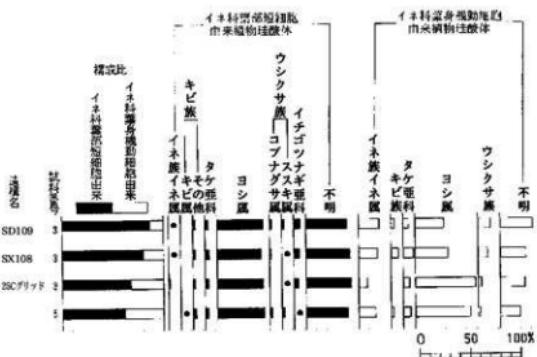
## 環境指標種

[A] : 外洋指標種, [B] : 内海指標種, [E2] : 淡水記載した指標種 (以上は、小杉1988による), [J] : 上流域河川指標種, [K] : 中～下流域河川指標種, [M] : 濱沿地性種, [O] : 沿岸底泥付着種, ± : 好鹼性種, ± ± : 好淡性種 (以上は、渡辺ほか1986による), [-] : 鮭生糞源 (-A) : A群, (-B) : B群, 伊藤・廻内1991による)

第2表 珪藻分析結果



第13圖 主要硅藻化石群集



出現率は、イネ科葉部短細胞壁酸体とイネ科葉身機動細胞壁酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満の検出した種類を示す。

#### 第14図 植物珪酸体組成

## 2) 花粉化石の産状 (第3表)

全体的に花粉・胞子化石の保存状態が悪く、4試料ともシダ類胞子が多産する。木本花粉ではマツ属・スギ属・ブナ属などが検出され、草本花粉ではイネ科などが検出される。この他、水生植物のサジオモダカ属・サンショウモや畑作植物とされるソバ属が検出される。なお、イネ科同定は保存状態が悪く、花粉化石の表面微細構造が観察できないため不可能である。

## 3) 植物珪酸体の産状 (第4表・第14図)

イネ科植物起源の植物珪酸体は、4試料とも短細胞珪酸体が多く検出され、機動細胞珪酸体は表面に多くの小孔 (溶食痕) が認められる。植物珪酸体組成は、25CグリッドとSD109・SX108で変化が認められる。25Cグリッドでは、ヨシ属短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とともに最も高率に出現し、キビ族・ウシクサ族・タケ亞科・イチゴツナギ亞科などを伴う。栽培植物のイネ属は試料5で約15%、試料番号3で約8%である。一方、SD109・SX108は、25Cグリッドと比較するとヨシ属機動細胞が減少し、イネ属機動細胞珪酸体・ウシクサ族機動細胞珪酸体が多産する。また、キビ族・タケ亞科・イチゴツナギ亞科を伴う。

## 4) リン・カルシウム分析の結果 (第5表)

## 25Cグリッド

リン：試料番号3では $0.75\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 、試料番号5では $0.76\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ を示し、両者は近似している。カルシウム：試料番号3では $3.57\text{CaO mg/g}$ 、試料番号5では $2.99\text{CaO mg/g}$ の値を示し、両者に明らかな差異が認められる。

## SK95

リン：試料1及び試料番号3～9の含量範囲は $0.73 \sim 1.36\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 、試料番号10～13の含量範囲は $0.75 \sim 1.40\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ である。

カルシウム：試料1及び試料番号3～9の含量範囲は $1.64 \sim 2.92\text{CaO mg/g}$ 、試料番号10～13の含量範囲は $1.58 \sim 2.24\text{CaO mg/g}$ である。

種類 (Taxa)	SD109 試料3	SX108 試料3	25Cグリッド 試料3	試料5
	試料3	試料3	試料3	試料5
木本花粉	—	—	1	2
モミ属	—	—	2	1
ツガ属	1	3	2	1
マツ属	44	26	38	31
スギ属	40	76	28	49
イチゴ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3	—	2	—
サワグルミ属-クルミ属	8	10	5	5
クマシデ属-アサガホ	11	14	6	12
ハンノキ属	32	44	36	64
ブナ属	38	30	31	17
ココナツ属-コナラ属	12	10	11	11
ココナツ属-カガシ属	7	1	5	1
クリ属	1	1	1	—
ニレ属-ケヤキ属	12	9	13	9
ウコギ科	3	—	—	—
ツツジ科	1	—	—	—
イボタノキ属	—	—	—	1
草本花粉	—	—	—	2
ガマ属	—	—	—	2
サンオモダカ属	3	4	2	2
オモダカ属	1	1	—	—
イネ科	407	364	220	319
カヤツリグサ科	78	78	62	149
ミズソイ属	—	—	—	1
クリ科	1	—	—	—
サンエタデ節-ウナギツカミ節	13	5	5	6
タデ属	—	—	1	—
ソバ属	1	—	—	—
アカザ科	1	3	—	1
ナデシコ科	17	12	3	5
アブラナ科	—	—	2	—
キカラシ属	1	1	—	—
セリ科	7	4	—	1
ゴキブリ属	1	—	—	—
ヨモギ属	19	25	10	28
他のキク科	1	1	—	—
タンポポ属	16	1	—	—
不明花粉	8	7	6	8
シダ類胞子	—	—	—	—
サンショウモ	1	1	—	—
シダ胞子	801	663	814	497
合計	213	224	179	203
木本花粉	567	499	305	514
草本花粉	8	7	6	8
不明花粉	802	664	814	497
シダ胞子	1590	1344	1304	1222

第3表 花粉分析結果

## D 水 域 環 境

珪藻は単細胞の藻類で、温度・塩分などには強い適応性を備えており、あらゆる環境に生育している。珪藻は一般に水中に繁茂し、種毎に細かな棲み分けを行っている。しかし、生育の場は水中ばかりとも限らず、ある一群は苔・土壌表面・木幹の表面などに付着生育し、これらは陸生珪藻と呼ばれている。すなわち珪藻は、植物が生育できるような場所はもちろんのこと、光の届く所であれば高等植物以上に生育範囲は広いと言ってもよい。また、生育時の個体数が多いため、現在の表層土壌中や地層中（火山岩・火成岩を除く堆積岩のみ）から珪藻の殻が化石として認められる場合が多い。最近では、地層中から多くの珪藻化石が見いだされることと、各種類が様々な環境で棲み分けを行っていることに着目して、地層の時代推定及び過去の堆積環境解明に応用されるようになってきた。

今回遺跡周辺の堆積環境を推定する目的で珪藻分析を実施したが、珪藻化石はほとんど検出されなかつた。珪藻化石が100個体以上の検出できない場合は、古環境の推定が困難であり、解析を行ったとしてもその信頼性は低いものとなる。今回のように珪藻化石がほとんど認められない原因は、いまだ充分に解明されていない。本報告では、参考のために現在までに提示されているいくつかの仮説を要約しておく。

① 常に乾燥状態にあるため、珪藻が繁茂できなかつた。

② 珪藻殻はpHの高い水中において溶解することが知られており〔小杉1988〕。堆積時には生育していたが、その後その付近の水のpHが高まつたためにほとんどの殻が溶解した。また、還元的環境下で同様な現象が生起した。

③ 珪藻は水中に溶存している微量のケイ酸を濃縮し、それを分裂増殖に利用するという能力を持つ

種類 (Taxa)	SD109 試料3					SX108 試料3					25Cグリッド 試料3				
	SD109 試料3	SX108 試料3	25Cグリッド 試料3	SD109 試料5	SX108 試料5	25Cグリッド 試料5	SD109 試料3	SX108 試料3	25Cグリッド 試料3	SD109 試料5	SX108 試料5	25Cグリッド 試料5	SD109 試料3	SX108 試料3	25Cグリッド 試料3
イネ科葉部短細胞珪酸体															
イネ族イネ属	1	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
キビ族キビ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
キビ族(その他)	17	8	5	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
タケベ科	21	15	7	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヨシ属	307	177	98	107	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウシクサ族コブナグサ属	12	5	—	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウシクサ族スキ属	11	4	2	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
イチゴナギセキ属	38	22	9	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明キビ型	143	92	64	53	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明ヒゲババ型	87	55	18	26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明モクチ型	46	29	14	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
イネ科葉身機動細胞珪酸体															
イネ族イネ属	21	18	8	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
キビ族	3	7	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
タケベ科	5	10	6	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヨシ属	29	33	61	78	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウシクサ族	12	9	3	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明	33	25	25	27	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計															
イネ科葉部短細胞珪酸体	683	408	220	232	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
イネ科葉身機動細胞珪酸体	103	102	103	144	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
検出個数	786	510	323	376	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
組織片															
イネ属短細胞列	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヨシ属短細胞列	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第4表 植物珪酸体分析結果

調査地点	試料番号	リン醣含量 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> mg/g	カルシウム含量 CaO/mg/g	土色・土性
基本標序	3	0.75	3.51	黒褐 (2.5Y3/1) C
25Cグリッド南壁	5	0.76	2.99	黒褐 (2.5Y3/1) C
SK95土坑	1	0.75	2.26	黒褐 (2.5Y3/1), 灰黄 (2.5Y4/2) CL
	3	0.88	1.97	黒褐 (2.5Y3/1), 灰黄 (2.5Y4/2) CL
	4	0.73	1.95	オリーブ褐 (2.5Y4/3) CL
	5	0.86	2.00	黒褐 (2.5Y3/2) CL
	6	1.32	2.92	褐 (10YR4/4), 黑褐 (2.5Y3/1) CL
	7	1.36	1.64	黒褐 (2.5Y3/1) CL
	8	0.88	1.92	黒褐 (2.5Y3/2) CL
	9	0.85	1.85	黒褐 (2.5Y3/2) CL
	10	0.75	1.58	暗オリーブ褐 (2.5Y3/3) CL
	11	1.40	2.24	黒褐 (2.5Y3/2) CL
	12	1.31	2.18	黒褐 (2.5Y3/2) CL
	13	1.18	1.83	黒褐 (2.5Y3/2) CL

(1) リン酸・カルシウム含量の単位は、ppm/mgで表示。

(2) 土色の判定は、マンセル色彩系に準じた新標準土色版 (農林省農林水産技術会議監修1967) による。

(3) 土性的判定は、土壤調査ハンドブック記載の野外地土性的判定法 (ペドロジスト懇談会編1984) による。

C…埴土 (ほとんど砂を感じないで耕耘する。)

CL…埴耕土 (わずかに砂を感じるが、かなり耕耘する。)

第5表 リン・カルシウム分析結果

ているが、水中に必要量のケイ酸が存在しなかったため珪藻は生育できなかった。

- ④ 層相が砂などの粗粒堆積物の場合、珪藻殻はシルト以下の細粒物質と挙動を共にするとき、細粒の物質と共に流出した。
- ⑤ 堆積速度が速く（洪水などで短時間のうちに堆積した場合）、堆積物供給量が多かったため、珪藻化石が取り込まれる量が少なかった。
- ⑥ 堆積後の続成作用により、殻が溶解した。

今回の分析試料は、層相がシルトまたは粘土であるため、④は考え難い。また、堆積時に③の状態であったとも考えられるが、これらは自然界において極めて稀な例と考えられる。

今回の場合は、極めて少ないながら珪藻化石が産出しており、殻の保存状態も良好なだけでなく溶解した跡が認められないことから、②・⑥のように堆積後に殻が溶解したものとも考えられない。また、産出種の傾向にばらつきが認められたこと及び本遺跡の立地も考慮すると、①か⑤のような状態にあったためと考えた方が妥当であろう。

## E 古植生について

花粉分析の結果、木本花粉のマツ属・スギ属・ハンノキ属・ブナ属などが、草本花粉のイネ科・カヤツリグサ科・ソバ属や水生植物のサジオモダカ属・サンショウモなどが検出される。これらの花粉・胞子化石は、当時の遺跡周辺に生育していた母植物に由来している可能性がある。しかし、4試料とも花粉化石の保存状態が悪いものが多く、しかもシダ類胞子が多産する。花粉・胞子は落葉広葉樹に由来する花粉に比べ、針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が分解しにくいなど、その種類により分解する度合いが異なるとされている〔中村 1967〕。これらを考慮すると、花粉・胞子化石の中には分解・消失しているものも含まれている可能性がある。今回の分析試料から得られた花粉化石群集は歪曲している可能性があり、当時の植生を充分に反映しているとは限らない。したがって花粉化石を統計的には扱わず、花粉分析結果から遺跡周辺の古植生を推定することは差し控える。

一方、植物珪酸体（プランクト・オパール）は、高等植物の植物体内に吸収された珪酸分を特定の細胞組織に蓄積させ、形成された珪酸質（ガラス質）のものである。そのため、植物珪酸体は植物が枯れて分解された後も、微化石となって土壤中に永く残す。特にイネ科植物では、種類により形態が異なる。これらから、植物珪酸体は過去のイネ科植物の復元、特に稻作の推定に応用されている。最近ではイネ科に限らずカヤツリグサ科・ツユクサ科・ムラサキ科などの草本類、さらに樹木類にも特徴的な形態の植物珪酸体が報告されている〔近藤・ピアソン 1981〕。

今回の調査では、25Cグリッド・SD109・SX108とも植物珪酸体が比較的良好に検出されたため、この産状から本遺跡周辺に生育していたイネ科植物について検討を行う。各試料ともヨシ属が多産し、キビ属・タケア科・ウシクサ族・イチゴツナギア科を伴うことから、本遺跡周辺にはこれらイネ科植物が生育していたと推定される。この中のヨシ属については、現在でも河道周辺の湿った場所に生育していることが多いことから、当時も遺跡周辺の湿った場所に生育していた可能性がある。

## F 遺構の性格について

### 1) 溝 状 遺 構 (SD109・SX108)

SD109とSX108の植物珪酸体組成は類似しており、ヨシ属が多産しウシクサ族・キビ族・タケア科・

イチゴツナギ亞科などを伴う。また、栽培植物のイネ属機動細胞珪酸体が多く検出される。このような産状は、25Cグリッド試料3・5と比較すると機動細胞珪酸体でヨシ属の出現率が低率であり、イネ属は同率もしくは高率である。現在の耕作土層における調査例〔近藤1988〕によると、10ha当たり500kgのイナワラを投入する作業を8年間続けた水田耕作土層では、イネ属機動細胞珪酸体の出現率が16%とされている。今回のイネ属機動細胞珪酸体の出現率は、25Cグリッド試料番号3を除いて16%以上を示す。また、平安時代以降の堆積物中でイネ属短細胞珪酸体列が検出されたことから、少なくとも平安時代以降に遺跡周辺あるいはその上流域で稲作が営まれていた可能性はある。しかし、細池遺跡の同様な遺構では、イネ属機動細胞珪酸体が検出される遺構での出現率が低く、イネ属機動細胞珪酸体が検出されない遺構も存在した〔小池ほか1994〕。また、花粉化石の保存状態が悪くイネ属同定が不可能であったこと、珪藻分析の結果、遺構覆土などは洪水堆積物の可能性があるとの知見を得たことなどから、このような特徴を有する遺構が稲作に関連しているかどうか断定できない。今後、考古学的所見と合せて考えていきたい。

## 2) 土 坑 (SK95)

骨などの遺物が遺存しない場合に、人体の痕跡を自然科学的分析手法で検証する方法としてリン分析と脂肪酸分析がある。現在では動植物を判定できる点やその種類までも判別できる点で、脂肪酸分析の方が優れた面の多い分析手法とされている。しかし、試料の取り扱いと分析に繁雑さが伴うことや土壤を対象とした場合の信頼性に若干の問題が残る。したがって、今回は考古学において土壤試料を対象にした分析調査事例が豊富で、分析操作が比較的簡便なリン分析と骨のもう一つの主成分であるカルシウム分析を加えて人体の痕跡を検証した。ただし、カルシウムについては土壤中の移動がリンよりも顕著であるため、ここではリンの富化が認められた場合の参考値としてみることにする。なお、土壤中で移動しにくいリンも年月の経過に伴って、当時の含有量をそのまま保持しているとは考えにくい。また、遺跡が所在する場所で現在まで農耕が行われ施肥が行われた場合には、肥料中のリンが土壤中を下方に移動して遺構埋積物を汚染するため、遺構内埋積物のベースとなるリンの含有量も測定し、土坑試料の結果と比較する必要がある。今回は、25Cグリッドを比較試料としてリン分析を実施する。

分析の結果、リン含量は0.75～0.76P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gである。土壤中に通常含有されるリン含量については、次のような調査例がある。Bowenの調査では中央値が2.0P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g〔Bowen1983〕、Bolt・Bruggenwertでは1.0～2.5P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g〔Bolt・Bruggenwert1980〕とされる。わが国でリン含量の比較的高い黒ボク土の平均値が未耕地で2.1P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g、既耕地で5.5P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gとされる〔川崎ほか1991〕。また、リンの自然賦存量は2.7P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g以下とされる〔天野ほか1991〕。なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべてP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gで表示した。これらの事例で推定される土壤中の自然賦存量は、最高でも3.0P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gと考えられる。言い換えれば、この値を著しく越える土壤では、外的要因（人為的影響など）によるリン成分の著しい富化が指摘できる。したがって、土坑埋積物の標準含量は土壤本来のばらつきを考慮すると0.8P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g前後が標準含量とされる。また、土壤中のカルシウム含量は普通1～500CaO mg/gといわれ〔藤貫1979〕、自然賦存量の含量幅がリンより大きいほか、土壤中での挙動もより拡散的で、土壤本来の含量と外的要因で富化された含量の区別をすることがリンに比較して難しい。試料3の高い原因が試料採取位置などを考慮すると、現耕作の影響による富化を想定できるが判然としない。したがって、ここではカルシウムの標準的含量は設定せずに、土坑埋積物の結果を考察する。

土坑埋積物のリン含量は、25Cグリッドのリン含量を著しく超える試料は認められない。しかし、土

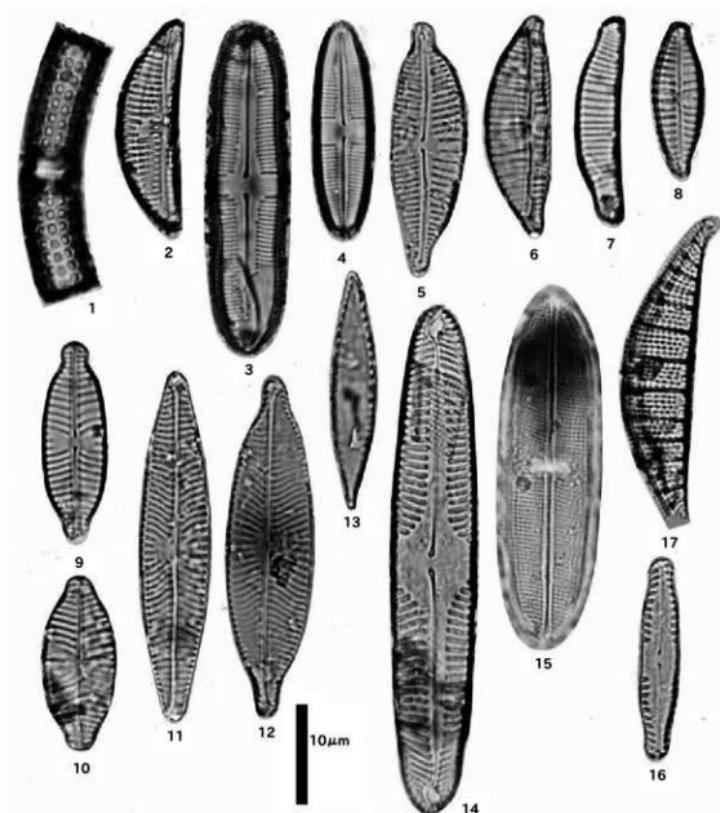
坑床面中央付近の試料（試料番号6・7・11・12）で、他の試料あるいは対照試料とは異なるリンの相対的富化が認められる。したがって、そこにはリン成分の高いものを遺存していた痕跡を指摘できる。カルシウム含量は、いずれも $3.0\text{P}_{2}\text{O}_{5}\text{mg/g}$ を著しく超える試料は認められない。そこで、各試料の相対差を特にリンの相対的富化が認められた試料を中心にして比較してみた。しかし、試料6以外は、他の試料に比較して必ずしも高い値とはいはず、そこにカルシウムの富化があるか否かは判然としない。以上の結果、本土坑に人骨等の痕跡を明確に指摘できるリン・カルシウムの著しい濃集は認められないが、基底直上の中央付近に土坑埋植物の自然貯存量とは異なるリンの供給があった可能性を指摘できる。すなわち、土壤中で移動し難いリンが、年月の経過に伴い当時の含有量をそのまま保持できなかつたと仮定するならば、この相対的富化を動物あるいは人体の痕跡として捉えることもできる。しかし、これまでのリン分析による人体の痕跡を指摘した事例によれば、リンの富化が認められる部分は局所的であると言われているが、リン分析だけで人体そのものを認定することができないこと、さらにその傾向がカルシウムに必ずしも一致しなかつたことから断定はできない。

珪藻分析の結果、試料1では産出量が少なかったが、殻の保存状態は比較的良好であり、堆積物の層相が砂であることから考えると、25Cグリッド同様に洪水等による一過性の堆積物であることが示唆される。試料7に関しては、流水不定性種の*Rhopalodia gibberula*、好止水生種の*Stauroneis phoenicenteron*、*Neidium ampliatum*などであるが、全体的には流水不定性の種群で構成される。多産種の*Ropalodia gibberula*は、海成層から検出された例も多く認められる〔安藤・南雲1983〕。また、群馬県で発掘された古代水田からも本種が多産しているが、このことは当時の水田の水が塩類を豊富に含んでいたことを示しているとしている〔田中1987〕。さらに、奥平温泉〔田中・中島1985〕、四万温泉〔福島1950〕など塩類を多く含んだ温泉からの報告も多い。*Neidium ampliatum*は、湖や池沼に普通に見られるが、時折流水中からも発見される種類とされる〔田中1987〕ほか、*Stauroneis phoenicenteron*は、至るところに認められる種であるが、Cholnokyは最適phを6.8に持つ種類であるとしている〔Cholnoky1968〕。このような多産種の特徴と流水不定性種が高率であったことを考慮すると、土坑内にはかつて水深の浅い水域が存在したと推定される。また、比較的高塩類の水域に認められる*Rhopalodia gibberula*が多産していることと、*Nitzschia palea*をはじめとする汚濁性種〔渡辺ほか1986・1988〕が認められることから考えて、水は停滞しており水中の塩類濃度も高く、汚濁した状態にあった可能性がある。

以上、リン・カルシウム分析からはリンの局所的富化がみられ、土坑内部に動植物の痕跡が認められた。ただし、カルシウム含量が低く、これが人骨の埋納等によるものかどうか疑問が残る。また、珪藻分析より一過性の堆積物により埋積されていることがわかった。一方、土坑中央底部にはかつて水が存在していたことが推定されたが、水の移動がほとんどないために汚濁した状態にあったと推定され、開口時に底部に水溜り状の水域が存在していたと考えられる。これらから、本土坑が飲料用井戸として利用されていた可能性は低く、墓壙や井戸以外の用途を考える必要がある。

## G ま と め

木本でマツ属・スギ属・ハンノキ属・ブナ属などが、草本ではヨシ属・ウシクサ族・キビ族・タケ亜科・イチゴソナギ亜科などのイネ科植物やカヤツリグサ科・ソバ属・サジオモダカ属・サンショウモなどの水生植物が生育していたことが示唆される。ただし、今回の結果では花粉化石の保存状態が悪く、遺跡周辺地域の古植生・耕作について充分に検討することは困難であった。今後、空間的調査や平面的な分析



1. *Aulacosira granulata* (Ehr.) Simonsen (SK95; 試料番号 7)
2. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) V. Heurck (SK95; 試料番号 7)
3. *Caloneis siccula* (Ehr.) Cleve (SK95; 試料番号 7)
4. *Caloneis bacillum* (Grum.) Mereschkowsky (SK95; 試料番号 7)
5. *Cymbella naviculiformis* Auerswald (SK95; 試料番号 7)
6. *Cymbella silesiacus* Bleisch (SK95; 試料番号 7)
7. *Enonota pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (SK95; 試料番号 7)
8. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (SK95; 試料番号 7)
9. *Navicula elginiensis* (Greg.) Ralfs (SK95; 試料番号 7)
10. *Navicula elginiensis* var. *nigra* (Krass.) Patrick (SK95; 試料番号 7)
11. *Navicula viridula* Kuetzing (SK95; 試料番号 7)
12. *Navicula viridula* var. *rostellata* (Kuetz.) Cleve (SK95; 試料番号 7)
13. *Nitzschia palea* (Kuetz.) W. Smith (SK95; 試料番号 7)
14. *Pinnularia gibba* Ehrenberg (SK95; 試料番号 7)
15. *Neidium ampliatum* (Ehr.) Krammer (SK95; 試料番号 7)
16. *Pinnularia subcapitata* Gregory (SK50; 試料番号 7)
17. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O. Muller (SK95; 試料番号 7)

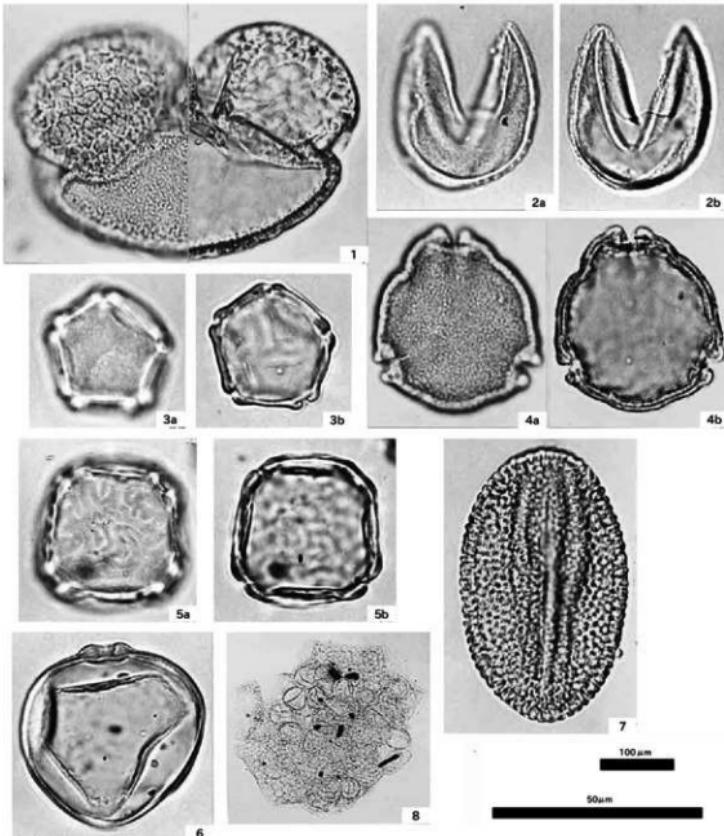
第15図 珪藻化石類微鏡写真

と、周辺地域で堆積状況の良い低地において珪藻・花粉・植物珪酸体分析などを実施する必要性がある。溝状造構については、イネ属は検出されているがその出現率は現耕作土と比較して低率である。このため、水田に利用されたと現段階で断定はできない。ところで、新潟県柏崎平野北東部の刈羽郡刈羽村の西谷遺跡では、考古学的所見により弥生時代後期半の水田跡が確認され、この水田層を対象とした自然科学分析が行われている〔パリノ・サーヴェイ株式会社 1992〕。その結果、栽培植物のイネ属が検出されているところで今回の出現率とほぼ同率である。このことを考慮すれば、本調査区内で稲作が営まれていたとも考えられるが、畦畔などの水田関連造構が確認できることから、周辺地域での類例検出を図り総合解析を行う必要がある。また、稲作に伴う農耕具の検出にも注目し、同様の分析調査を行う必要がある。なお、今後溝状造構の自然科学的調査を行うにあたっては、地形発達過程の情報が必要である。

### 引用文献

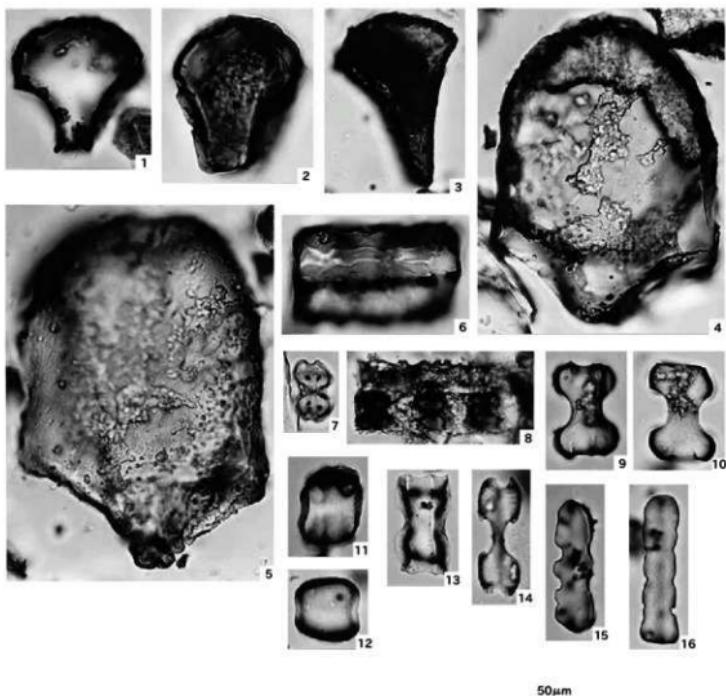
- 安藤一男・南雲 保 1983 「埼玉県 荒川低地沖積層のケイソウ」『日本歯科大学紀要』12
- 天野洋司ほか 1991 「中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量」『土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発』農林水产省農林水産技術会議事務局編
- 伊藤良永・福内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6
- Bowen, H.J.M. 1983 『環境無機化学—元素の循環と生化学』 浅見輝男・茅野充男訳 博友社  
[Bowen,H.J.M. 1979 *Environmental Chemistry of Elements*]
- Bolt, G.H.・Bruggenwert, M.G.M. 1980 『土壤の化学』岩田進午・三輪容太郎・井上隆広・陽 捷行訳 学会出版センター [Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M. *SOIL CHEMISTRY*]
- Cholnoky, B.J. 1968 Die Okologie der Diatomeen in Binnen-Gewässern. Lehre
- 土壤標準分析・測定法委員会編 1986 『土壤標準分析・測定法』 博友社
- 土壤養分測定法委員会編 1981 『土壤養分分析法』 義賢堂
- 福島 博 1950 「四万温泉の藻類植生」『植物誌』25 (8)
- 藤眞 正 1979 「カルシウム」『地質調査所化学分析法』52 地質調査所
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27
- 近藤鍊三・ビアスン友子 1981 「樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について」『帯広畜産大学研究報告』12
- 近藤鍊三・佐瀬 隆 1986 「植物珪酸体分析 その特性と応用」『第四紀研究』25 日本第四紀学会
- 近藤鍊三 1988 「十二遺跡の植物珪酸体分析」『長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書』 御代田町教育委員会
- 小池義人はか 1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第59集 細池遺跡・寺道上遺跡」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- Krammer,K. and H.Lange-Bertalot. 1986・1988・1990・1991 Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa,2 (1) ~ (4)
- 川崎 弘志ほか 1991 「九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量」『土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発』農林水産省農林水産技術会議事務局編
- 京都大学農学部農芸化学教室編 1967 『農芸化学実験書』第1巻 産業図書
- 中村 純 1967 『花粉分析』 古今書院
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1992 「西谷遺跡における弥生時代後期以降の古環境変遷と低地利用」『西谷遺跡発掘調査報告書』 刈羽村教育委員会
- ペドロジスト懇談会 1984 「野外土性の判定」『土壤調査ハンドブック』 博友社
- 田中宏之 1987 「群馬県高崎市北部から発掘された古代水田の珪藻」『群馬県立歴史博物館紀要』8 群馬県立歴史博物館

- 田中宏之・中島啓治 1985 「群馬県老神・奥平・梨木・嶺・赤久純温泉及び福島県元温泉小屋温泉のケイソウ」  
『群馬県立歴史博物館紀要』6 群馬県立歴史博物館
- 渡辺仁治ほか 1986 「珪藻群集を生物指標とする陸水汚濁の定量的環境評価法の研究」『日産科学振興財团研究報告書』9
- 渡辺仁治ほか 1988 「珪藻群集による有機汚濁指数(DAIpo)の止水域への適用」『水質汚濁研究』11



1. マツ属 (SD109 ; 試料番号3)  
2. スギ属 (SD109 ; 試料番号3)  
3. ハンノキ属 (SD109 ; 試料番号3)  
4. プナ属 (SD109 ; 試料番号3)  
5. ニレ属-ケヤキ属 (SD109 ; 試料番号3)  
6. イネ科 (SD109 ; 試料番号3)  
7. ソバ属 (SD109 ; 試料番号3)  
8. サンショウモ (SX108 ; 試料番号3)

第16図 花粉分析顕微鏡写真



1. イネ属：機動細胞珪酸体由来 (SD109；試料番号3)  
 2. タケア科：機動細胞珪酸体由来 (SD109；試料番号3)  
 3. ウシクサ属：機動細胞珪酸体由来 (SD109；試料番号3)  
 4. ヨシ属：機動細胞珪酸体由来 (25Cグリッド；試料番号3)  
 5. ヨシ属：機動細胞珪酸体由来 (SX108；試料番号3)  
 6. キビ属：機動細胞珪酸体由来 (25Cグリッド；試料番号5)  
 7. イネ属：短細胞珪酸体由来 (25Cグリッド；試料番号3)  
 8. イネ属：短細胞珪酸体由来 (25Cグリッド；試料番号3)  
 9. キビ属：短細胞珪酸体由来 (25Cグリッド；試料番号5)  
 10. キビ属：短細胞珪酸体由来 (25Cグリッド；試料番号3)  
 11. タケア科：短細胞珪酸体由来 (25Cグリッド；試料番号5)  
 12. ヨシ属：短細胞珪酸体由来 (25Cグリッド；試料番号3)  
 13. コブナグサ属：短細胞珪酸体由来 (SD109；試料番号3)  
 14. ススキ属：短細胞珪酸体由来 (SD109；試料番号3)  
 15. イチゴツナギ亞科：短細胞珪酸体由来 (25Cグリッド；試料番号3)  
 16. イチゴツナギ亞科：短細胞珪酸体由来 (SX108；試料番号3)

第17図 植物珪酸体顕微鏡写真

## 2 木製品の樹種同定

新津市の低地に立地する当遺跡から出土した、主に古代の木製品18点の樹種同定結果を報告する。

### A 試料と方法

片刃の剃刀を用いて材の横断面（木口）・接線断面（板目）・放射断面（柾目）を薄く剥ぎ取り、スライドグラスの上に並べ、ガムクロラールで封入して永久プレパラート（県教委保管）を作成した。同定は、光学顕微鏡で材組織を拡大観察して行った。なお、一部試料については製品の形状を損なう恐れがあるため、断面採取できなかったものがある。

### B 結 果

検出された分類群は、針葉樹のスギ（9点）・ネズコ（1点）、落葉広葉樹のクリ（4点）・ケヤキ（3点）・ウコギ科（1点）の合計5分類群であった。各製品の同定結果は、第6表に示した。

#### 検出樹種の材組織記載

##### スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 第18図No.11

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量が多く晩材の仮道管壁は厚い。分野壁孔は大きなスギ型、1分野に主に2個ある。

スギは本州以南の暖帯から温帶下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木で、日本海側では縄文時代に低地にスギ林が成立していたことが知られている。材はやや軽軟で加工は容易である。

##### ネズコ *Thuja standishii* Carr. ヒノキ科 第18図No.6

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔はヒノキ型やスギより小型のスギ型、1分野に2～4個ある。

ネズコは本州・四国の温帶上部の山中に生育する常緑高木であり、特に中部地方以北に多く分布する。材は耐朽性・切削性・削割性にすぐれる。

報告番号	樹種番号	種類	樹種	グリッド	遺構番号
316	4	容器（漆器椀）	ケヤキ	7D3・4・8・9	SK47
319	9	不明（板状）	スギ	6E21	SK62
320	20	箸状木製品	スギ	6E21	SK62
321	7	容器	ケヤキ	6E12・13・17・18	SK61
322	6	壺串	ネズコ	6E12・13・17・18	SK61
324	8	不明	ケヤキ	6E12・13・17・18	SK61
325	5	不明	スギ	7C7・8	SK52
326	12	草履芯	スギ	9E～11E	SD2
328	10	刀物の柄	スギ	7E	SD3.29
331	1	柱根	クリ	9C15	9C-P1 (SB5)
332	3	柱根	クリ	9C19	9C-P7 (SB5)
333	2	柱根	クリ	9C18	9C-P6 (SB5)
334	11	杓子状木製品	スギ	9C	SD28
336	16	箸状木製品	スギ	16E1	
337	14	曲木	スギ？	17D5・10	SE36
338	15	容器（漆器椀）	ウコギ科	17D5・10	SE36
340	17	柱根	スギ	17D	SB39 P4
341	18	柱根	クリ	18D	SB51

第6表 木製品の樹種同定結果

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第18図№2

年輪の始めに大型の管孔が密に配列し徐々にまたは急に径を減じ、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は單一、内腔にはチロースが発達している。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に生息する落葉高木である。材は狂いが少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 第19図№7

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、その後は小型の管孔が多数集合して塊状・接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は單一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1~7細胞幅、上下端や縁に大型の結晶細胞がある。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅く、用途は建築材や容器が多い。

## ウコギ科 Araliaceae 第19図№15

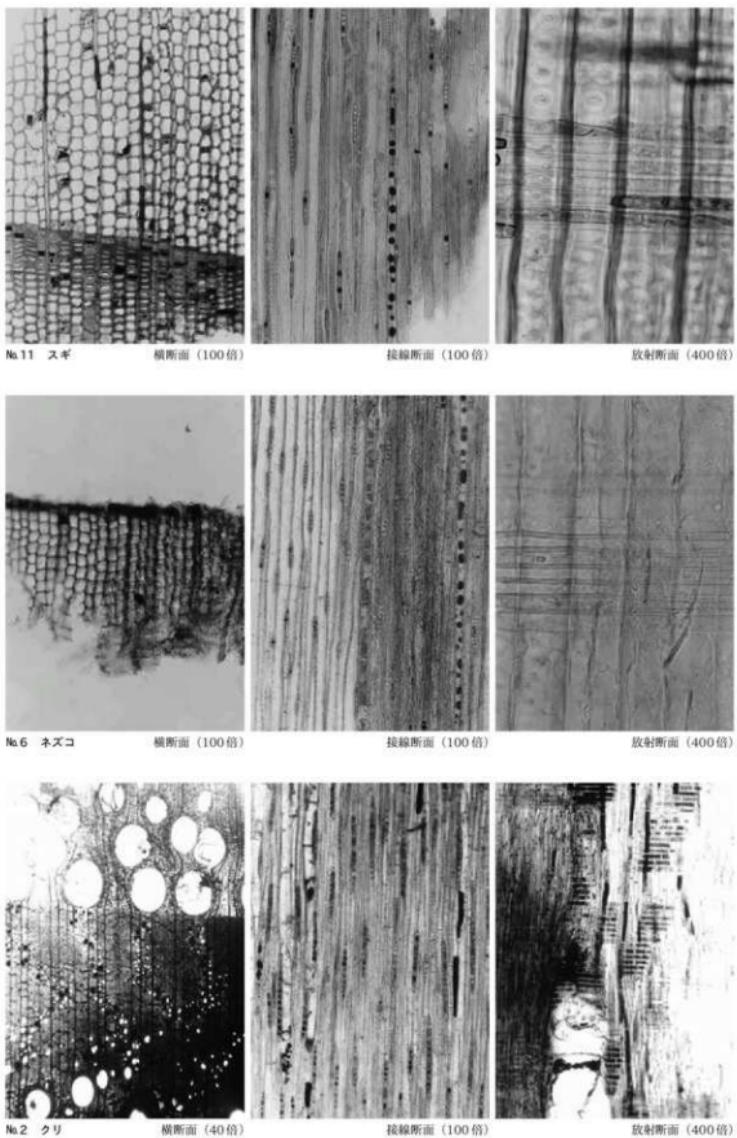
横断面の切片が作成できていないので管孔配列は不明であるが、道管の壁孔はやや大きくて交互状、穿孔は單一、放射組織は同性に近い異性、おもに平伏細胞からなる2~5細胞幅で上下端に方形または直立細胞があり、道管との壁孔は大きく交互状である。道管は数個が複合して分布しているなどの特徴から、ウコギ科の材と同定される。ハリギリ・タカノツメ・コシアブラなどが候補として考えられ、材質はやや軽軟である。

## C まとめ

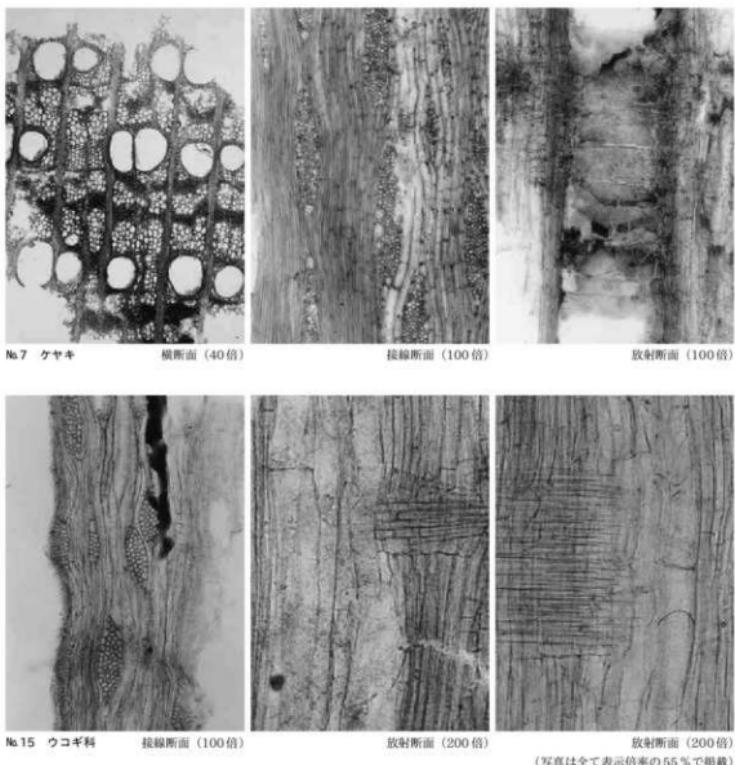
主に古代（一部古代以降の製品を含む）の木製品樹種18点を調査した結果、スギ9点（スギ？1点を含む）、クリ4点、ケヤキ3点、ネズコ・ウコギ科各1点であった。スギが最も多く、クリ・ケヤキの利用も目立った。スギは、柱根・刀物の柄・杓子状木製品・板状・曲物・箸状木製品など、様々な大きさや形状の木製品に使用されている。日本海側一帯はスギが豊富であり、牛道遺跡〔立木ほか1999〕・大武遺跡〔春日ほか2000〕・新保遺跡〔石川ほか2001〕など県内の古代・中世の遺跡から出土した木製品をみると、スギが占める割合が多い。当遺跡においても、スギが多く利用されていたことが確認された。斎串はヒノキ科のネズコ・漆器・容器類には広葉樹のケヤキ・ウコギ科が使用されており、用途によってはスギ材以外の樹種選択性がはっきりしている。クリは、スギと共に柱材に使われていた。

## 引用文献

- 土橋由理子ほか1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第91集 牛道遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 春日真実ほか2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第97集 大武遺跡I（中世編）』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 石川智紀ほか2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第103集 新保遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団



第18図 検出樹種の顕微鏡写真 (1)



第19図 検出樹種の顕微鏡写真 (2)

## 第VII章 まとめ

### 1 遺構

#### A 人為的に埋め戻された土坑について

調査区からは多数の土坑が検出されたが、その大半が人為的に埋め戻されたと考えられる土坑（以下、人為的埋土土坑とする）である。I区では調査区全体に広がっており、II区では東側に多く見られる。平面形態は円形・梢円形・方形・長方形・不整形と様々で偏りが見られないが、断面形は箱状もしくは台形状が多い。II区では深度の浅い土坑が多く見られる。覆土は、I区では地山上に似た青灰色粘土シルトまたは粘土と暗灰色シルトまたは粘土（どちらも黒褐色粘質土をブロック状に含む）であることが多いが、それぞれの比率は一様ではない。またII区では黒褐色粘質土や暗褐色粘質土（地山ブロック含む）の単層であることが多い。両者の違いは時期の違い、もしくは性格の違いによるものとも考えられるが、II区の土坑からはほとんど遺物が出土していないこともあり不明である。I区でも底面から出土した遺物がなく、構築時期は不明である。

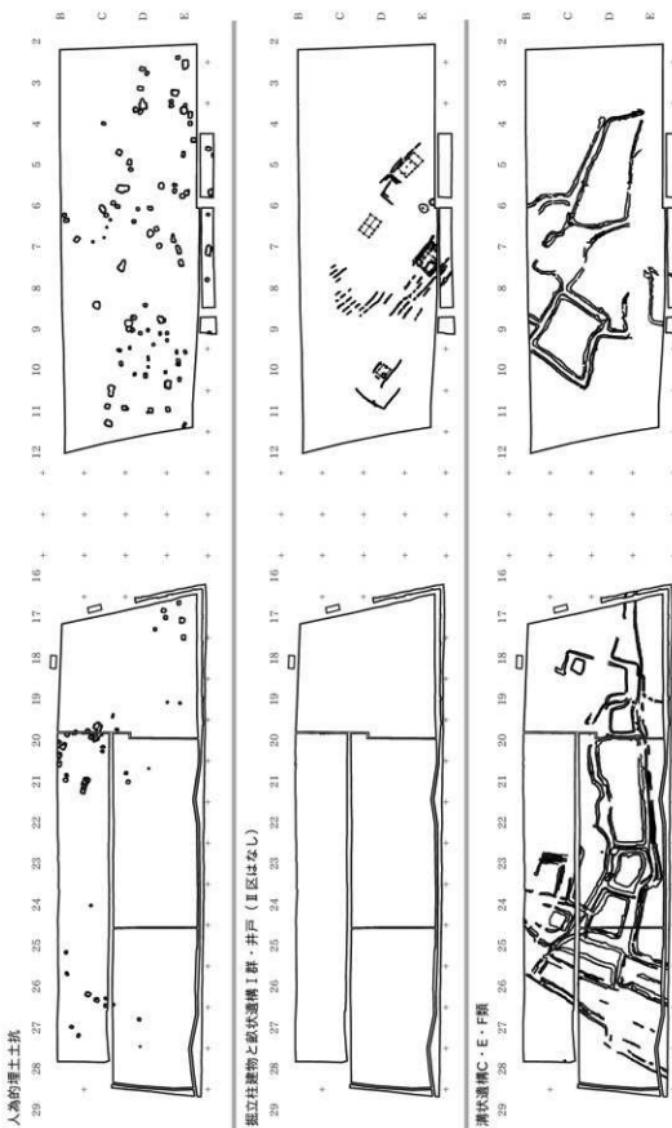
ただし、SK108からは、上層でVI期に比定できる土器がまとまって出土していること、SK10の遺構確認面でV期と考えられる胎土B群の須恵器が出土していることから、9世紀前半以前であることは確實である。また、SK95からは返りのある杯蓋が出土しており、構築時期の上限は7世紀末から8世紀初頭以前、つまり古墳時代に遡る可能性がある。ただし、他の遺構の切り合いから新旧の土坑が認められ、全ての人為的埋土土坑を同時期と考えることはできない。上記の時期幅は構築時期の違いによるものかもしれない。土坑の構築時期に関連する、他の遺構との切り合い関係については次項で述べることとする。

これらの土坑は調査区全体に広がり、数も多いため土坑の配置に規則性があるのではないかと考え、上記の要素・平面形態・断面形態・覆土の違いから分類を試みたが、配置に規則性は見出せなかった。新津市教育委員会が調査した区域には、このような土坑はほとんど見られず、この区域に集中している可能性も考えられる。

土坑の性格については、墓坑あるいは井戸の可能性もあるとして、調査時にリン・カルシウム分析と珪藻分析が行われている。しかし分析の結果どちらの可能性も低く、他の用途を考える必要があると判断された。人為的に埋め戻された土坑としては、沖ノ羽遺跡B地区・一之口遺跡東地区〔鈴木俊ほか1994〕に類例があるが、古墳時代前期の土器が多く出土している。本遺跡の土坑は、上述したように古墳時代に遡る可能性はあるが、遺物がほとんど出土していない点で大きく異なる。上記2遺跡でも墓坑の可能性を指摘しながらも、積極的な判断材料がないとしている。今後の資料増加に期待したい。

#### B 遺構の変遷

本遺跡では、人為的埋土土坑や掘立柱建物・井戸・畝状遺構、そして多数の溝状遺構・ビットが検出された。重複している遺構も多いが、切り合い関係が把握できなかつたものも少なくない。また、第IV章で述べたように構築時期について推定できる遺構は数少ない。ここでは、そのわずかながら時期の推定できる遺構と切り合い関係から、それらの変遷について大まかな流れを述べていきたい。



第20図 進構の変遷

進構が既成線といつおけでなく、代続的なものを採用してある。

## 1) I 区

造構の切り合いから、一番古いと考えられるのはSD29である。SD29はSD3から派生したような形になっているが（図版9）SD3に切られている可能性が高い。土器は9世紀代のものも出土しているが、土師器（84）やハケ調整の壺、直径16cmの須恵器杯蓋（88）など7世紀末～8世紀初頭のものが比較的多く見られ、おおよそこの時期と推定される。溝状造構A群の中で最も古い溝ということになる。

2番目に古いと考えられるのはSD22である。SD22はSD29を切り、SK4（人為的埋土坑）・SD2・SD3（溝状造構A群）に切られる。この溝はどの類にも属さない単独の溝である。78の須恵器短頸壺がほぼ半分欠けた状態で出土しており、これはIV期のものと考えられる。遺物は底面から出土していないため、構築時期はこれより若干遅るであろうが、おおよそその目安となろう。

上記2条の溝と前後する時期の造構として、人為的埋土坑がある。SK4はSD22を切ることは先に述べたとおりである。他の溝と重複している場合は、ほとんど溝に切られている。溝状造構A群に切られる例としては、SK1・SK2とSD2、SK7とSD4・5・6、SK62・66とSD3がある。溝状造構C群に切られる例としてはSK36とSD32、SK27・34とSD20、SK24とSD26がある。ただし、SK67はSD3・29に切られている。よって構築時期は上限が7世紀末以前、下限は前項で述べたように9世紀前半という長い時間幅を考えざるを得ない。出土遺物が少ないため時期不明な土坑が多いが、下限の推定される土坑として、SK95は7世紀末から8世紀初頭以前、SK6・10・64は9世紀前半以前、SK10・108は9世紀後半以前に構築されたものと推定される。この差はあくまでも出土遺物によるものであり、実際はみな古い時期に構築されたという可能性も考えられる。

4番目は、SB1・2・4の掘立柱建物と歛状造構1群である。方向はN-43°-W前後である。歛状造構1群は人為的埋土坑を切り、溝状造構A群に切られる。SB2のビットと歛状造構1群に属するSD43・51・53・101の出土土器から、構築時期はV期をそれほど遡らないものと思われる。また、SB2も主軸方向がほぼ同じであるため、このグループに入ると考えられる。しかし、遺物の出土はB範囲（第9図）の南側に限られている。よってその他の区域（A・CとBの北側）と同時期であるかどうかは、確実性に欠けていることも付け加えておきたい。また、SB2付近には井戸が2か所（SK61を含む）あるが、これらも建物と同時期と考えるのが自然であろう。

因みに、上浦A遺跡で検出された掘立柱建物跡の主軸方向はN-50°～54°-Wであり、やや近い。出土遺物から考えると、同時期の可能性もある。

5番目は溝状造構A群である（SD29は除く）。人為的埋土坑・歛状造構1群を切る。溝同士の新旧関係は今ひとつ明確でないため、全て同時期のものかあるいは2条1対である可能性も考えられるが、不明である。

6番目はSD9である。SD4・5・6を切っている。SD9は歛状造構2群に属するため、歛状造構2群全体がここに位置づけられる可能性もある。しかし、他の溝の切り合いが明確でないため、ここでは可能性を指摘するにとどめておきたい。

7番目は溝状造構C群である。C群とA群との切り合いが明確ではないが、覆土の違いから推定した。溝状造構A群の覆土は黒っぽく粘性があり、地山との境が不明瞭。それに対し溝状造構C群はほぼ暗灰色粘土に限られ、地山との境が明瞭であった。よって、溝状造構C群のほうがより新しいと考えられる。所属時期は明確ではないが、細池遺跡「凹地遺構A類」に類似すること、さらに4番目のグループの存続

時期がV～VI期と考えられることから、それから2段階新しいことを考慮すると、中世の遺構である可能性が高いと考えられる。

最後はSD1である。第IV章で述べたが、昭和15～26年に行われた土地改良以前の用水跡で、1948年に米軍が撮影した航空写真にも記載されている溝である。

ところで、溝状遺構B群はA群・C群に切られることから、5番目のグループ以前に構築されたと考えられる。しかし、SD85とSK83・SD87との切り合い関係は不明であるため、上限は不明である。また、調査区北東の河川跡についても遺物等はほとんどなく、時期の特定に至っていない。

## 2) II 区

遺物がほとんど出土せず、また重複も少ないためI区よりさらに時期特定は困難である。まず、調査区を蛇行するSD33は、SE36・44を切り他の溝状遺構全てに切られる。よって一番古い遺構は井戸群、次にSD33となる。SB39・51は遺物もなく時期不明であるが、井戸群と同時期と推測される。因みに、I区の建物とは主軸方向は大きく異なる。

3番目は人為的埋土坑と思われる。SK51はSD33を切りSD48に切られ、他の土坑は全て溝に切られている。SD33出土土器はV期に帰属すると考えられるため、SK51はそれ以降に構築されたということになる。I区の人為的埋土坑の下限時期とほぼ同じで齟齬はないが、I区同様これら土坑の構築時期は全て同じと考えるのは危険であり、上限は不明である。

4番目は溝状遺構F群、G群、溝状遺構D群のうちSD29・31である。これらの切り合い関係は不明瞭で、また覆土も群似しており新旧は不明である。溝状遺構G群はA群と対応する可能性もある。

5番目は溝状遺構E群と思われる。1か所だけ溝状遺構F群を切るが、配置・方向はほぼ同じであり、つながりが感じられる。近い時期あるいは同時期である可能性が高い。溝状遺構C群と規模・間隔はほぼ同じであり、同時期の所産と考えたい。

6番目、最後はSD25である。I区SD1とつながり、前にも述べたように昭和15～26年に行われた土地改良以前の用水跡である。またSD15・115もSD25と覆土が同一であり、新しい溝と考えられる。

## 2 出土土器の編年的位置付け

本遺跡から出土した遺物は古代から近現代に及ぶが、主体となるのは古代、田嶋編年II3期からVI2期（7世紀末から10世紀前葉）のものである。古代の土器については、口縁部計測法【宇野1992】により器種構成比率と食膳具構成比率を算出した（第7表・第8表）。個体数は169.25個体（2708/16）、破片数は2655片である。機能別の割合では食膳具70.9%、煮炊具22.1%、貯蔵具7.1%で中蒲原郡横越町上郷遺跡【春日1997】の比率に近い。食膳具が多く、煮炊具、貯蔵具が少ない。煮炊具では非ロクロ甕の多さが目立つ。食膳具では須恵器55.9%、土師器40.0%、黒色土器4.2%で須恵器が土師器より若干多いが、拮抗している。ただし、この数値は出土土器全点を対象としたものであり、特定時期の様相を反映したものではないことを断つておく。

本遺跡からは多数の遺構が検出されたが、一括資料は乏しい。その中でSK108・SD51.53・SD103出土土器は比較的まとまっていると考えられるため、法量などから所属時期を考えてみたい。考察に当たっては新津市及び周辺地域の編年【春日1997・2000、立木ほか1999、渡邊ほか2001】を参考にした。

**SK108 食膳具しか出土していない。土師器無台椀が約9割を占め、残りは黒色土器無台椀で、須恵器は図示した3点のみである。須恵器無台杯は2点とも胎土B群小泊産と考えられ、器壁は比較的薄く口縁の外傾度は高い。ただし口径は比較的大きく、13.8cmである。土師器無台椀の器高指数は28～39を示すが、器高指数35以上のもの（上浦遺跡C類）は9世紀第4四半期から10世紀初頭に存在する可能性が大きいといわれる【春日氏】。新津市域では草水町2丁目窯など土師器窯に近いためか、周辺地域よりも土師器の比率が高い傾向にある【渡邊2001】。寺道上遺跡ではV2期で土師器無台椀が食膳具の7割を占め、中谷内遺跡ではVI2期で9割以上を占めるが、上浦遺跡も同様であると思われる。以上からこの土器群はVI期、9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。**

**SD51・53 SD51では土師器が約9割を占める。黒色土器は図示していないが数片出土している。須恵器は全て胎土B群である。無台杯はSK108同様、口縁の外傾度が高い。須恵器無台杯の器高指数は25、底径指数は58である。土師器無台椀の器高指数は34前後である。器壁は比較的厚い。**

SD53もSD51同様、土師器が約9割であるが、黒色土器が1割でSD51より多い。50の短頸壺は胎土C群で9世紀後半までは下らない。須恵器無台杯の器高指数は22、底径指数61で、SD51よりも器高が低い。土師器の器高指数は34～37、黒色土器は41と高い数値を示し、器壁は薄いものが多い。土師器小甕・鍋の口縁形態は様々だが、内面のロクロナダが強く先端をつまみあげるもの、受け口状に屈曲するものが多く見られる。SD51では小甕B・C類が多く、SD53ではC・D類が多い。上述の須恵器器高指数などと合わせて考えるとSD53のほうが新しいとの推測が可能であるが、個体数が少ないため断定はできない。時期は、V2期からVI期、9世紀第2四半期から10世紀初頭と幅を持つものと考えたい。

**SD103 土師器が多く、土師器9割、黒色土器1割となる。須恵器は体部片のみ認められる。上記3つの造構同様VI期と考えられるが、130は底径指数52を示し、器形が他とは明らかに異なる。春日氏によれば底径指数50以上はV2期に限定されるということで、この土器だけは古い時期のものの可能性がある。時期はSD51・53同様、V2期からVI期と考えられる。**

このように時期比定の可能な造構出土土器はすべてV期以降で、未だ明らかになっていない新津市周辺域の7世紀末からの土器変遷を追うことはできなかった。今後の資料増加に期待したい。

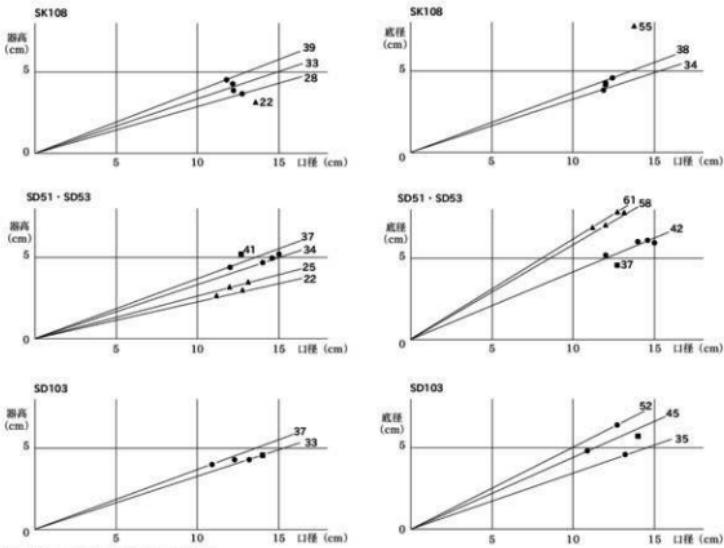
器種	口縁部 残存率 /16	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)
須恵器 杯蓋	243	206	9.3	7.8
有台杯	75	29	2.9	1.1
無台杯	361	196	13.8	7.4
杯	340	401	12.9	15.0
矮碗	4	1	0.2	•
鉢	7	1	0.3	•
高杯	3	1	0.1	•
土師器 杯	1	1	•	•
無台椀	723	738	27.9	27.9
無台皿	2	1	•	•
有台皿	11	3	0.4	0.1
鉢	1	1	•	•
黒色土器無台椀	77	80	3.0	3.0
食膳具小計	1848	1659	70.8	62.3
須恵器 盆蓋	1	5	•	0.2
盤・甄	99	57	3.8	2.1
甕	79	70	3.0	2.6
括れ鉢	5	2	0.2	0.1
貯蔵具小計	184	134	7.0	5.0
土師器 長甕	146	276	5.6	10.4
小甕	101	78	3.9	2.9
甕	347	370	9.5	13.9
鍋	81	137	3.1	5.2
鉢	1	1	•	•
煮炊具小計	676	862	22.1	32.4
須恵器 円面鏡	2	2	•	0.1
總 計	2708	2655	99.9	99.7

第7表 器種構成比率

器種	口縁部 残存率 /16	破片数	比率 (残存率)	比率 (破片数)
須恵器 杯蓋	243	206	13.1	12.4
有台杯	75	29	4.1	1.7
無台杯	361	196	19.5	11.8
杯	340	401	18.4	24.1
矮碗	4	1	0.2	0.1
鉢	7	1	0.4	0.1
高杯	3	1	0.2	0.1
須恵器小計	1033	835	55.9	50.3
土師器 杯	1	1	0.1	0.1
無台椀	723	738	39.1	44.5
無台皿	2	1	0.1	0.1
有台皿	11	3	0.6	0.2
鉢	1	1	0.1	0.1
土師器小計	738	744	40.0	45.0
黒色土器 無台椀	77	80	4.2	4.8
食膳具統計	1848	1659	100.1	100.1

第8表 食膳具構成比率

\*は存在するが比率に反映されないものである。  
須恵器有台杯・無台杯が判断不可能なものは杯とした。



第21図 主要遺構出土食器の法量

本遺跡では、他地域の土器も2点だが出土している。1つは141の東北系土師器の甕であり、もう1つは144の関東系武藏型甕である。どちらも8世紀代に位置づけられるものであり、興味深い。

ところで、須恵器の胎土別分類を行い観察したところ、時期によってひとつの胎土に偏る傾向が認められた。II 3期には胎土D群のものが大半を占め、胎土C群も少量見られる。III期からV期は、資料数自体も多くはないが胎土C群が主体となる。また、不明のものもこの時期と推定されるものが多い。V期は胎土C群と胎土B群が拮抗する。V 2期から胎土B群が大半を占め、これ以降は全て胎土B群となる。このことは既に広く知られていることであり、上浦遺跡も例外ではない。胎土A群は時期により偏ることなく、III期からV期に数点ずつ出土している。

須恵器胎土の時間的推移については、梯子谷窯跡で既に検討されている〔春日2001b〕。梯子谷窯跡に営まれた集落には、II 3期からV 2期まで胎土D群（氏のA類）、地元西古志産が定量供給されるが、特にII 3期からIV 1期の古い時期に多い。またIV 2期には胎土C群（氏のB類）が定量入るという。

いずれも地元に多く供給される時期には、郡を越えた地域まで供給されていることがうかがえる。2遺跡をもって断言はできないので、今後の資料増加に期待するところである。また、流通に関してはその背景に様々な要因が考えられるであろうが、今回は事実を述べるにとどめ、機会があれば検討したい。

### 3 遺跡の位置付け

上浦遺跡は南北（北西－南東）で約1km、東西（北東－南西）で平均300mの広大な範囲を有する遺跡である。今回調査した範囲では、II 3期からVI期の比較的長い期間営まれたことが明らかとなつたが、場所

によって主体となる時期が若干異なるようである。上浦A・B遺跡ではV期が主体となり、ほぼその時期に限定される。一方、上浦遺跡の北西に位置する長沼遺跡では、V期の土器も少量見られるが、主体はII 3期である。また、長沼遺跡東隣の結造跡は奈良時代とされている。

よって、この地に遺跡が成立したII 3期には、上浦遺跡I区と長沼遺跡を中心とする範囲に遺跡が営まれ、V期には広い範囲に拡大したものと推測される。V期は新たに遺跡が多く成立し、遺跡数が急増する時期で〔春日1997〕。県内においても同様の傾向が見られるという〔坂井1986〕ことから、集落範囲の拡大はこれと矛盾しない。

ところで、上浦遺跡からは高い階層性を示す事例がいくつか認められる。まず、掘立柱建物は8棟検出されたが、このうちI区で5×4間(60.7m<sup>2</sup>)・5×2間(37.6m<sup>2</sup>)など比較的大型のものが検出されている。また、新津市教委調査区から出土した遺物に、銅製帶金具(丸柄)〔渡邊1992〕や平城分類「壺G」・円面鏡・墨書き土器〔川上1997〕がある。円面鏡・墨書き土器はI区からも出土しているが、円面鏡は小片であり墨書き土器は6点と少ない。しかし上浦A遺跡で円面鏡1個体と墨書き土器50点以上、B遺跡でも墨書き土器が数十点出土しているということである。その中で多く見られるのが「山」「川」とされる文字である。「川」は後述する、石川県寺家遺跡で出土している「川」(記号)と同じものである可能性も考えられる。

祭祀に関連すると思われる遺物も出土している。まずは素文鏡である。県内に類例ではなく、北陸でも石川県羽咋市寺家遺跡・福井県敦賀市松原遺跡で見られる程度である。寺家遺跡は能登半島の西の付け根に位置し、日本海に近接している。7世紀前半から10世紀まで祭祀専業集団の集落と祭祀場が存在したと考えられており、9世紀には氣多神社政府跡とみられる大型建物群が検出されている。素文鏡36面のほか海獸葡萄鏡・銅鈴・垂飾などの多彩な金属製品や三彩壺が出土しているが、大型掘立柱建物群からの出土が多く、良好な資料である。

松原遺跡は海岸線の深く入り込む敦賀湾に面している。ここは古くから松原の名で知られ、渤海国の遣使一行が宿泊する客館が置かれた地であり、また敦賀郡衙も近接していたと推定されている。さらに遺跡の西側には、越前一ノ宮氣比神宮と関わりの深い別宮神社が鎮座している。発掘調査では官衙的色彩が認められなかったが、祭祀遺構と製塙遺構が検出された。祭祀遺構は古墳・平安・近世のいずれの時期からも検出されている。素文鏡は遺構に伴うものかどうか、報文を読む限り判然としないが、素文鏡1点が鉄貨・鉄製品・須恵器と伴に出土している。上述の遺跡では、出土状況などから鏡を使用した祭祀が想定され得るが、上浦遺跡では溝状遺構A群からの出土で、所属時期すら不明瞭な状態である。

また、上浦B遺跡では三彩小壺が出土している。小壺は県内初例となり大変希少なものである。寺家遺跡でも出土しており、関連性がうかがえる。

鏡・三彩以外に祭祀遺物と考えられるものとしては、手づくね土器・紡錘車・棒状土製品・図示できなかつたが土製の形代類がある〔金子1988、小嶋ほか1997〕の一覧による。形代類とされるものは1点のみの出土で、長さ3.9cm、直徑1cm前後で先端をやや細めた棒状のものである(柵申も1点あるが井戸からの出土のため、井戸祭祀に伴うものと考えられるためここには含まない)。これらの出土位置・遺構について何らかの規則性や偏りがあるか検討してみたが、分散して出土しており傾向は見出せなかつた。

以上のことから、上浦遺跡には国家的な律令祭祀に関連した集団が存在した可能性、また祭祀自体が行われた可能性も考えられるが、祭祀遺物の貧弱さや立地の違いなど相違点も多い。また今回は文献資料にあたって検討する余裕がなく、事実記載に終始してしまった。今後検討すべき課題としたい。

## 要 約

- 1 上浦遺跡は新潟平野のほぼ中央、新津市大字福島字上浦・字稻場に所在し、沖積地内の微高地に位置する。標高は2.2～3.5mで現況は水田である。
- 2 調査は磐越自動車道建設に伴い、平成2～4年度の三か年で実施した。実質調査面積は18,050m<sup>2</sup>である。
- 3 調査の結果、古代から中世・現代の遺構、古代から近現代の遺物が検出された。
- 4 遺構は掘立柱建物跡8棟、井戸4基、土坑175基、溝（斂状遺構含む）229条、ピット183基、河川跡1本が検出された。これらの遺構の年代は、古代が主体で一部中世も含むと思われる。
- 5 遺構は重複が著しい。人為的に埋め戻されたと考えられる土坑群、掘立柱建物・井戸・斂状遺構、「凹地遺構」、大別して3時期の変遷がうかがえる。
- 6 古代の遺物は土器類を中心に、木製品・石製品・金属製品が平箱160箱程度出土した。年代は7世紀末から10世紀前葉を中心とする時期のものである。
- 7 古代の土器には須恵器・土師器・黒色土器があり施釉陶器は出土していない。須恵器の胎土は4群に大別でき、時間的推移とともに比率が変化していることが読み取れる。
- 8 本遺跡からは銅製素文鏡が1点出土した。県内初例であり、貴重なものである。新津市教委が調査した区域からも三彩小壺や平城分類の壺G、銅製帶金具などの希少な遺物が出土している。鏡とこれらの存在は、本遺跡が奈良時代には国家的な律令祭祀に関連した場所であったことをうかがわせる。

## 引用文献

- 甘粕 健 1998 「北限の古墳文化の展開」『新潟県考古学会10周年記念講演会資料』新潟県考古学会
- 荒井健治ほか 1999 『府中市埋蔵文化財調査報告第10集 武藏国府関連遺跡調査報告16』府中市教育委員会・府中市遺跡調査会
- 荒川隆史ほか 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 和泉A遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川智紀ほか 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第58集 沖ノ羽遺跡I (A地区)』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 上原真入 1996 「木製容器の種類と画期」『古代の木製食器』埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』40 国立歴史民俗博物館
- 宇都則保 2000 「古代東北地方北部の沈線文のある土師器」『考古学ジャーナル』No. 462 ニュー・サイエンス社
- 江口友子ほか 2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第100集 釧迦堂遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 遠藤孝司ほか 1983 『白根市文化財調査報告(2) 馬場屋敷跡等発掘調査報告書』白根市教育委員会
- 春日真実 1997 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第87集 上郷遺跡II』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2000 「第5章 まとめ」『吉田町史』資料編1 考古・古代・中世 吉田町
- 春日真実 2001a 「横版の製作技法」『須恵器貯蔵具を考えるII つぼとかめ』北陸古代土器研究第9号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 2001b 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第104集 梶谷窯跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学ほか 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第106集 松影A遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子裕之 1988 『律令期祭祀遺物集成 昭和61~63年文部科学省研究費補助金総合研究A「日本古代の律令制神祇祭祀の成立過程と構造の研究」研究成果報告書II』
- 川上真雄 1995 『舟戸遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 川上真雄 1997 『上浦A遺跡 新津市工業団地第2期工事地内発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 川村 誠 1997 『木製食器からみた9世紀』『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 川村俊彦 1988 『敦賀市埋蔵文化財調査概報-1 松原遺跡』敦賀市教育委員会
- 北野博司 1999 「須恵器貯蔵具の器種分類案」『須恵器貯蔵具を考えるI つぼとかめ』北陸古代土器研究第8号 北陸古代土器研究会
- 木村宗文 1986 『越後國延喜式内社の所在をめぐって』『政治社会史論叢』山田英雄先生退官記念会編 近藤出版社
- 木村宗文 1988 「古代蒲原郡の郷と式内社」『新潟中央高等学校研究年報』35
- 小池義人ほか 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第59集 細池遺跡 寺道上遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小嶋芳孝ほか 1988 『寺家遺跡発掘調査報告書II 能登浜道関係埋蔵文化財調査報告書VII』石川県立埋蔵文化財センター
- 小嶋芳孝ほか 1997 「第4章 古代」『石川県考古資料調査・集成果事業報告書 祭祀具II』石川考古学研究会
- 坂井秀弥ほか 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集 山三賀II遺跡』新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
- 鈴木郁夫 1989 「第一編 自然」『新津市史』資料編第1巻 新津市
- 鈴木俊成ほか 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 一之口遺跡東地区(本文編)』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 石川考古  
学研究会・北陸古代土器研究会
- 立木宏明ほか 1998 『細池遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 立木宏明ほか 1999 『中谷内遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録』近畿古代編
- 新潟珪藻グループ 1979 「平野の地下」『URBAN KUBOTA』No.17 久保田鉄工株式会社
- 新潟県 1974 『土地分類基本調査 新潟』
- 新潟県 1972 『土地分類基本調査 新潟』
- 新潟県 1983 『新潟県史』資料編4
- 新潟県 1986 『「新潟県史」資料編 中世 補遺(一)』『新潟県史研究』第19号
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1996 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V－中世瀬戸内の集落遺跡－』 広島県  
教育委員会
- 星野信明ほか 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第80集 沖ノ羽遺跡II(B地区)』 新潟県教育委員会・(財)  
新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山口 充 1986 「松原遺跡」『福井県史』資料編13 考古－本文編－ 福井県
- 山田英雄 1981 「延喜式の弥彦神社について」『かみくひむし』第43号 かみくひむしの会
- 吉岡康鶴 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 渡邊朋和 1991 『長沼遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1992 『上浦遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1993 『上浦B遺跡』『埋文にいがた』特集号(No.2) (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 渡邊朋和ほか 1997 『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書II 屋村E・A・C地点 大入遺跡A地点』 新津市教  
育委員会
- 渡邊朋和ほか 2001 『寺道上遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会

## I 区

凡例 断面＊は底面の凹凸が著しいものを示す。

造橋番号	SB%	開版%	グリッド		形態		規模 (m)		底曲標高 (m)	備考
			大	小	平面	断面	長径	短径		
5D-P1	SB4	9.13.46	5D	15	円形	U字状	45	40	48	1.50
5D-P7	SB4	9.13	5D	20	円形	U字状	52	48	49	1.52
5D-P8	SB4	9.13	5D	15	円形	V字状	32	32	32	1.66
5D-P9	SB4	9.13	6D	15	円形	U字状	28	24	28	1.61
5E-P2	SB4	9.13	5E	6	円形	U字状	44	44	44	1.64
5E-P3	SB4	9.13	5E	7	円形	U字状	36	32	36	1.65
5E-P4	SB4	9.13	5E	8.13	円形	U字状	40	36	41	1.65
5E-P5	SB4	9.13	5E	6	円形	U字状	24	20	25	1.78
5E-P8	SB4	9.13	5E	12	円形	U字状	40	32	38	1.65
5E-P9	SB4	9.13	5E	12	円形	U字状	28	24	28	1.61
5E-P10	SB4	9.13	5E	16	円形	U字状	36	32	33	1.51
5E-P11	SB4	9.13	5E	16	円形	U字状	24	24	25	1.65
5E-P12	SB4	9.13	5E	16	円形	U字状	40	36	38	1.60
5E-P13	SB4	9.13	5E	7	円形	U字状	56	46	26	1.60
6D-P1	SB3	9.13	6D	17.22	円形	U字状	47	36	50	1.63
6D-P2	SB3	9.13	6D	23	円形	台形状	47	40	32	1.68
6D-P3	SB3	9.13	6D-7D	22/2	円形	U字状	56	44	37	1.66
6D-P6	SB3	9.13.45	6D	21	円形	台形状	36	36	47	1.64
6D-P7	SB3	9.13	6D	21	円形	—	37	36	—	—
6D-P9	SB3	9.13	6D	21	円形	U字状	41	36	42	1.64
6D-P10	SB3	9.13	6D	16	円形	台形状	53	52	39	1.74
7D-P1	SB3	9.13	7D	2	円形	台形状	45	44	38	1.72
7D-P2	SB3	9.13	7D	2	円形	台形状	49	44	36	1.65
7D-P4	SB3	9.13	7D	6	円形	台形状	44	40	29	1.70
7E-P3	SB2	8.12	7E	14	円形	台形状	68	60	52	1.53
7E-P5	SB2	8.12	7E	19	円形	—	48	40	—	—
7E-P6	SB2	8.12.45	7E	9.14	円形	台形状	76	64	43	1.58
7E-P7	SB2	8.12	7E	13	円形	台形状	60	48	40	1.55
7E-P9	SB2	8.12	7E	14	不整形	U字状	66	52	82	1.12
7E-P19	SB2	8.12	7E	18	円形	U字状	56	44	27	1.52
7E-P20	SB2	8.12	7E	18	円形	U字状	46	40	48	1.51
7E-P21	SB2	8.12	7E	17	円形	U字状	41	40	34	1.64
7E-P22	SB2	8.12	7E	22	円形	U字状	49	40	32	1.58
7E-P24	SB2	8.12.50	7E	22	円形	U字状	44	40	52	1.56
7E-P25	SB2	8.12	7E	26	円形	U字状	54	48	36	1.63
7E-P26	SB2	8.12	7E	19.24	円形	U字状	62	56	—	—
7E-P27	SB2	8.12	7E	13	不整形	U字状	48	24	56	1.32
7E-P28	SB2	8.12	7E	18	円形	U字状	56	44	26	1.60
8E-P1	SB2	8.12	8E	4	円形	U字状	62	56	36	1.63
8E-P2	SB2	8.12	8E	3	円形	U字状	36	36	41	1.68
9C-P1	SB5	7.8.12	9C	15	円形	椭段状	47	44	70	(1.26)
9C-P2	SB5	7.8.12	9C	10	円形	—	34	28	—	—
9C-P3	SB5	7.8.12	9C	9	円形	—	22	20	—	—
9C-P4	SB5	7.8.12	9C	8	円形	U字状	26	24	62	1.32
9C-P5	SB5	7.8.12	9C	13	円形	椭段状	28	28	30	1.57
9C-P6	SB5	7.8.12.46	9C	18	円形	U字状	21	20	38	1.40
9C-P7	SB5	7.8.12	9C	19	円形	U字状	23	20	—	—
9C-P8	SB5	7.8.12	9C	20	円形	U字状	20	20	22	1.58
10D-P1	SB1	7.12	10D	8	円形	U字状	28	24	24	1.58
10D-P2	SB1	7.12	10D	12	円形	U字状	24	20	19	1.60
10D-P3	SB1	7.12	10D	12	円形	U字状	29	28	49	1.50
10D-P4	SB1	7.12	10D	18	円形	U字状	22	20	38	1.60
10D-P5	SB1	7.12	10D	18	円形	椭段状	30	24	39	1.60
10D-P6	SB1	7.12.45	10D	18	円形	U字状	28	28	40	1.52
10D-P7	SB1	7.12	10D	14	椭円形	V字状	40	34	36	1.64
10E-P1		7.14	10E	22	円形	U字状	40	32	44	1.35
11E-P1		7.14	11E	23	不整形	範状	64	60	60	1.12
SE1		9.46	6E	9.14	円形	台形状	—	248	—	—
SK1		7.15.48	11E	23	椭円形	台形状	200	80	75	1.15
SK2		7.15.48	10E	17	方形	台形状	152	100	65	1.25
SK4		7.15	10E	2	長方形	範状	148	56	87	1.21
SK7		7.16.49	10D-10E	20.25/16.21	不整形	台形状	300	234	91	1.09
SK8		7.16	10E	18.13	長方形	台形状	172	120	51	1.47
SK9		7.15.48	10E	7	不整形	範状	172	120	75	1.21
SK14		7.16.49	10D	17	円形	台形状	124	96	78	1.20
SK15		7.14.47	11E	11	方形	範状	176	132	86	1.08
SK16		7.14.46	11D	14	方形	半円状	180	176	60	1.33
SK18		7.14.46	11C	8.9.13.14	方形	範状	172	168	63	1.20
SK19		7.17.49	10C-11C	23/4	不整形	範状	412	164	78	1.32
SK20		7.14.47	11C-11D	10.6.11/15	不整形	範状	236	156	79	1.21
SK21		7.14.47	9D	24	方形	範状	100	92	98	0.97

造橋番号	SB No.	開版%	グリッド		形態		規格 (cm)		前面標高 (m)	備考
			大	小	平面	断面	長径	短径	深度	
SK24	8.16.48	9D	13		楕円形	範状	136	92	80	1.17
SK26	8.48	8D・9D	22/2		長方形	範状	180	120		
SK27	7.16	9C・10C	25/5		楕円形	圓段状	172	120	92	1.03
SK34	8.18.53	9D	12.6.7		円形	弧状	216	176	57	1.35
SK36	8.17.51	8C	12		円形	範状	160	128	105	0.96
SK37	8.18.52	8C	7.12		円形	圓段状	72	64	40	1.52
SK39	8.18.53	8C・8D	15/11		楕円形	半円状	196	104	60	1.41
SK42	8.49	9C・9D	10.11/6		円形	範状	284	264	-	
SK45	8.50	7E	22.23		不整形	範状	256	160	43	1.32
SK46	8.49	7D	14.15		円形	範状	196	176	-	
SK52	8.19.52	7C	7.8		円形	半円状?	224	188	97	1.07
SK53	8.19.52	7C	10		円形	台形状	224	204	108	0.99
SK54	9.18.51	7C	3		円形	範状	72	64	66	1.43
SK55	9.18.51	7C	7.8		円形	範状	72	68	62	1.38
SK56	8.18.51	7C	7		円形	範状	92	84	47	1.66
SK61	9.19.52	6E	12.13.17.18		不整形	台形状	360	280	164	0.44
SK62	9.18.52	6E	21		円形	範状	104	84	88	0.99
SK64	9.47	6E	2.8		五形	範状	184	176	-	
SK65	9.47	6E	7.8		五形	範状	180	168	-	
SK66	9.18.52	6E	16		長方形	範状	192	160	43	1.47
SK67	9.16	6E	1.2		楕円形	弧状	232	200	44	1.48
SK70	8.50	7C・8C	5/25		不整形	台形状	432	160	-	
SK87	10.51	4C	13		長方形	台形状	156	96	-	
SK89	10.17.50	3D・4D	23/2.3		不整形	台形状	160	144	66	1.34
SK93	10.49	3E	21		楕円形	範状	152	112	-	
SK94	10.50	3E	16.17.21.22		円形	台形状	280	176	-	
SK108	11.48	6F	1.6		不整形	-	272	152	-	
SK112	8.49	9D	16		不整形	範状	208	144	-	
SD1	7.8.11.20	9E ~ 11E			弧状		272	39	1.59	
SD2	7.8.15.20.54	9E ~ 11E			弧状		116	38	1.63	
SD3	7 ~ 9.15.20.54	6E ~ 11E			弧状		112	31	1.81	
SD4	7.8.20.54	7D・8E ~ 11E			弧状		84	16	1.88	
SD5	7.20	10E・11E			弧状		32	26	1.87	
SD6	7 ~ 10.20.54	4B ~ 11E			弧状		128	29	1.81	
SD9	7.20.53	10E・11D ~ 11E			V字状		76	42	1.81	
SD14	7.53	10D・11D			半円状		24	-		
SD19	7.8.56	9D・10B ~ 10D			弧状		108	-		
SD20	7.8.56	8D ~ 10C			弧状		120	13	1.84	
SD22	7.8.20.55	10E			半円状		64	38	1.36	
SD27	8.20.54	8E・9D・9E			範状		44	22	1.87	
SD29	7 ~ 9.20	5E ~ 9E			半円状		84	32	1.62	
SD32	8	7B・8C・9B			弧状		92	22	1.79	
SD51	8.20.54	7E			弧状		64	26	1.82	
SD53	8.9.20.54	7E			半円状		44	24	1.75	
SD61	8.56	7C			弧状		80			
SD65	8.21.55	4B ~ 7B			V字状		148	40	1.60	
SD77	9.10.21.55	4C ~ 6C			V字状		108	35	1.64	
SD78	8.9.56	6B・6C・7B・7C			弧状*		120			
SD85	9.10.21.55	4D・4E・5E			V字状		48	30	1.82	
SD89	9.10.21.55	3D ~ 5E			圓段状		84	47	1.61	

## II 区

P1	SB39	6.21	17D	25	円形	半円状	20	16	14	1.00
P2	SB39	6.21	17D	20.25	円形	U字状	20	20	30	1.52
P3	SB39	6.21	17D	19	円形	台形状	27	24	11	1.56
P4	SB39	6.21	17D	15	円形	範状	30	28	18	1.58
P5	SB39	6.21	17D	20	円形	半円状	16	15	15	1.68
P1	SB51	6.21	18D	5	円形	U字状	8	8	17	1.61
P3	SB51	6.21	17D	25	円形	範状	20	20	14	1.56
P4	SB51	6.21	18D	5	円形	範状	20	16	23	1.57
SE26	6.21.57	17D	5.1		円形	U字状	56	52	66	0.90
SE39	6.21.57	17D	14.15		円形	U字状	60	56	90	0.76
SE44	6.21.57	17D	9		円形	範状	92	84	90	0.63
SK18	5.22.58	19C	24		長方形	U字状	160	40	65	1.04
SK26	6.22.58	17D	19.24		円形	弧状	121	88	20	1.47
SK27	6.22.58	17D	10		円形	半円状	172	112	42	1.36
SK28	6.22	17E	12.13.17.18		円形	半円状	212	173	60	1.24
SK30	6.22.58	17E・18E	22.23/2.3		円形	範状	180	140	66	1.12
SK32	6.22	17E	2		円形	半円状*	148	124	43	1.25
SK40	5.23	20C	9		不整形	U字状	136	75	85	0.86
SK41	5	20C	2.6		不整形	弧状*	186	176	51	1.16
SK42	5	20C	2.7		不整形	弧状*	182	120	53	1.13

別表 1

造構計測表

造構番号	SB %	開版%	グリッド		形態		規模(cm)		前面標高 (m)	備考
			大	小	平面	断面	長径	短径		
SK43	6.22	17D	15		方形	半円状	152	112	65	1.17
SK46	5.22.59	19E	12.17		円形	台形状	88	40	68	0.99
SK55	5.23.59	21D	4		円形	半円状	59	56	20	1.64
SK56	5.22.58	21D	6.7		方形	台形状*	99	80	43	1.37
SK67	3.25	25E	11		椭円形	弧状*	168	118	10	1.63
SK71	2.23.59	26C	24		円形	半円状	78	72	37	1.17
SK75	2.61	27D	11		不整形	弧状*	107	56	8	1.48
SK76	2.24	27C	20.25		椭円形	弧状*	101	72	6	1.48
SK78	2.23	27D	22		円形	弧状*	56	54	18	1.34
SK81	5.23	20B	12.13		椭円形	弧状*	144	118	28	1.35
SK82	5	20B	13.14		不整形	半円状*	164	72	29	1.30
SK84	5	20B	13		椭円形	弧状*	120	96	11	1.36
SK85	5	20B	13.17.18		不整形	弧状*	260	202	40	1.27
SK86	5.24	20B	17.18.22.23		椭円形	弧状*	262	136	56	1.00
SK87	5.23.61	20C	6.11.12		円形	弧状*	162	160	41	1.28
SK88	5	20C	17.18		円形	V字状	128	96	44	1.19
SK89	5	20C	18		椭円形	半円状*	156	88	51	1.24
SK90	5	21B	2.3		椭円形	弧状*	208	(150)	25	1.38
SK91	5	21B	8.9		椭円形	弧状*	117	104	15	1.47
SK92	4.24.60	21B	13.14		円形	弧状*	168	160	25	1.36
SK93	4.24.60	21B-21C	15/11		不整形	台形状	272	201	55	>SK94
SK94	4.24	21B-21C	15.20/11.16		不整形	V字状	192	132	40	<SK93・SK95
SK95	4.24	21B-21C	20/16		不整形	台形状	208	145	55	>SK94
SK96	5.23.60	21C	3.8		円形	半円状	106	96	37	1.33
SK97	4.24	22B	5		円形	半円状*	96	96	40	1.28
SK107	3.59	24C	11		円形	半円状	89	64	47	1.21
SK120	2.25	26B	14.15		円形	弧状*	160	102	7	1.48
SK121	2.23	26C	16		長方形	弧状*	192	171	20	1.30
SK123	2.23.60	26C-27C	23/3		円形	半円状	136	120	79	0.70
SK124	2.23.60	26C	18.23		椭円形	半円状	96	72	36	1.16
SK126	2.23	27B	14		不整形	弧状*	168	96	25	1.24
SK127	2.23	27B	20		長方形	台形状*	136	88	34	1.14
SK128	2.24.61	27B	20.25		長方形	弧状*	160	80	13	1.28
SK130	2.25.61	28C	7		円形	弧状*	56	53	12	1.16
SD1	6.25	17C-18C			弧状*		76	10	1.64	
SD2	6.25.62	17C-18C			弧状*		84	11	1.66	
SD3	6.26	17C-17D			弧状		162	15	1.60	
SD5	6.26	18C			弧状*		34	10	1.68	
SD6	6.26	18C-18D			弧状*		78	8	1.76	
SD7	5.6.25	18B-19B-20B			弧状*		136	7	1.67	
SD8	5.6.25.62	18B-19B-20B			弧状*		106	8	1.64	
SD12	5.26	18B-18C-19C			弧状*		93	7	1.65	
SD13	4~6.25.26	17D~23B			半円状*		330	19	1.65	
SD14	4~6.25	16D~23B			弧状*		77	19	1.58	
SD17	4~6.26	19C~23B			弧状		45	8	1.63	
SD25	2~6.25.26	17D~26B			弧状*		253	23	1.58	
SD29	5.6.25	17E~19E			弧状		107	19	1.63	
SD31	5.6.25	17E~19E			弧状*		102	14	1.61	
SD33	3~6.25.62	17D~25B			弧状		136	20	1.60	
SD35	3~6.25.62	17E~26E~25D			弧状*		143	27	1.58	
SD45	5.6.26	18D-19D			弧状*		41	15	1.64	
SD47	5.26	19D			弧状		63	4	1.74	
SD48	5.25	19D~20E			弧状*		46	8	1.72	
SD50	3~6.25.62	19E~25E			弧状*		36	4	1.77	
SD52	4.5.25.62	20D~23E			弧状*		136	13	1.72	
SD58	3.4.25.62	20C~24D			弧状*		10	8	1.73	
SD61	3.4	23D~24E			弧状*		90	11	1.73	
SD62	3.4	23D~23E			弧状*		59	7	1.77	
SD64	3.25.63	24CD~25CD			弧状*		123	11	1.64	
SD65	3.25.63	25B~26D			弧状*		158	13	1.62	
SD66	2.3.25	25B~26D			弧状*		148	10	1.64	
SD72	2.26.62	26B~27D			弧状*		74	4	1.50	
SD80	2.26	26D~26E			弧状*		135	9	1.54	
SD100	4.25	23B~23C			弧状*		57	9	1.63	
SD101	3.4.25	23B~23C~24B			弧状*		135	16	1.59	
SD102	3.4.25	23C~24C			弧状*		62	7	1.62	
SD103	3.4.25	23C~24C			弧状*		50	8	1.62	
SD109	3.25	24B~24C			弧状*		111	10	1.63	
SD115	3.63	25B	23.24.25		U字状		30	43	1.16	
SK54	4.25.61	21D	20.25		椭円形	弧状*	231	128	8	1.74
SK108	3.26.62	24B~24C~25C			不整形	弧状*	536	504	11	1.59



遺物觀察表

別表2

別表2

遺物觀察表

別表2

遺物觀察表

別表2

別表2

卷之三

### 遺物觀察表

別表2

別表 2

造物観察表

土製品観察表

No.	地区	グリッド	遺構名	層位	種類	法量(cm)			色調			胎土	調査	備考
						長さ	幅	厚さ	外	内				
289	I	7E	SK50	手づくね土器		4.0	浅黄橙	浅黄橙	石,雨			手づくね		
290	I	4E	SK99	手づくね土器		2.5	浅黄橙	浅黄橙	石,長,角			手づくね		
291	I	8E	SD29	手づくね土器		3.2	浅黄橙	浅黄橙	(石)多,長,海,角(多)			手づくね	燕須江瓶	
293	I	5D		手づくね土器		3.9	浅黄橙	浅黄橙	(石)多,長,角			手づくね	燕須江瓶	表面スス
293	I	7E		棒状土製品	8.4	3.4	2.9	浅黄橙	—	石,長,雲		手づくね	燕須江瓶	
294	I	7E		棒状土製品	10.0	3.4	2.9	黄灰,灰白	—	石,長,雲		手づくね	燕須江瓶	
295	I	7D14		棒状土製品	9.2	4.2	3.6	浅黄橙	—	石,長,角置		手づくね	燕須江瓶	
296	I	6D	SD67	支脚	10.4	4.7	1.7	棕	—	(石)多,長,海,角		手づくね		
297	I	5D25	支脚	8.1	6.0	6.0	棕	—	(石)多,長,海,角		手づくね		近部ドナツ状	
298	I	5D	支脚	8.6	5.0	—	棕	—	(石)多,長,海,角		手づくね			
299	I	3D	SK95	支脚	5.4	5.2	4.3	浅黄橙,黑	に赤い斑紋	(石)多,長,海,(多),角		手づくね	ナナメハケ	断面菱形状
300	I	5D1	IV 円筒状土製品			10.6	棕	棕	石,長,角		タテハケ・ナデ	内:輪縁み抜著しい		
301	I	7D	IV 円筒状土製品			10.0	浅黄橙	浅黄橙	(石)多,長,海,角(多)		手づくね		近部厚4cm	
302	I	6E	SK64	筋跡車	4.3	4.5	2.5	褐灰	—	石,長,角,雲				
303	I	6C・7E	III 編羽口		3.6	2.3	1.6	褐,深棕	—	石,長				

石製品観察表

No.	地区	グリッド	遺構名	層位	種類	法量(cm)			重量(g)		石材	調査	備考
						長さ	幅	厚さ	枚	枚			
304	I	6C	SK74		砾石	3.0	2.2	1.1	1	10.90	砾灰岩		
305	I	7C10		III	砾石	6.0	4.3	2.3	1	49.33	砾灰岩		
306	I	5D12		III	砾石	6.2	7.2	2.1	1	101.47	砾灰岩		
307	I	10D6		III	砾石	3.8	3.6	1.0	1	20.14	砾灰岩		
308	II	17D23	SD33		軽石製品	10.3	6.8	3.8	1	118.17	軽石	中央孔1箇所	右側面キザミ

金属製品観察表

No.	地区	グリッド	遺構名	層位	種別	種類	法量(cm)			備考
							長さ	幅	厚さ	
309	I	9E2	SD3	銅製品	文太鑄		3.80	4.00	0.20	鉛の軸1.0cm、厚さ0.3cm/孔径0.15cm
310	I	7C8	SK55	銅製品	鋲頭		5.50	2.10	上0.7 F 0.1	
311	I	10E16.21	SK7	銅製品	舟釘		6.60	盤1.0	0.6	0.75 折れ曲がっている
312	I	8.9F・9E~11E	SD1	銅製品	釘		8.10	—	1.20	通0.75 体0.5
313	I	8.9F・9E~11E	SD1	銅製品	釘		4.00	盤0.7	0.6	0.40
314	I	9E21	SD3	銅製品	鉢繩		4.80	—	1.30	1.20
315	I	7B・7C	SD64	銅製品	鉢(天保道宝)		2.35	2.35	—	0.15 初跡1017年

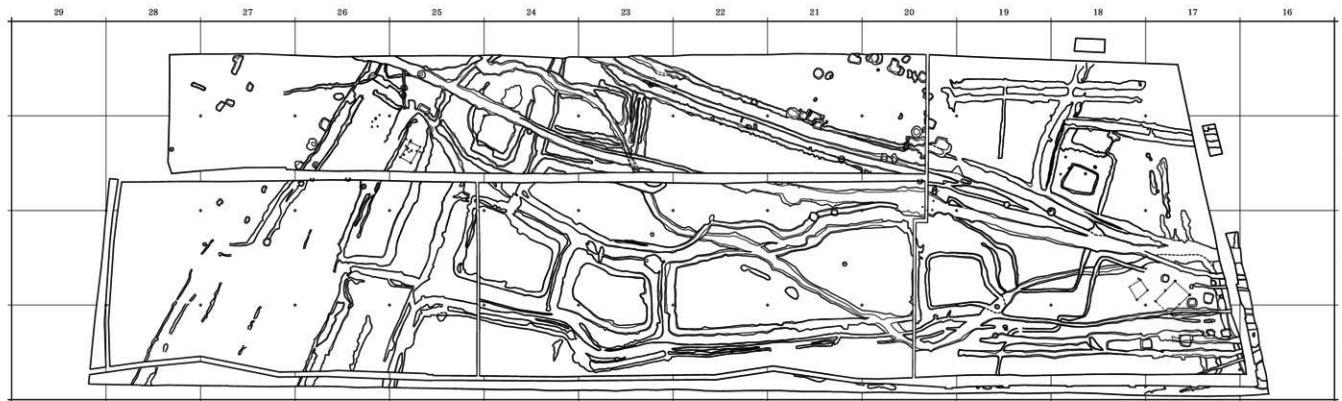
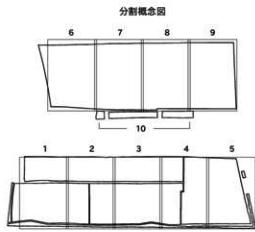
木製品観察表

No.	地区	グリッド	遺構名	層位	種類	法量(cm)			木取り	樹種	試料%	備考
						長さ	幅	厚さ				
316	I	7D3.4.8.9	SK47	卯形(漆塗輪)		7.2	0.5	0.3	楓木取り	ケヤキ	4	
317	I	7C8	SK55	管状木製品		23.6	0.6	0.3	楓木	スギ		
318	I	6E1.2	SK67	不明		8.9	3.1	0.5	楓木	スギか		孔1か所 内面または半円形板材か
319	I	6E21	SK62	不明		14.1	3.5	0.3	楓木	スギ	9	下端2方向から加工
320	I	6E21	SK62	管状木製品		8.3	0.6	0.3	楓木	スギ	20	下端2方向欠損
321	I	6E12.13.17.18	SK61	容器		40.0	—	0.8	楓木	ケヤキ	7	内面崩壊りか
322	I	6E12.13.17.18	SK61	柵		11.1	1.4	0.4	楓木	ネズコ	6	
323	I	6E12.13.17.18	SK61	管状木製品か		13.8	0.9	—	スギ			上端欠損
324	I	6E12.13.17.18	SK61	不明		5.7	2.6	1.0	楓木	ケヤキ	8	孔1か所 先端を削っている
325	I	7C7.8	SK52	不明		31.1	16.4	1.4	楓木	スギ	5	孔1か所 表面に刃物痕
326	I	9E~11E	SD2	草履芯		25.0	5.2	2.5	楓木	スギ	12	上方に孔 左側に切り込み
327	I	9E~11E	SD2	不明		13.4	2.3	0.5	楓木	スギ	12	下端2方向から加工
328	I	7E	SD3.29	刀物の柄		39.8	3.3	2.3	楓木	スギ	10	下端に孔1か所 二又軽部分23.0cm
329	I	6E12.17	SD94	管状木製品		9.8	0.5	0.5	楓木	スギ		上端欠損
330	I	6E12.17	SD94	管状木製品		12.3	0.6	0.4	楓木	スギ		上端欠損
331	I	9C15	9C-P1(SB5)	柱根		17.8	14.2	13.1	クリ	1		上端欠損
332	I	9C19	9C-P7(SB5)	柱根		31.4	13.2	8.5	クリ	3		上端欠損
333	I	9C18	9C-P6(SB5)	柱根		35.2	22.0	17.3	楓木	クリ	2	上端欠損
334	I	9C	杓子状木製品			13.2	6.8	0.6	楓木	スギ	11	柄部分欠損 繩掛け痕? 2か所 刃物痕
335	I	8E	不明			14.0	2.0	0.6	楓木	スギか		刃物痕
336	I	16E1	管状木製品			21.6	0.8	—	楓木	スギ	16	
337	II	17D5.10	SE36	曲物		15.5	—	—	木取	スギか	14	タール状のものが付着 クレゾ木被留
338	II	17D5.10	SE36	容器(漆器底)		7.4	—	—	楓木取り	ウコギ	15	内面:タール状のものが厚く付着 ロクロ挽き痕
339	II	16E1	曲物			24.1	9.3	0.4	スギか		—	一部に黒色付着物、タール状のものか。
340	II	7D6	SB39 P4	柱根		46.4	11.3	10.3	楓木	スギ	17	角材に加工
341	II	18D	SB51 P4	柱根		35.0	10.3	9.1	芯丸木	クリ	18	極端な加工

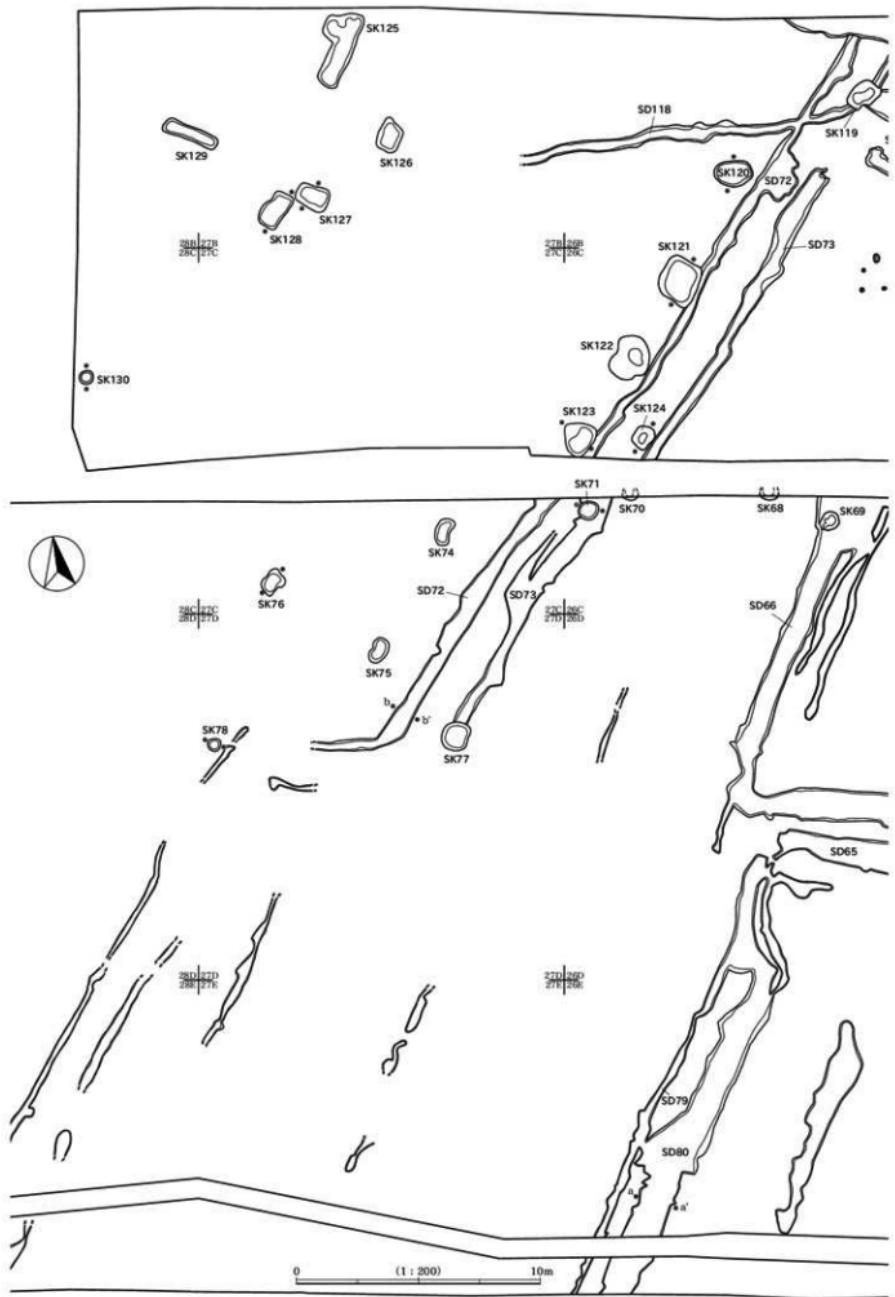
# 図 版

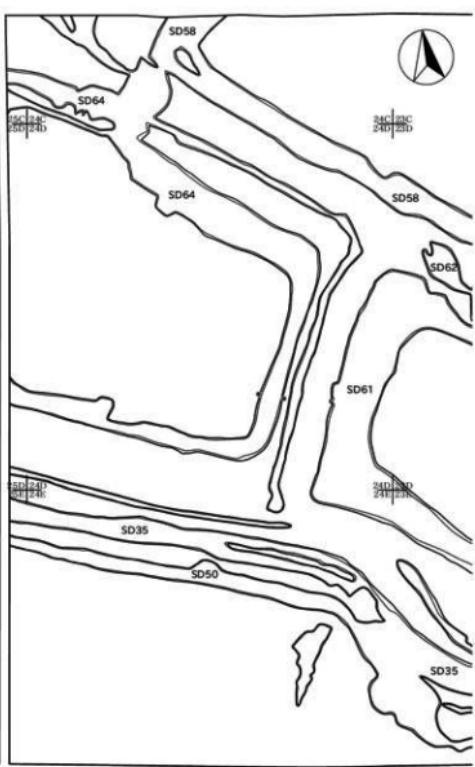
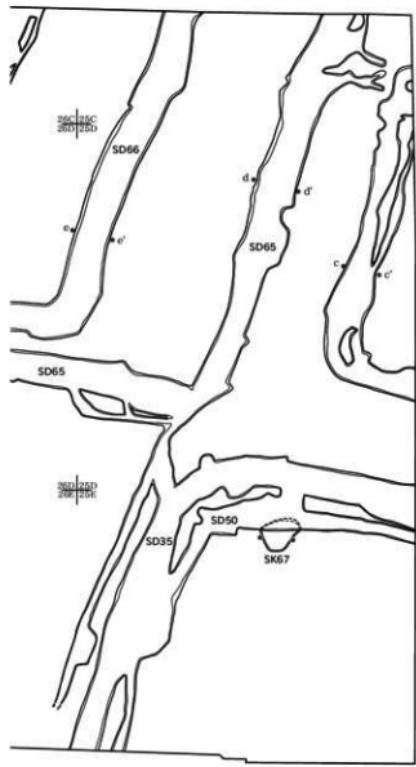
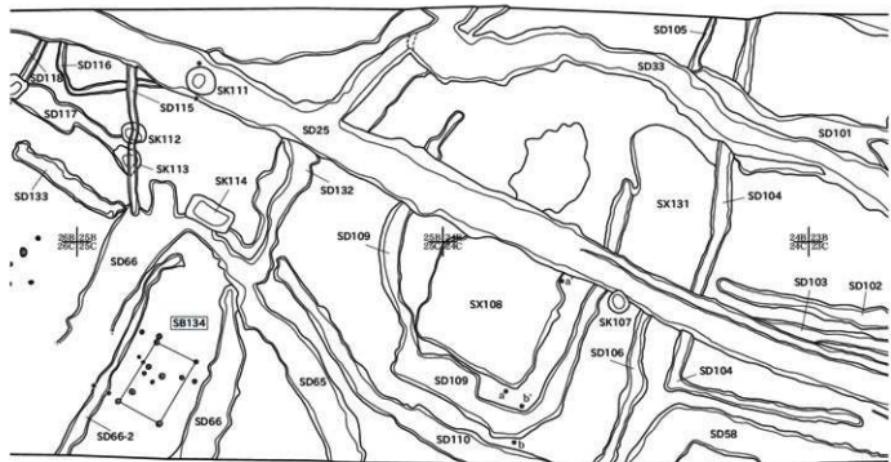
## 凡 例

- 1 造構実測図は完掘時の状況を示しており、必ずしも切り合いを表したものではない。
  - 2 古代の土器は須恵器断面塗りつぶし、土師器白抜きとした。
  - 3 土器の口縁部実線を中心線両端で切っている場合は、口径を推定復元したものである。
  - 4 木製品の木目は、木取りを表示したものであり実際の年輪幅とは異なる。
  - 5 スクリーントーン凡例
- |         |  |
|---------|--|
| 黒色土器・黒漆 |  |
| 赤 彩     |  |
| 墨 痕     |  |
| タール     |  |
| 炭化物     |  |

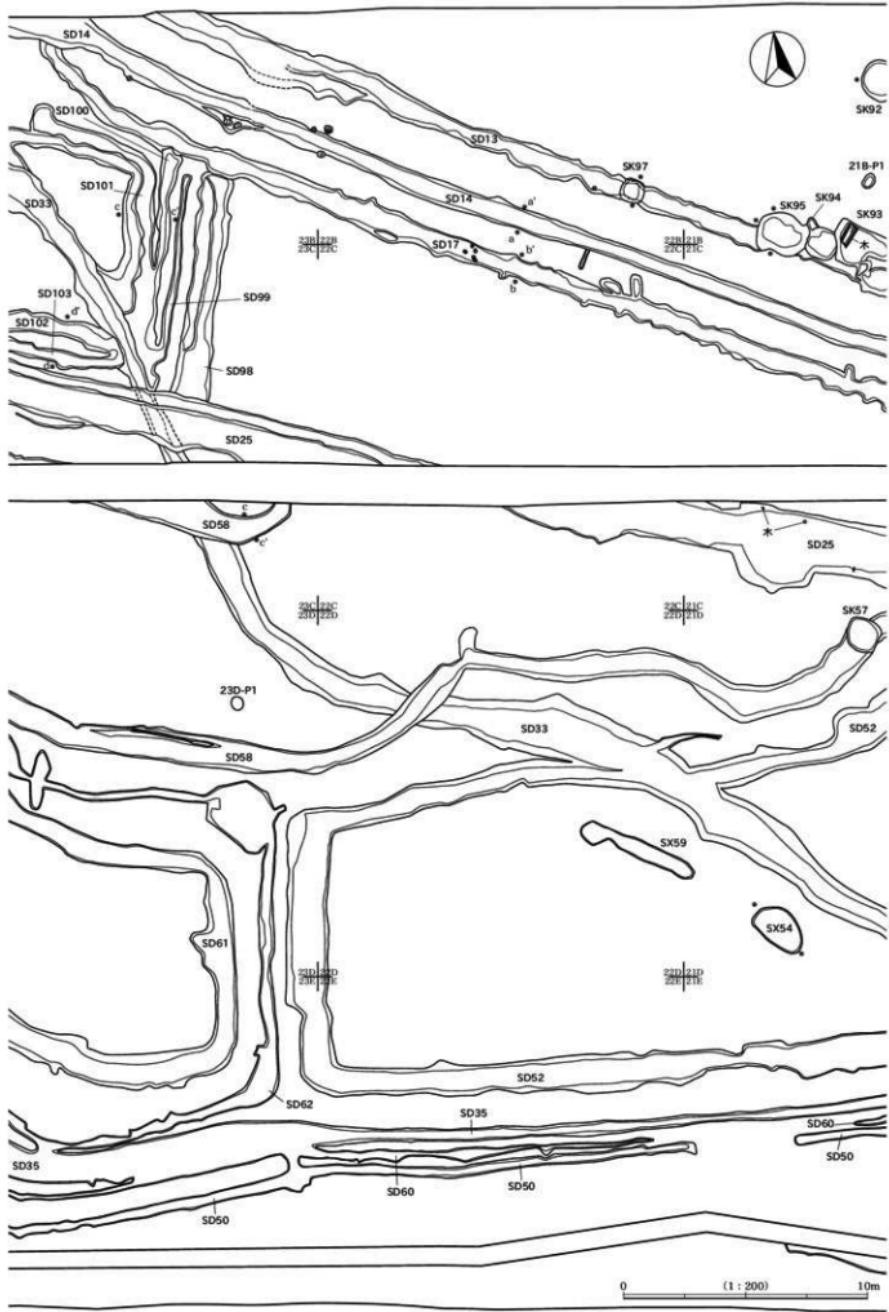


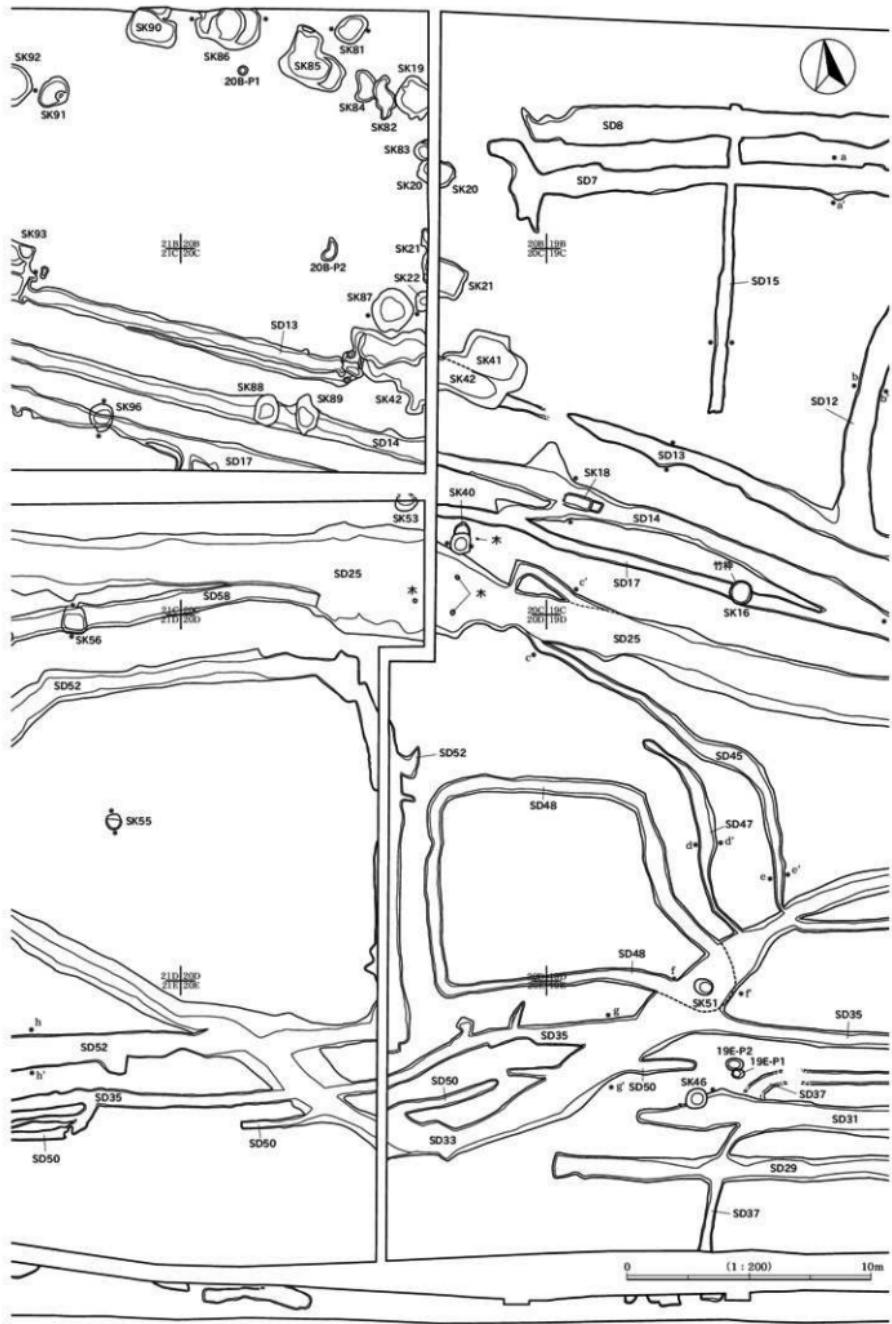
0 (1 : 600) 30m

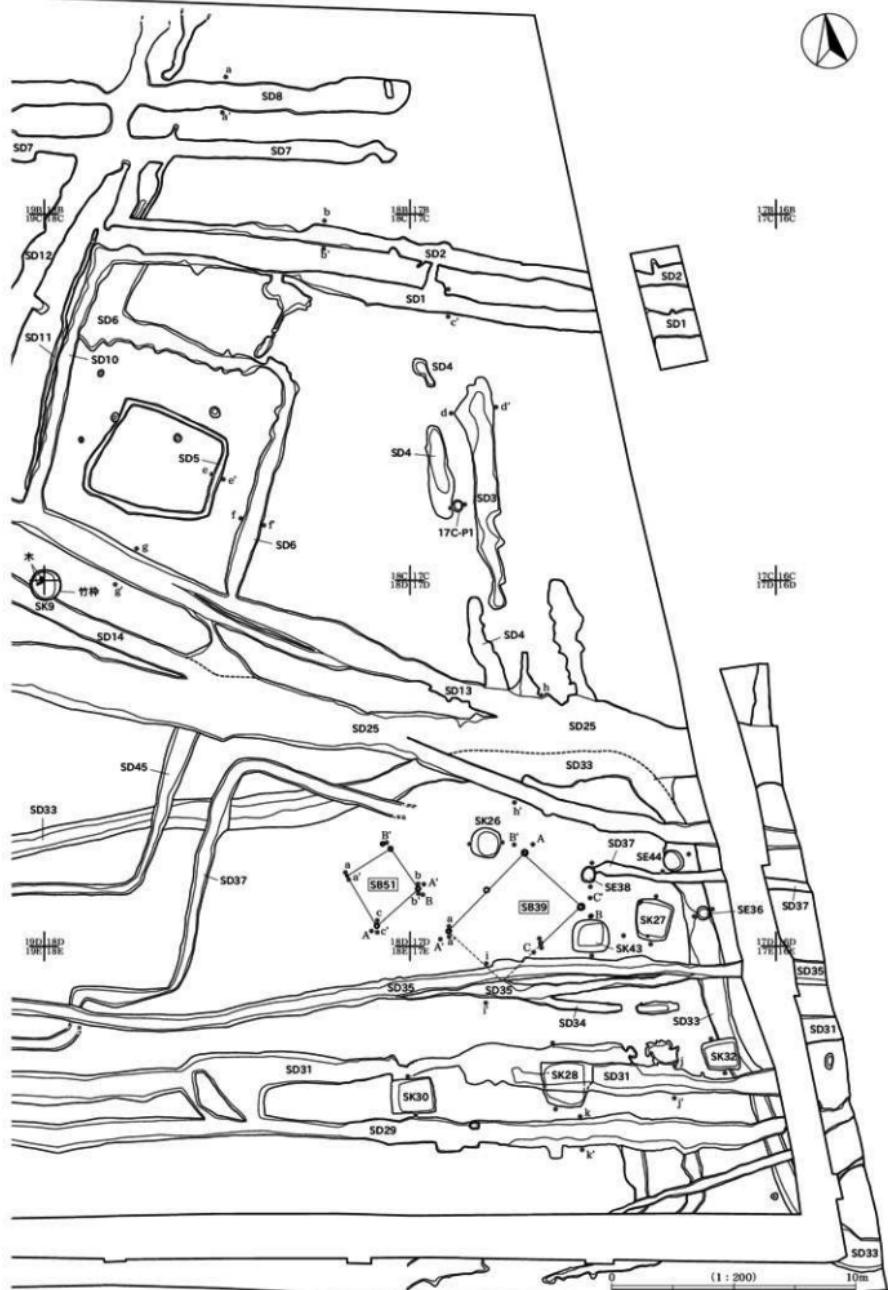


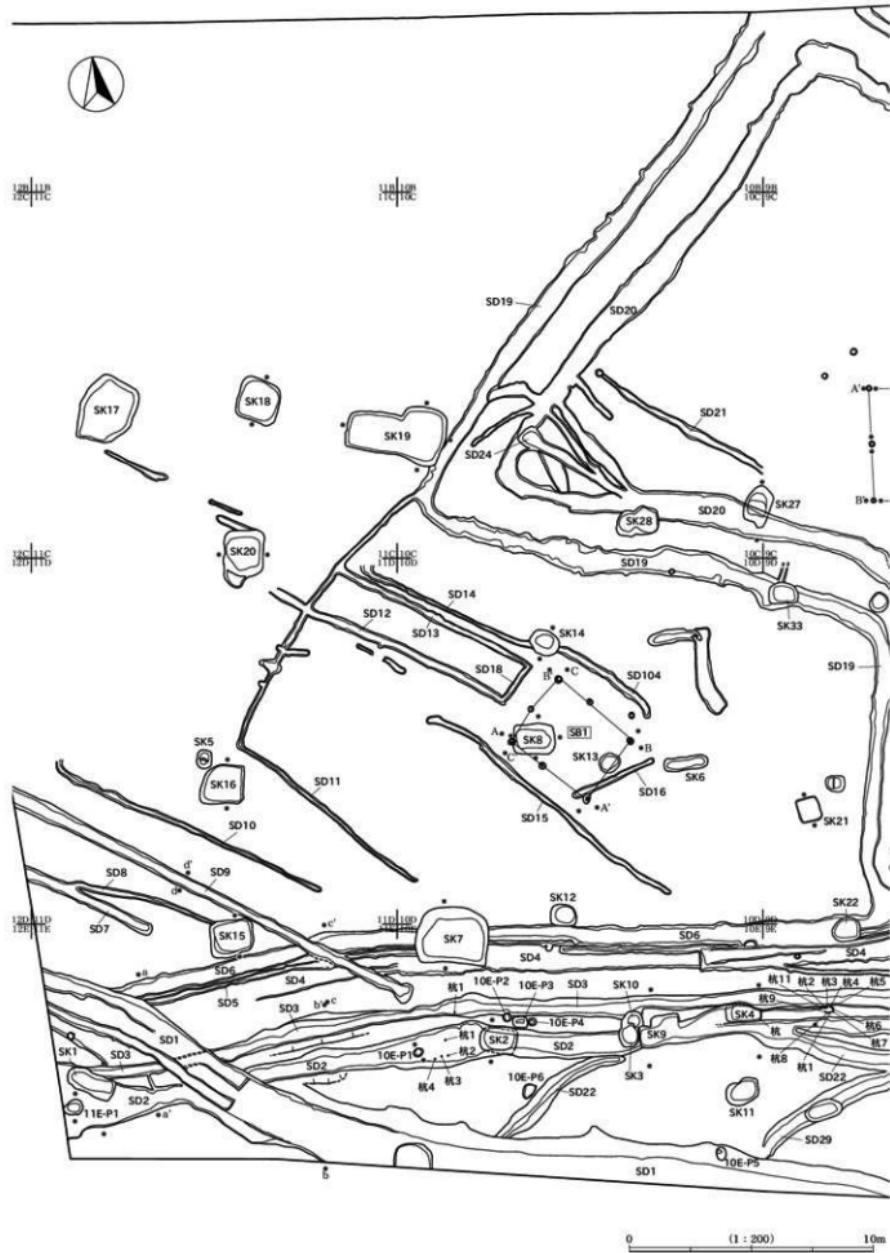


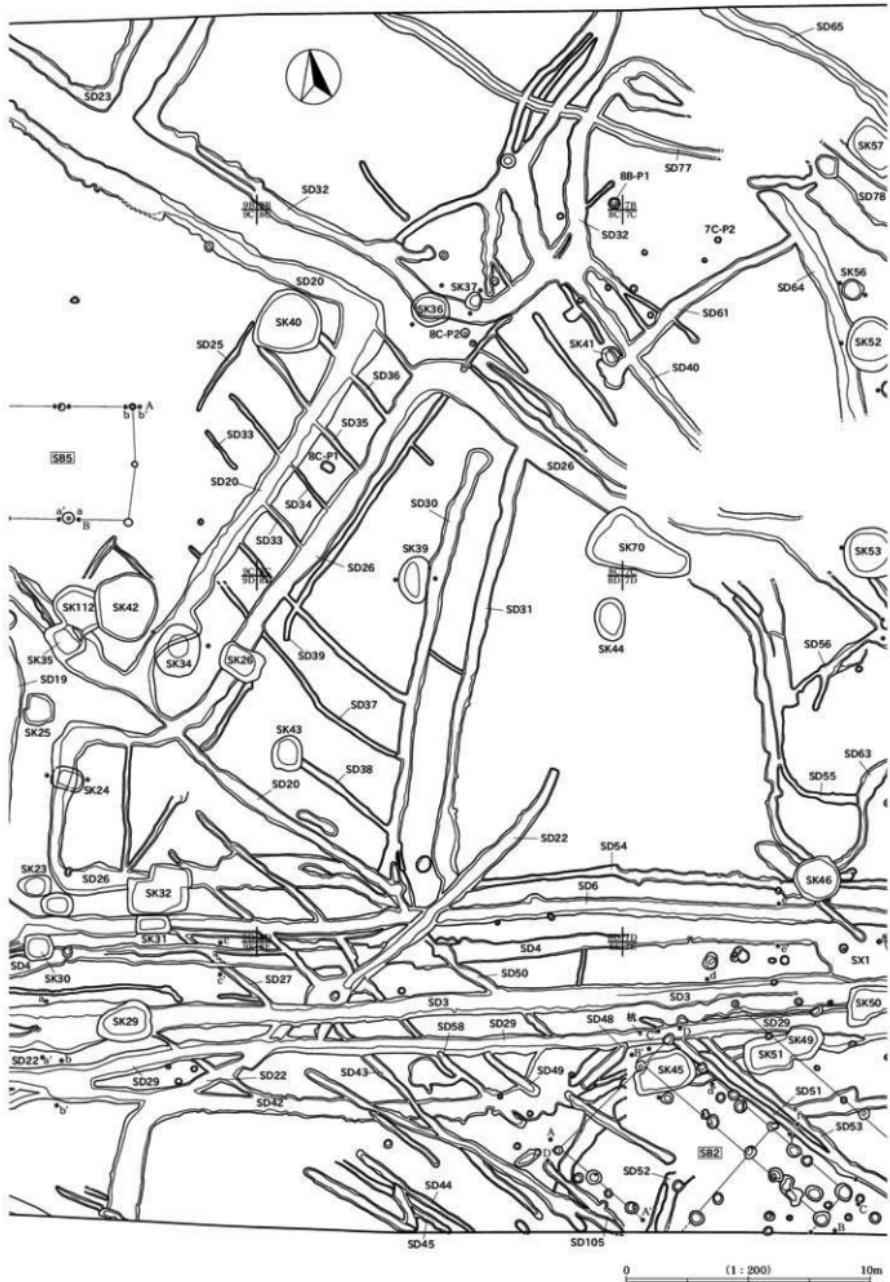
(1 : 200) 10m









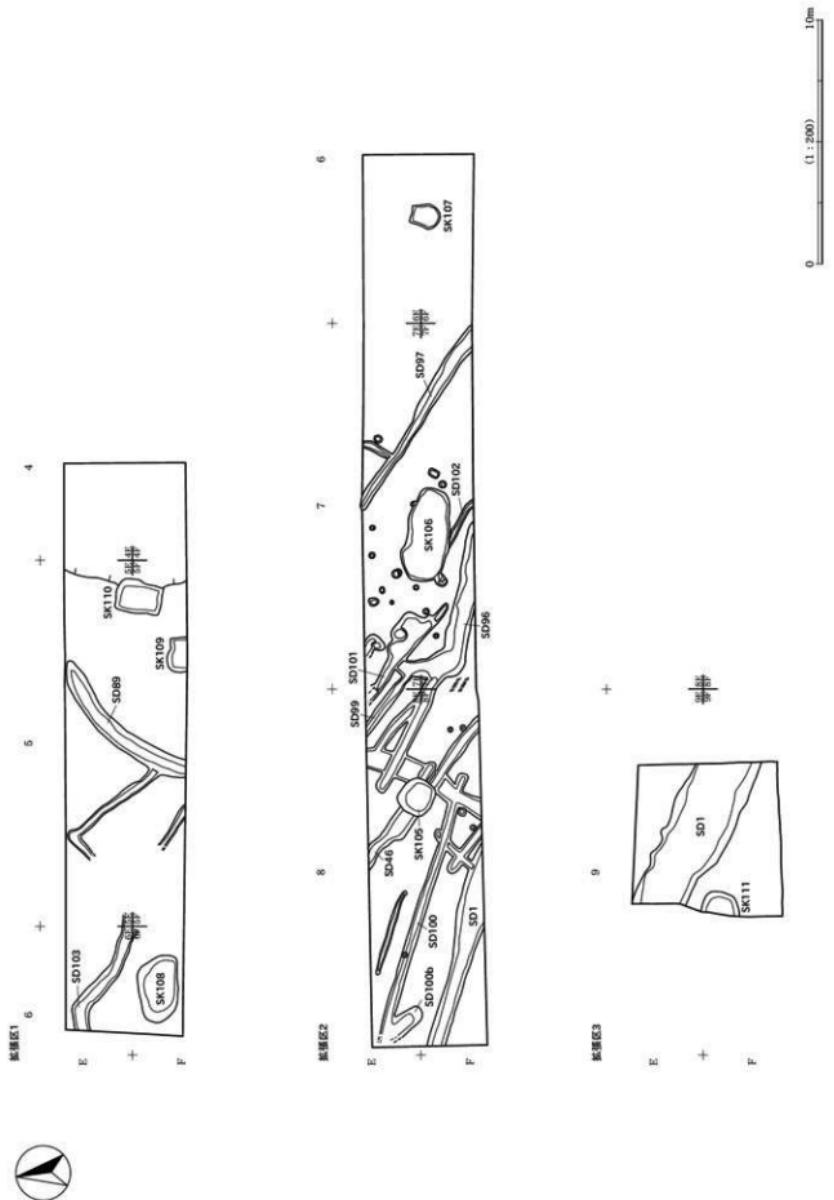


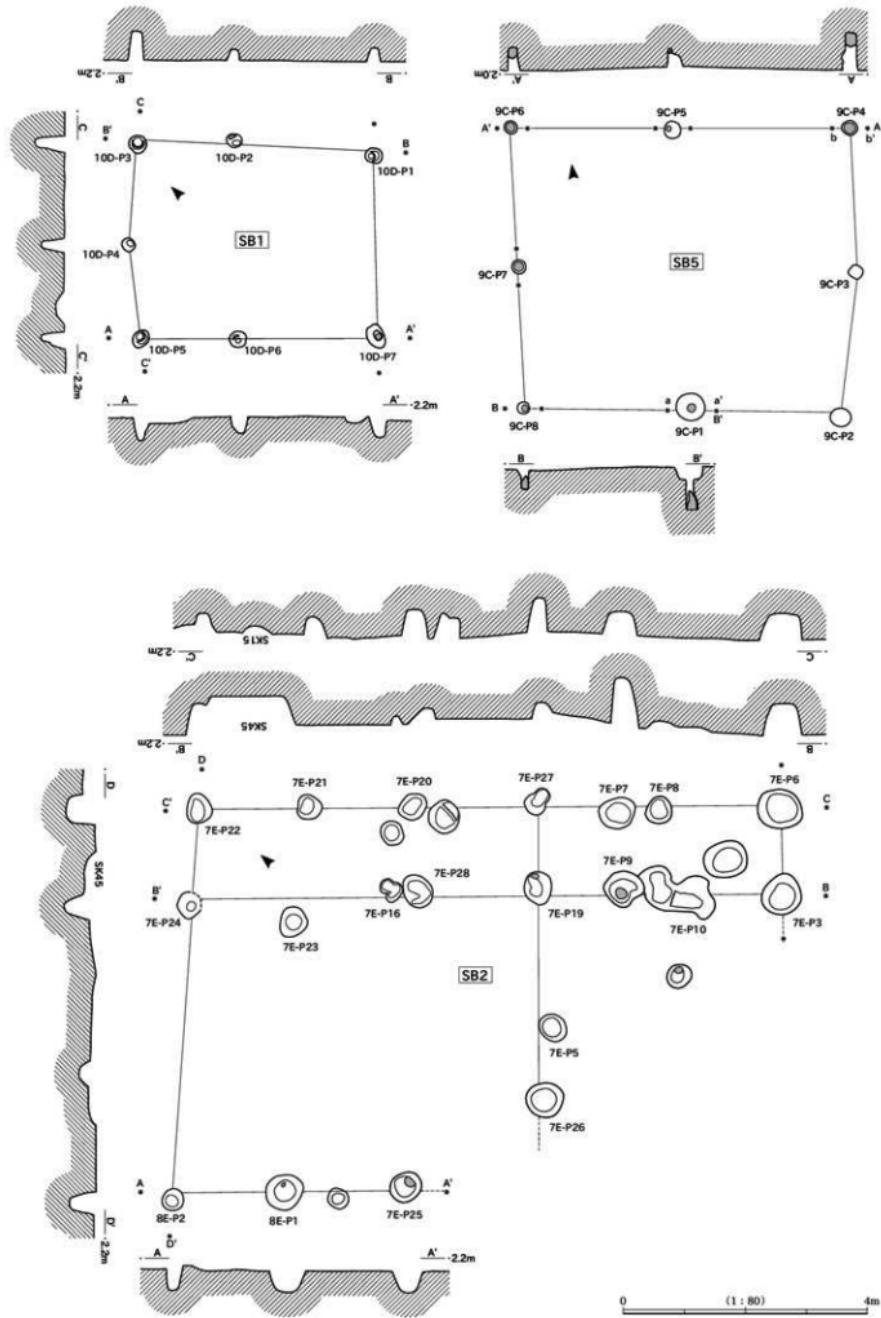


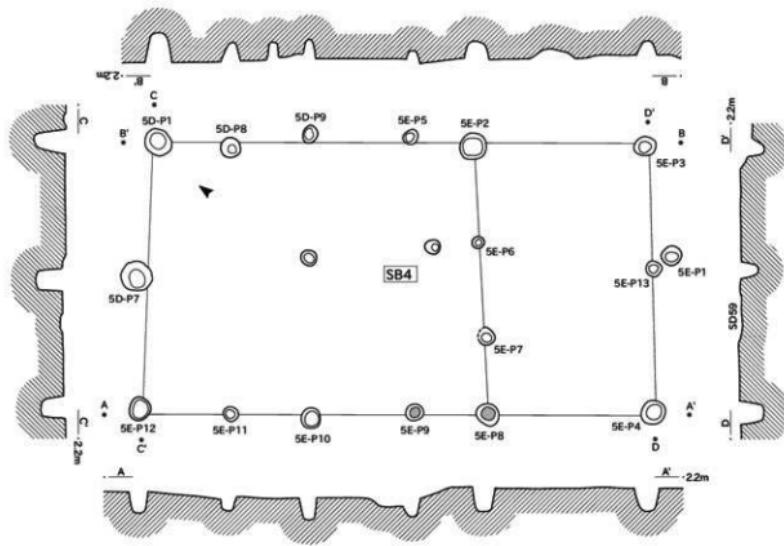
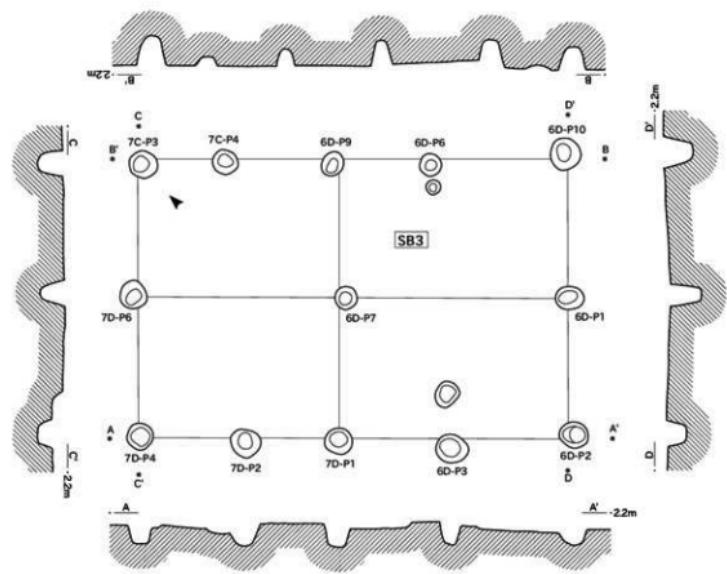
0 (1 : 200) 10m



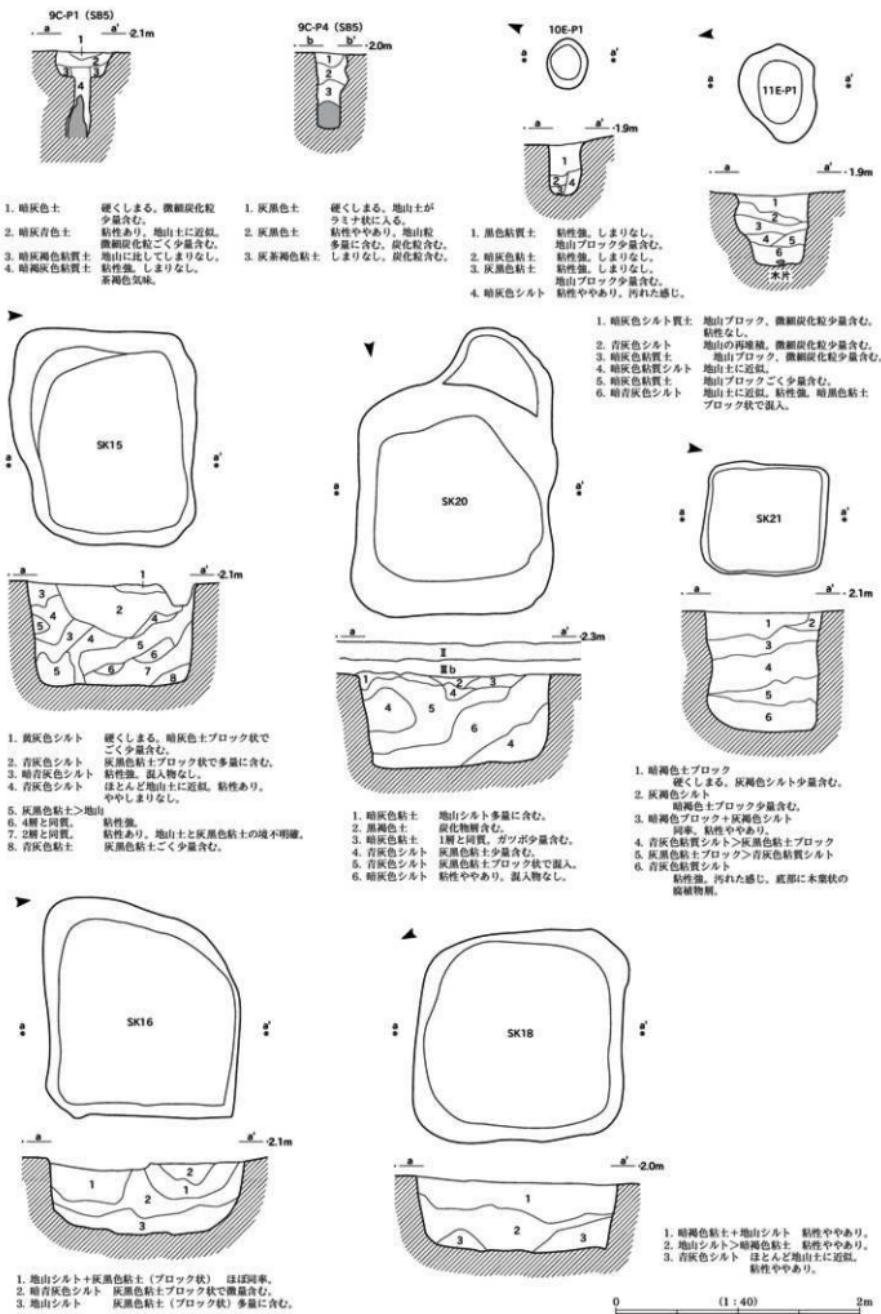
0 (1 : 200) 10m

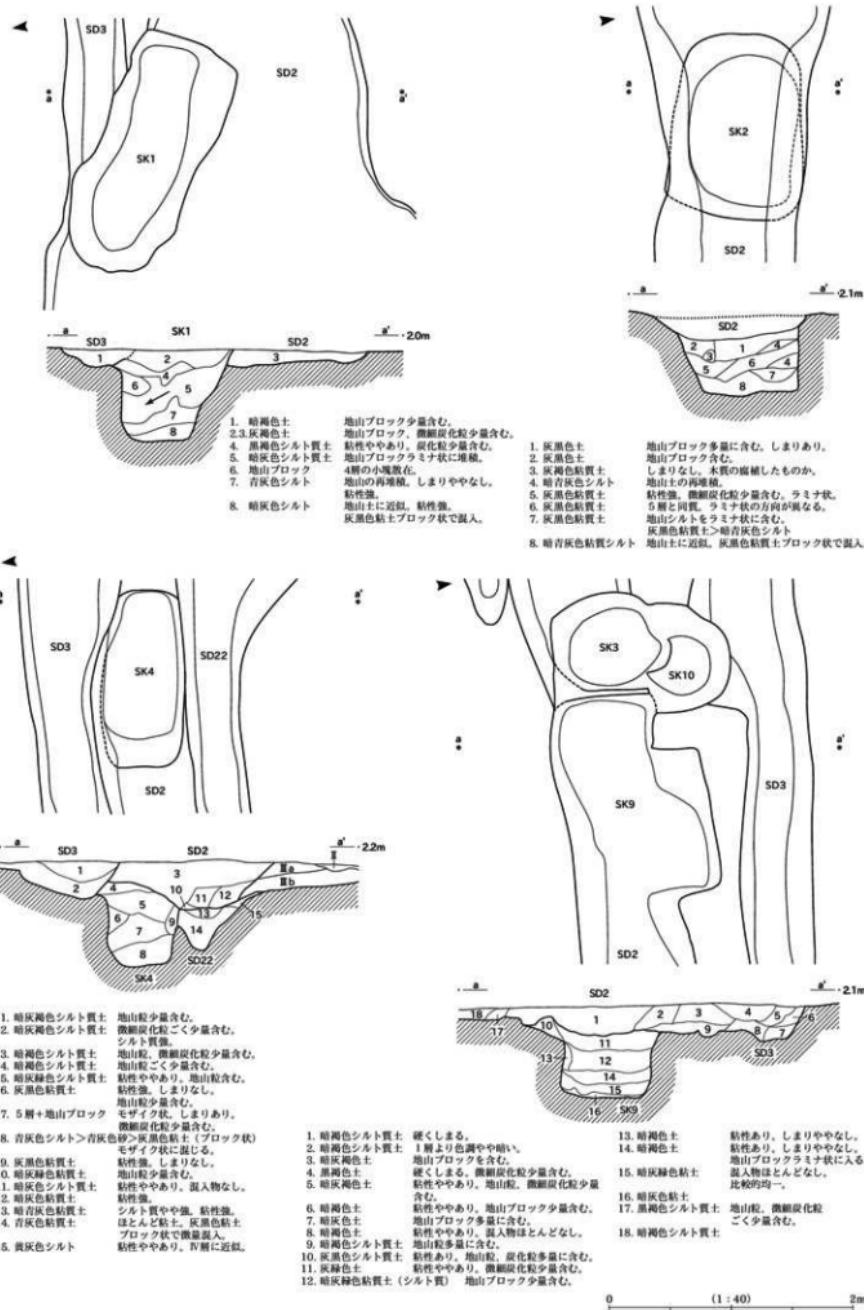


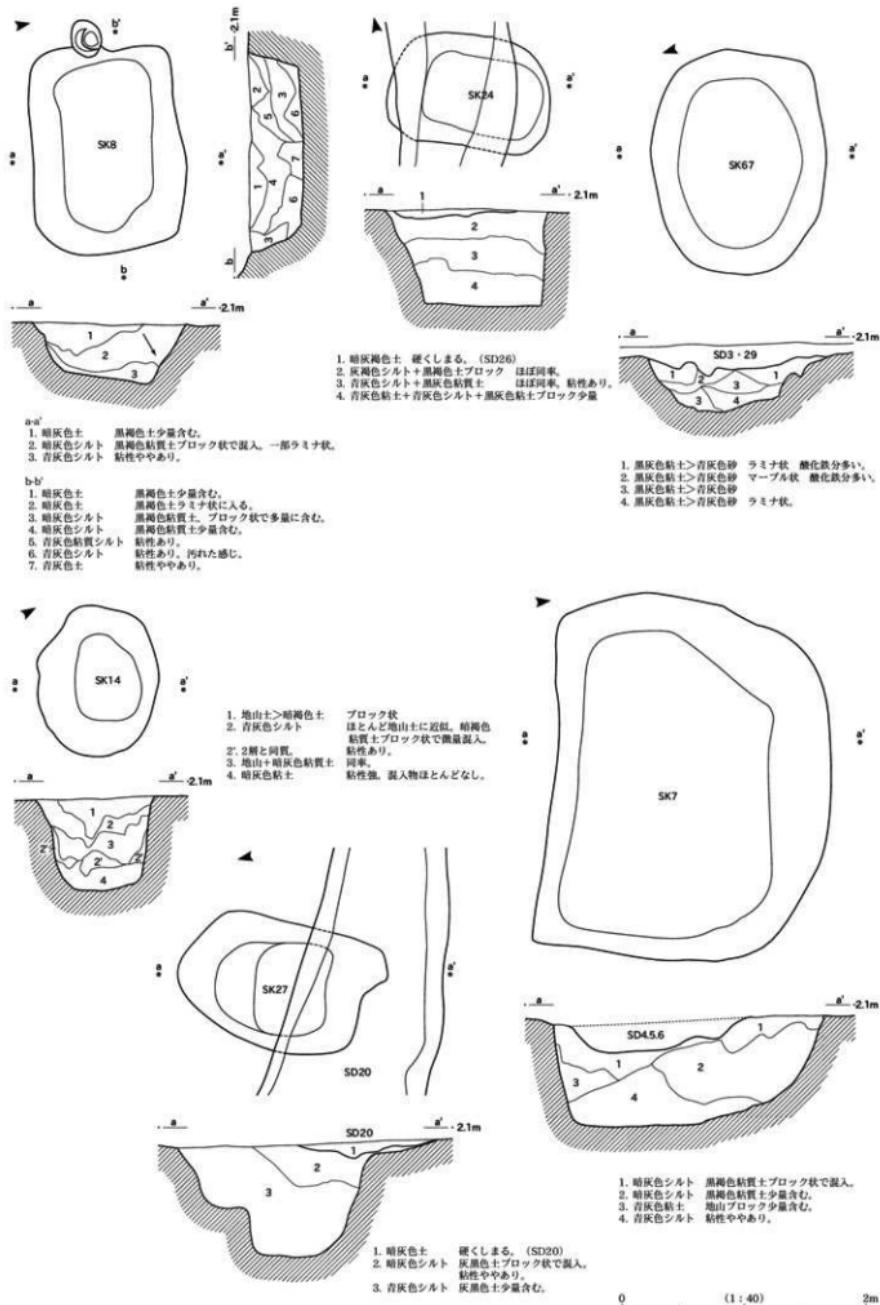


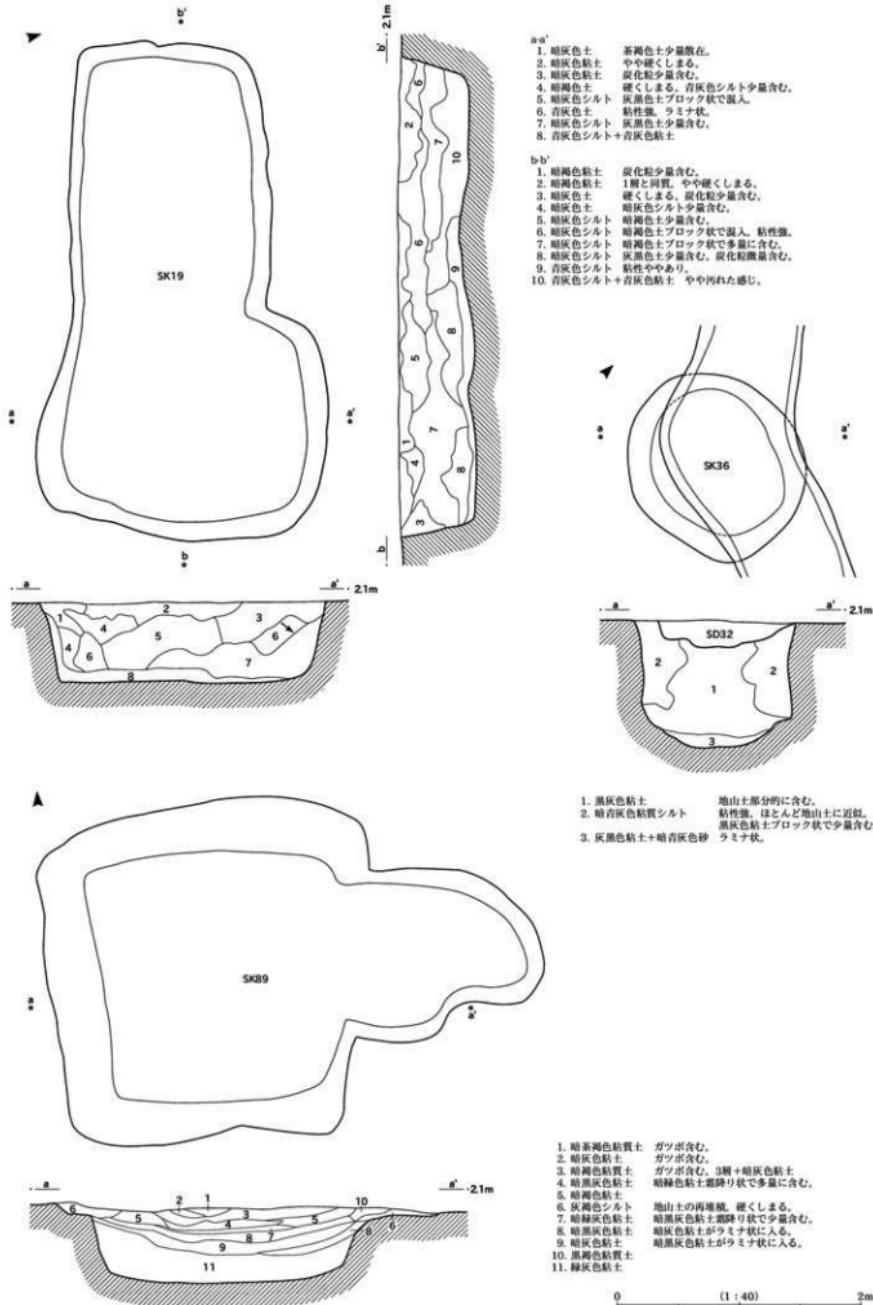


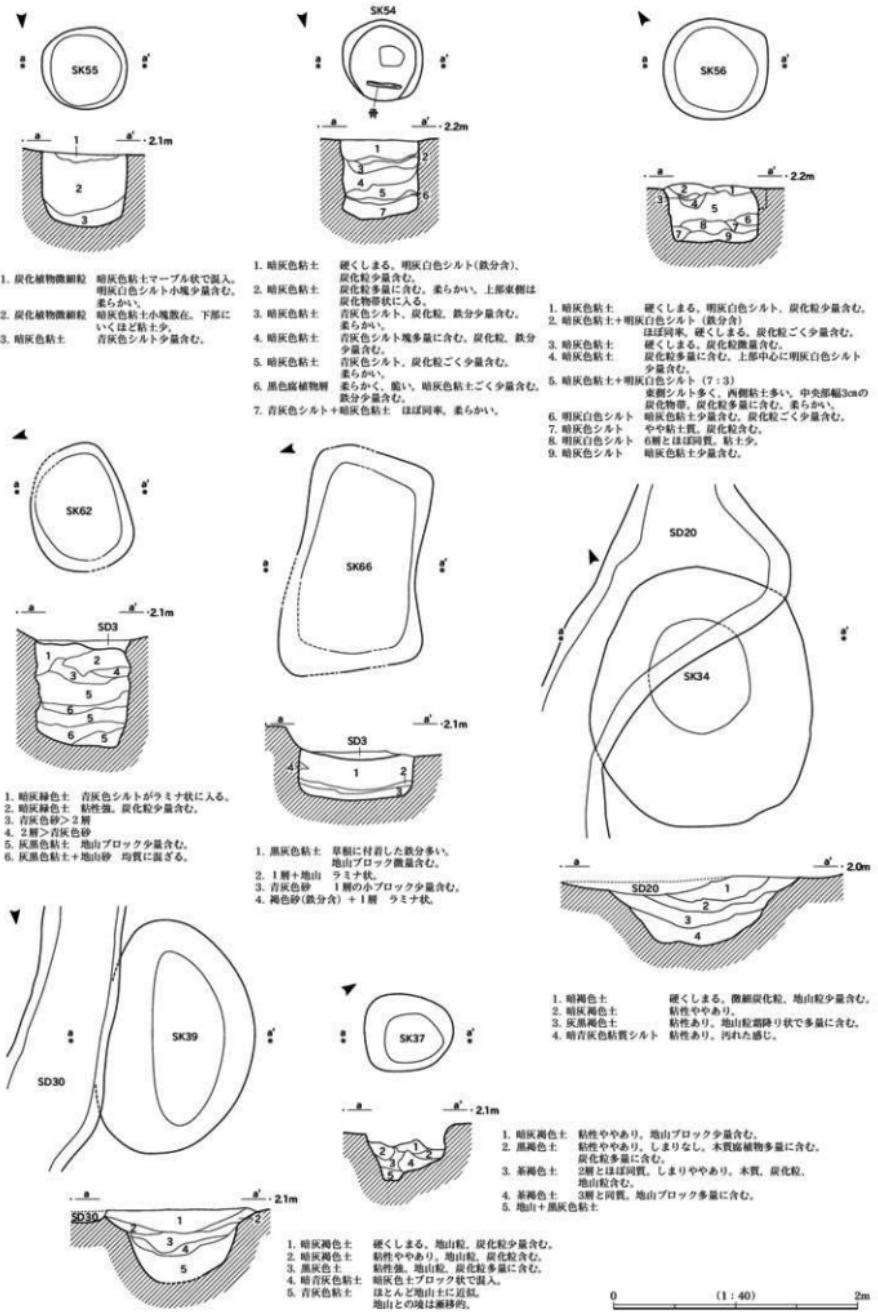
造構別図 3

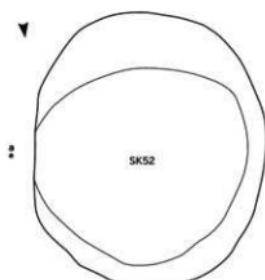




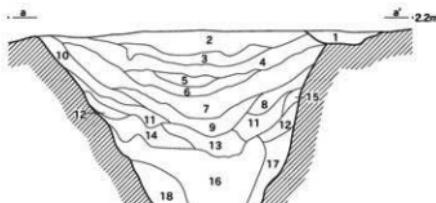
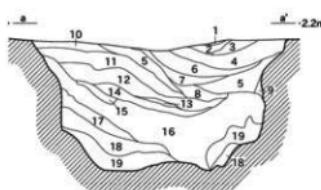
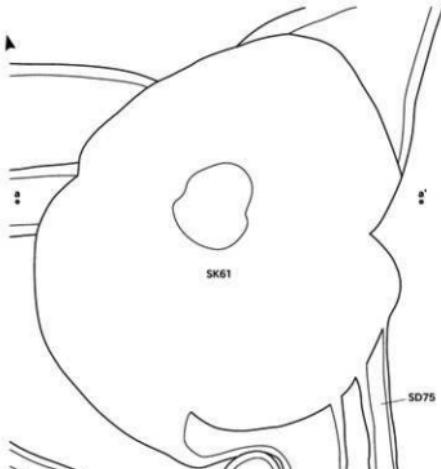
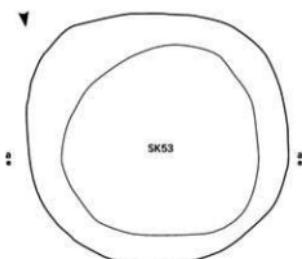
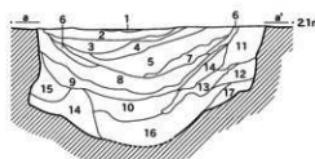








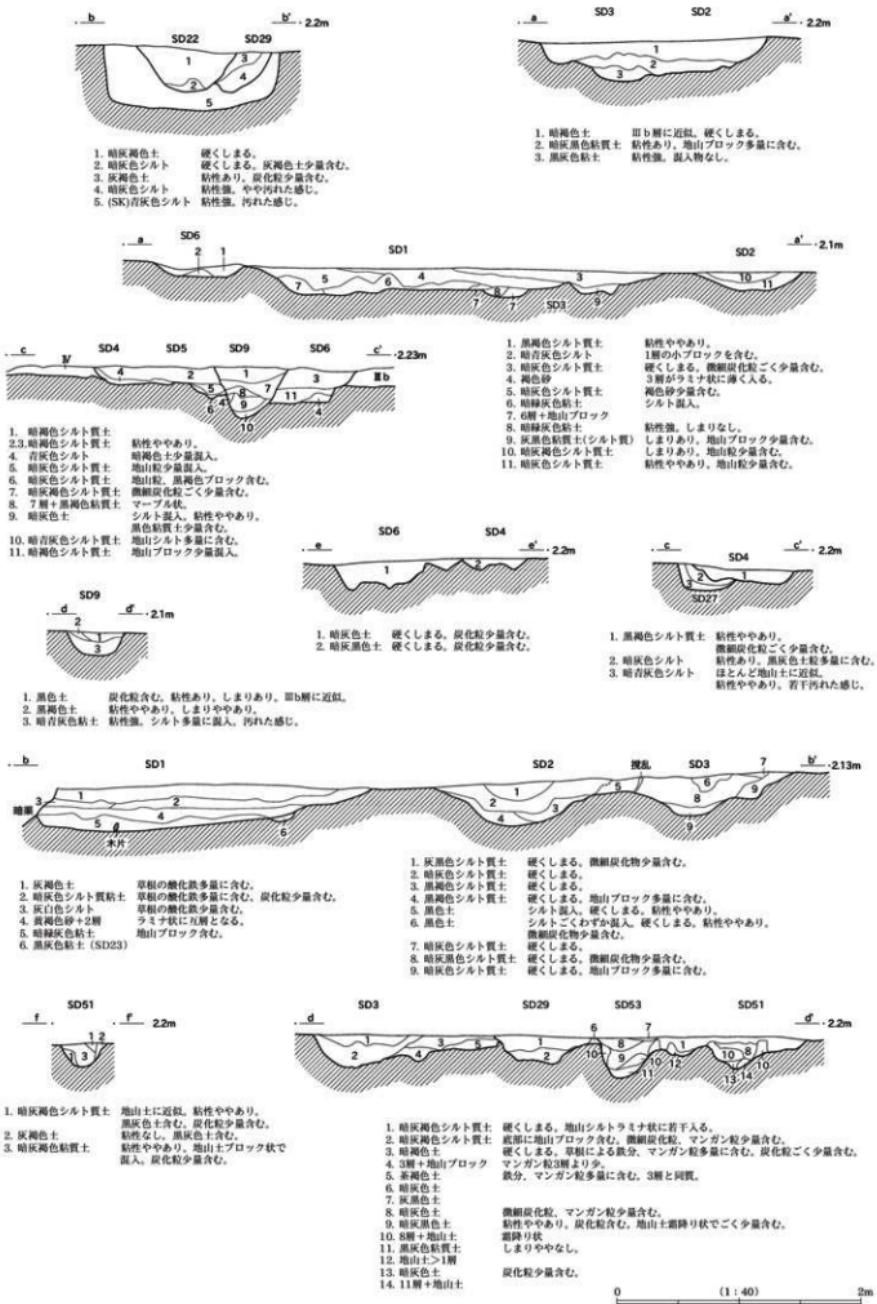
1. 淡褐色植物細胞  
2. 暗灰色粘土  
3. 明灰白色シルト+暗灰色粘土  
4. 淡褐色植物  
5. 暗褐色粘土  
6. 淡褐色植物細胞  
7. 明灰白色シルト+灰褐色粘土  
8. 灰褐色粘土  
9. 暗褐色粘土  
10. 明灰白色シルト+灰褐色粘土  
11. 灰褐色粘土  
12. 暗褐色粘土  
13. 灰褐色粘土+青灰褐色シルト  
14. 淡褐色粘土+青灰褐色シルト  
15. 青灰褐色シルト  
16. 青灰褐色シルト  
17. 暗灰色粘土
- 非常に柔らかく薄い。  
硬くしまる。明灰白色シルト少量含む。炭化粒少量含む。  
小ブロックで混在。硬くしまる。炭化粒ごく少量含む。  
しまりやあり。明灰白色シルトごく少量。小塊で含む。炭化粒ごく少量含む。  
しまりなし。明灰白色シルト+ブロック多量含む。下部に炭化粒ごく少量混入。  
明灰白色シルト。粘土質で、砂質に混入。  
小ブロック状。粘土質で、砂質に混入。  
しまりなし。明灰白色シルト+小塊。炭化粒少量含む。  
炭化物無。柔らかく非常に無い。炭化粒少量含む。  
非常に柔らかい。しまりなし。下部に炭化粒ごく少量含む。下部にいくほど  
粘土質。  
明灰白色粘土。炭化粒少量含む。鉄分多量に含む。上部は硬くしまるが下部は柔らかい。  
しまりなし。明灰白色シルトに含む。  
上部は柔らかく、下部はシルト全体。柔らかい。炭化物、鉄分少量含む。下部に  
ガラゴゴ少量含む。  
ブロック状。柔らかく薄い。東部はシルト、西部は粘土が主体。炭化植物、腐植物  
少量含む。シルト部分は硬い。  
明灰白色シルトをブロック状。マーブル状に少含む。青色腐植物少量含む。  
シルト柔らかい。  
明灰褐色粘土やや多く含む。粘土：シルト=3:7。シルト部分は硬く、粘土部分は  
柔らかい。  
鉄物質やアリ。上部柔らかい。青灰褐色粘土ブロック状で少量含む。  
青色腐植物層少量混入。

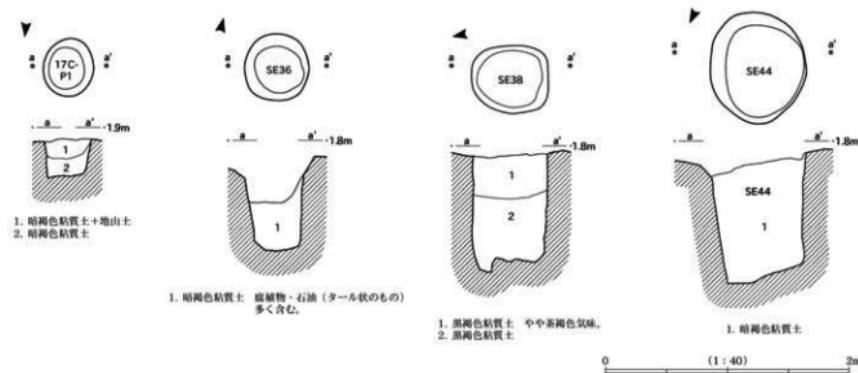
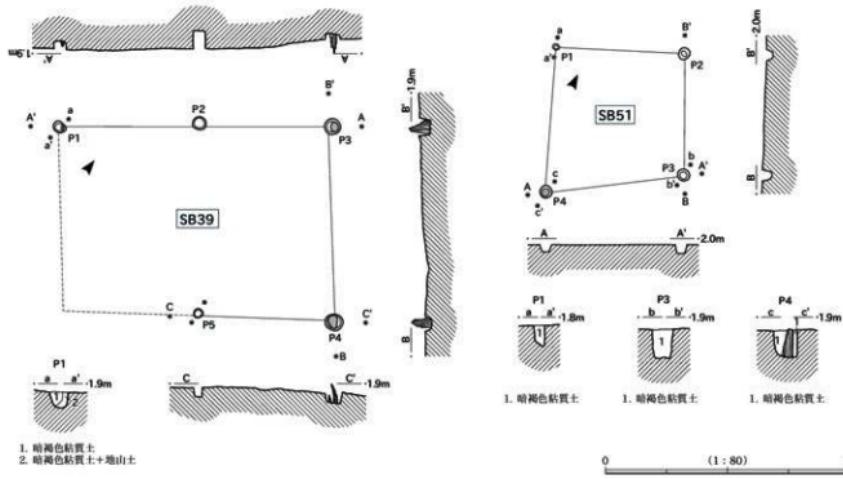
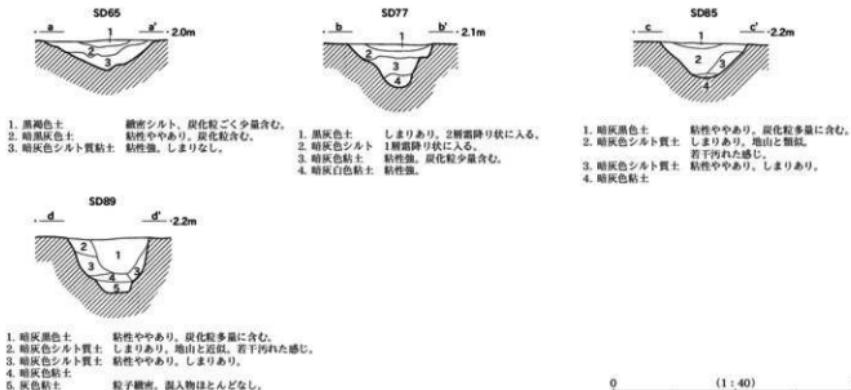


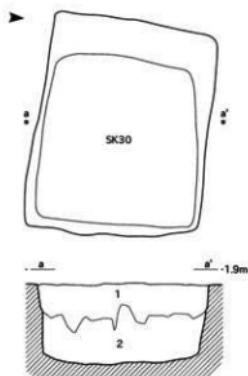
1. 黑褐色土  
2. 暗灰褐色粘土  
3. 明灰褐色シルト  
4. 暗灰褐色粘土  
5. 暗褐色粘土  
6. 黑褐色植物層  
7. 6層+青灰褐色植物土層  
8. 暗灰褐色粘土  
9. 青灰褐色シルト+暗灰褐色粘土  
10. 暗灰褐色粘土  
11. 暗褐色粘土  
12. 暗褐色粘土  
13. 黑褐色粘土  
14. 黑褐色粘土  
15. 青灰褐色シルト+暗灰褐色粘土  
16. 暗灰褐色粘土  
17. 青灰褐色シルト  
18. 暗灰褐色粘土  
19. 青灰褐色シルト
- 硬くしまる。炭化粒少量含む。  
地山七ごく少量含む。硬くしまる。炭化粒少量含む。  
暗灰褐色粘土多量に含む。シルト：粘土=6:4。炭化粒少量含む。  
2層とはほぼ同質。しまりなし。柔らかく彈力なし。  
しまりなし。炭化粒少量含む。柔らかく彈力なし。  
炭化粒多量に含む。炭化粒少量含む。  
非常に柔らかく柔らかい。  
しまりなし。茶色也從植物土層上部に歴在。青灰褐色シルトごく少量散在。  
炭化粒少量含む。  
明灰褐色シルト（量多）ごく少量含む。炭化粒少量含む。  
5層とはほぼ同質。2層より若干多い。  
炭化粒少量含む。炭化粒少量含む。炭化粒少量含む。  
結構あり。炭化粒多量に含む。炭化粒少量含む。炭化粒少量含む。  
炭化粒多量に含む。青灰褐色粘土多量に含む。  
炭化粒少量含む。青色腐植物少量含む。青色粘土多量に含む。  
暗灰褐色粘土歴在。腐植物少量含む。青色粘土多量に含む。  
青灰褐色シルト。黒褐色植物層少量含む。青色粘土多量に含む。  
青灰褐色シルト。黒褐色植物層少量含む。水分多量に含む。しまりなし。  
青灰褐色シルト。黒褐色植物層少量含む。シルト：粘土=9:1

1. 始褐色土  
2. 暗褐色粘土  
3. 黑褐色粘土  
4. 黑褐色粘土  
5. 黑褐色砂+黑褐色粘土  
6. 黑褐色粘土+暗灰褐色粘土  
7. 暗褐色土  
8. 暗褐色土  
9. 5層と同質。  
10. 暗褐色土+暗褐色シルト  
11. 暗褐色植物質土  
12. 暗褐色シルト  
13. 暗褐色粘土  
14. 暗褐色粘土  
15. 暗褐色粘土質土  
16. 暗褐色粘土  
17. 暗褐色粘土  
18. 暗褐色粘土
- しまりあり。地山ブロック少量含む。(SD75)  
硬くしまる。炭化粒少量含む。  
砂質含む。  
粘土質含む。炭化粒少量含む。  
ラミナ状。  
ラミナ状。  
粘性強。炭化粒・地山砂 ラミナ状。  
粘性強。  
中やや色斑斑。  
砂多量含む。  
砂多量含む。含む砂質。  
粘性ややあり。  
炭化粒少量含む。  
12層と同質。砂多量に含む。  
10層と同質。青色粘土多量で混在。  
暗青色粘土+黒灰色粘土質シルト ラミナ状。  
砂質強。  
15層と同質。砂質強。

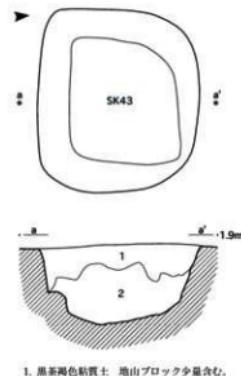
造構別図9



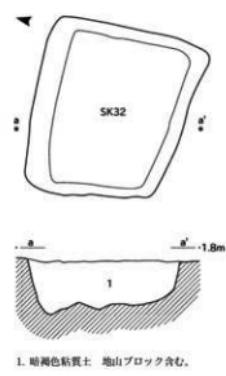




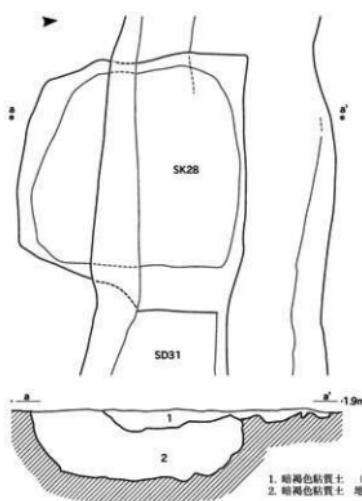
1. 黒褐色粘質土 地山ブロック含む。茶褐色気味。  
2. 黑褐色粘質土 地山ブロック含む。



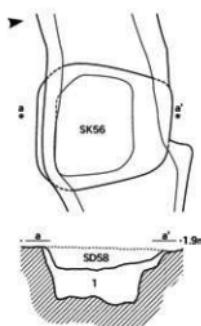
1. 黒褐色粘質土 地山ブロック少量含む。  
2. 黑褐色粘質土 地山ブロック少量含む。



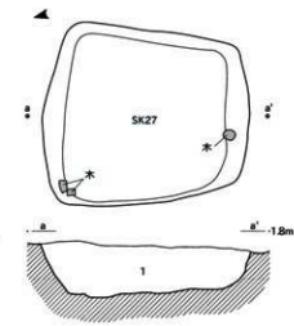
1. 暗褐色粘質土 地山ブロック含む。



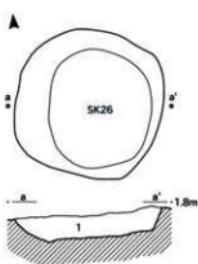
1. 暗褐色粘質土 (SD31)  
2. 暗褐色粘質土 地山ブロック含む。上部は根分多くやや茶褐色気味。



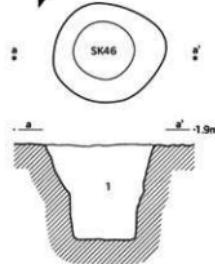
1. 暗褐色粘質土 地山ブロック含む。



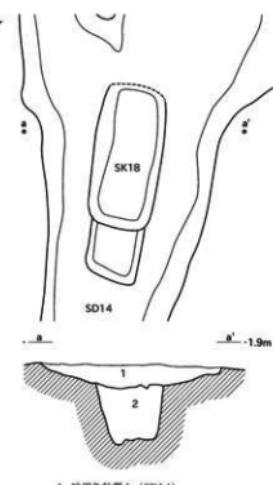
1. 暗褐色粘質土 地山ブロック含む。上部茶褐色気味。



1. 暗褐色粘質土 地山ブロック少量含む。

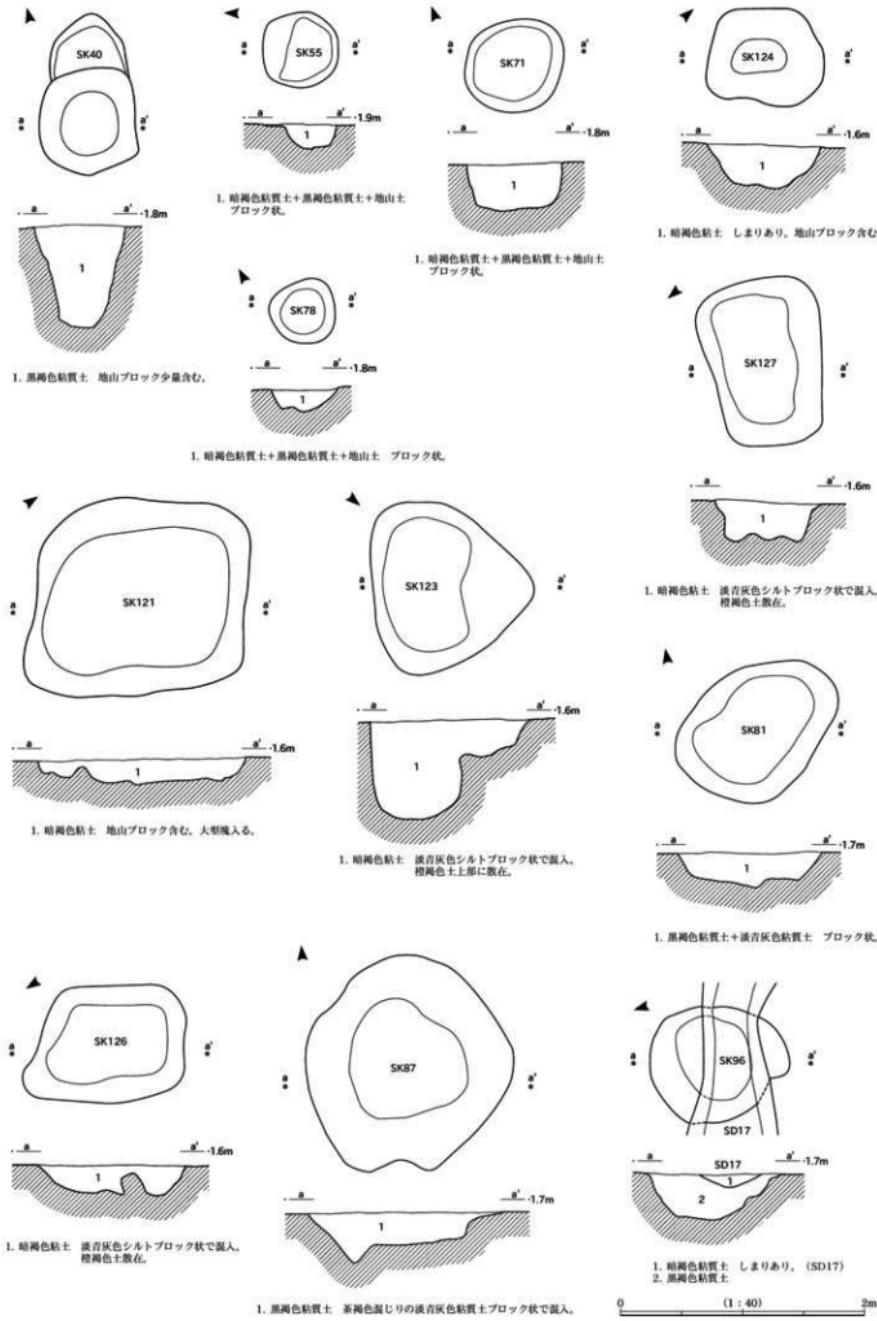


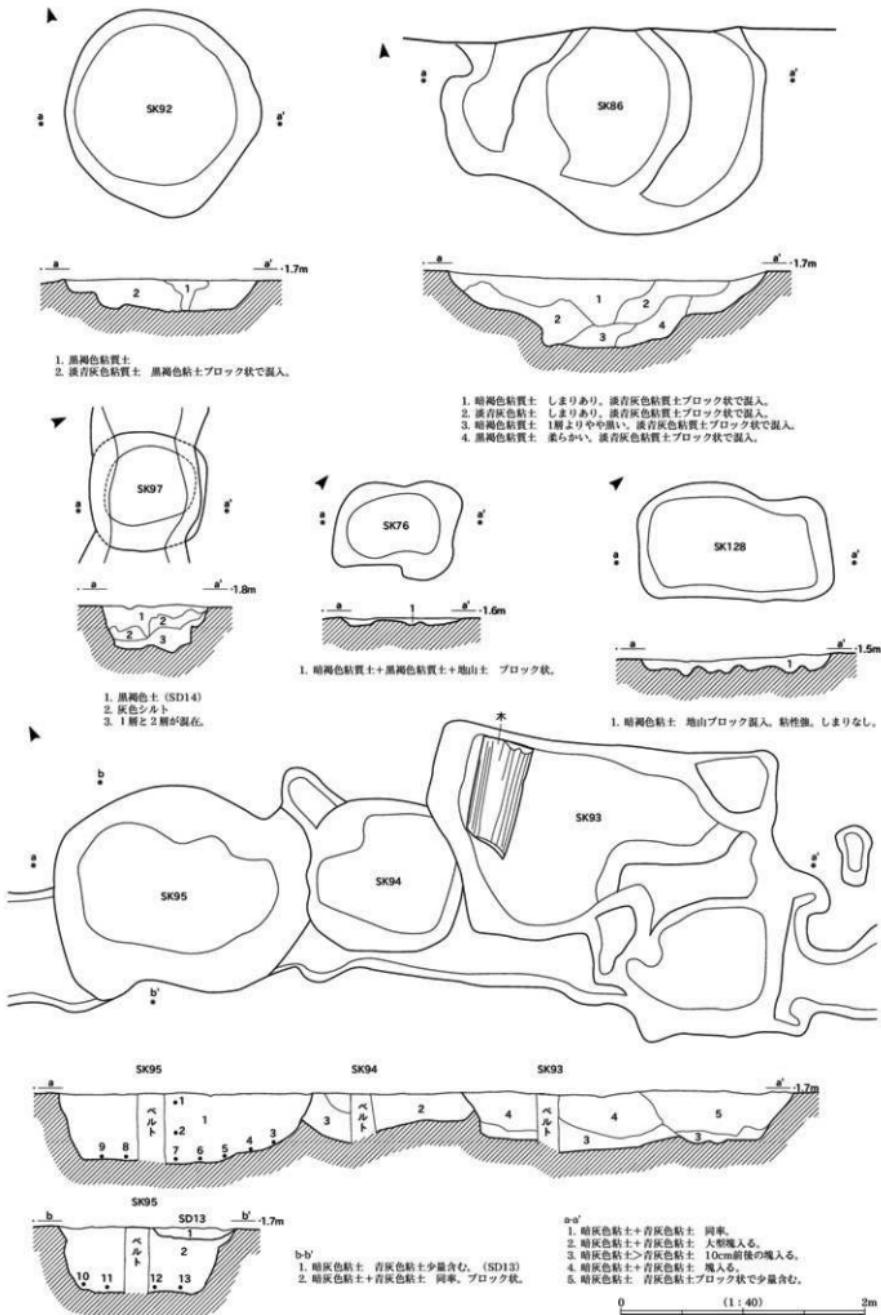
1. 黑褐色粘質土 地山ブロック含む。

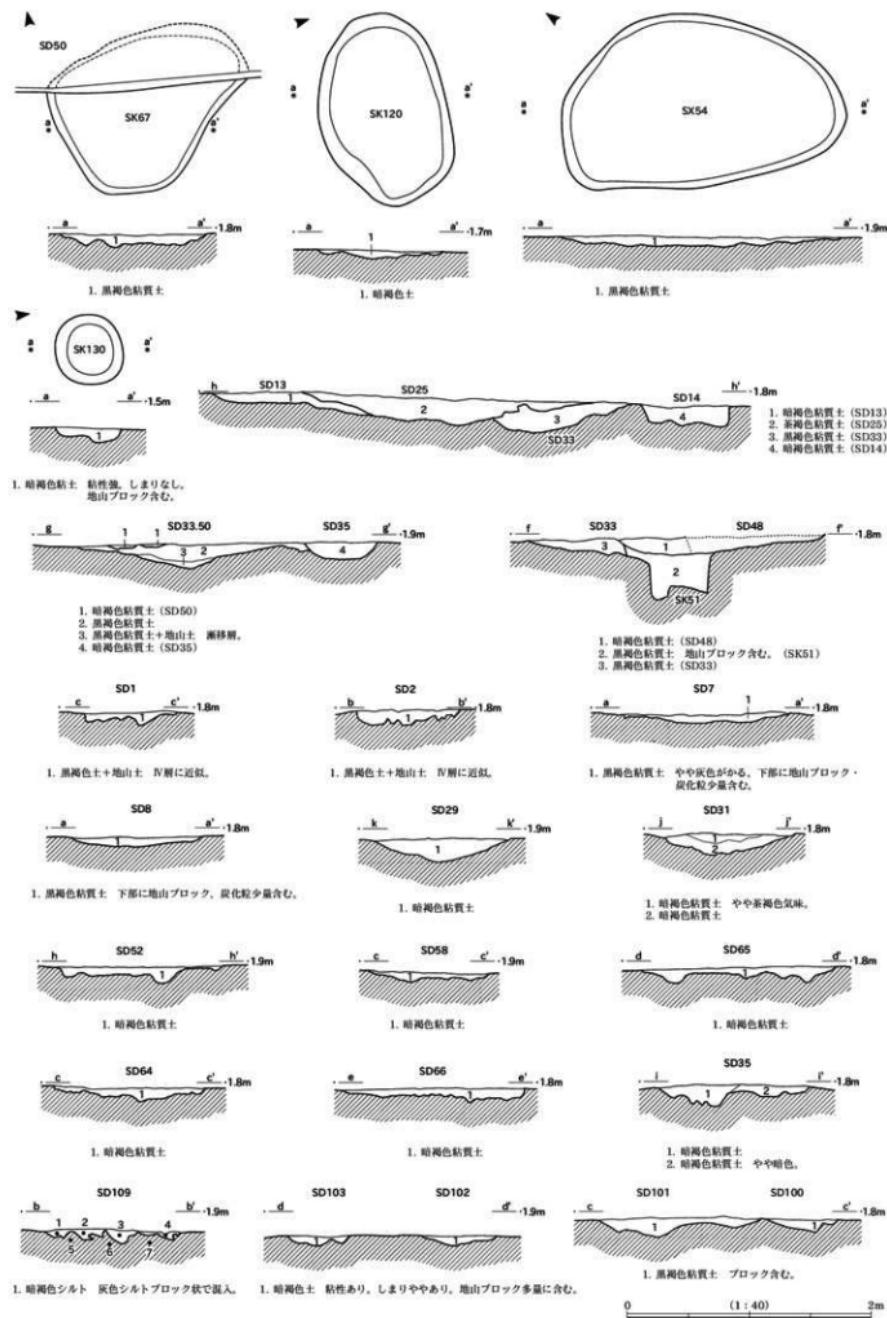


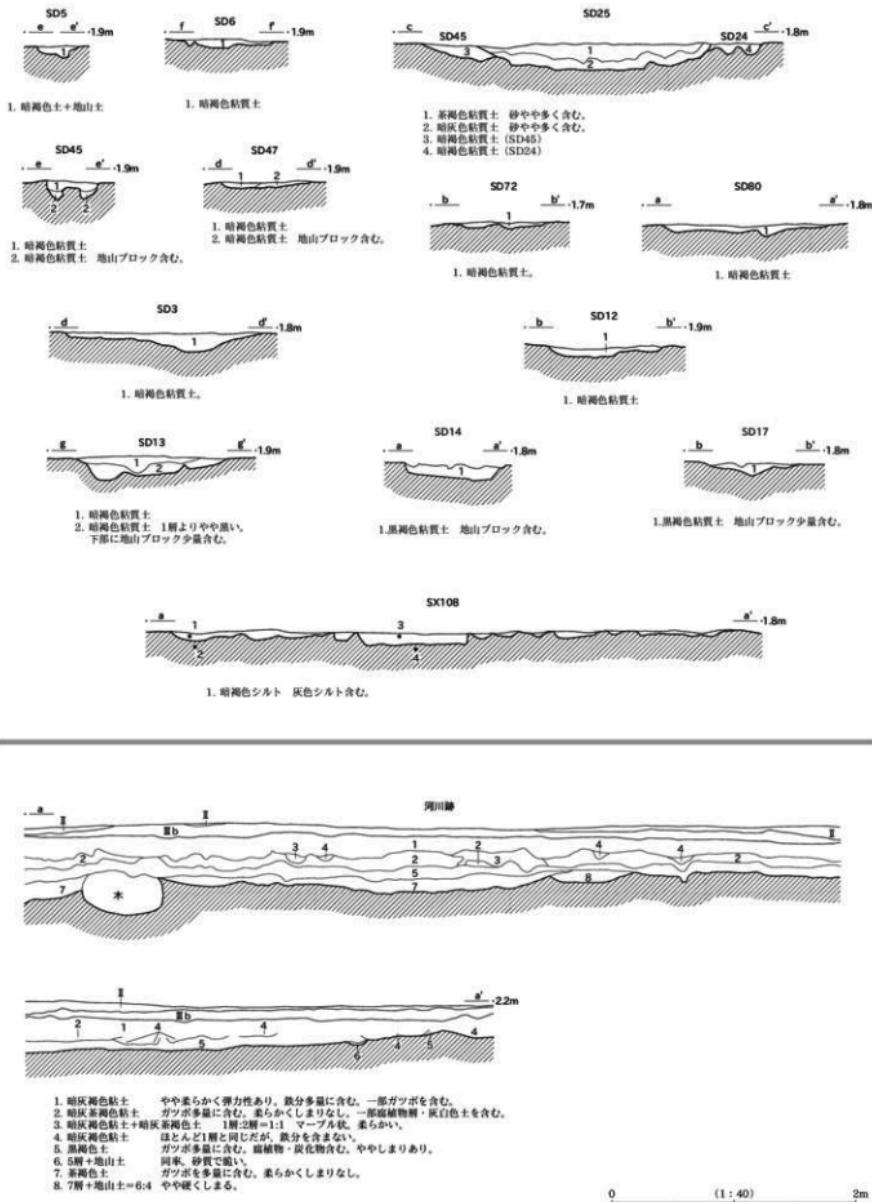
1. 暗褐色粘質土 (SD14)  
2. 黑褐色粘質土 地山ブロック含む。

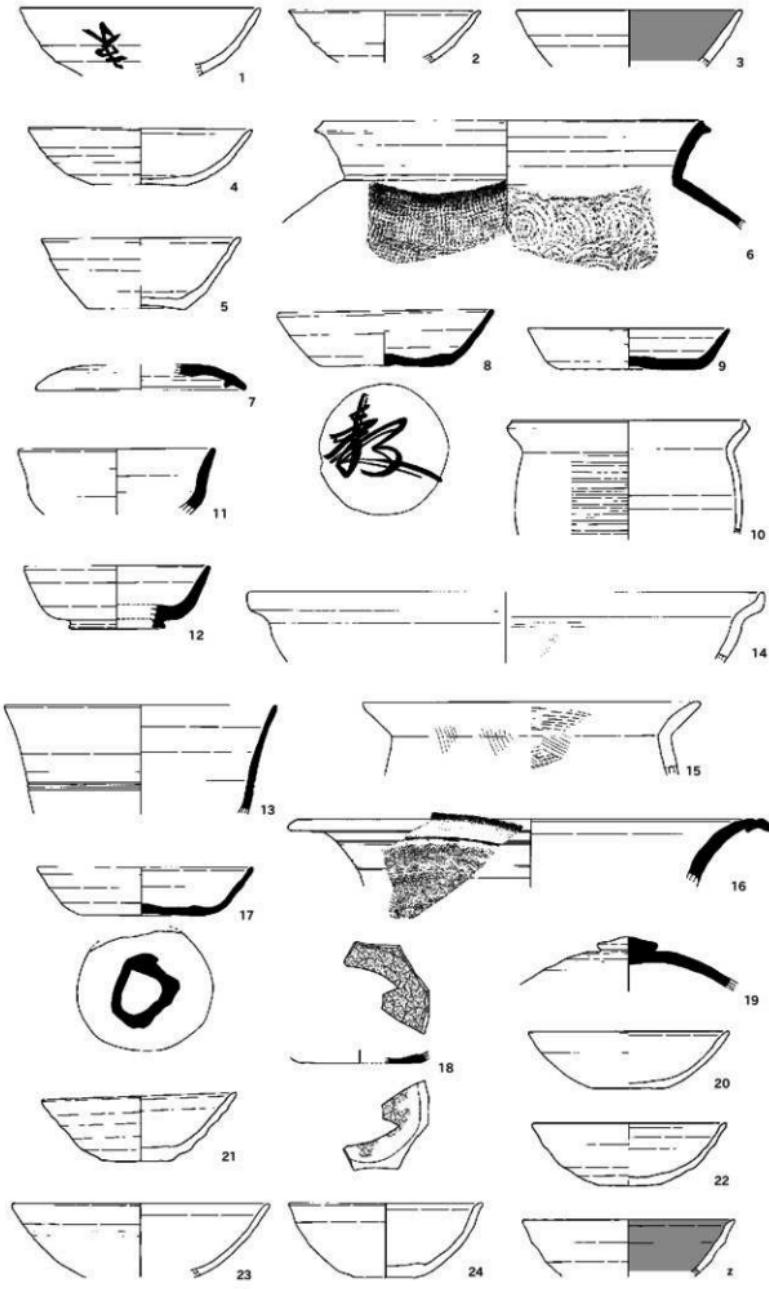
0 (1:40) 2m











0

(6・14・16)

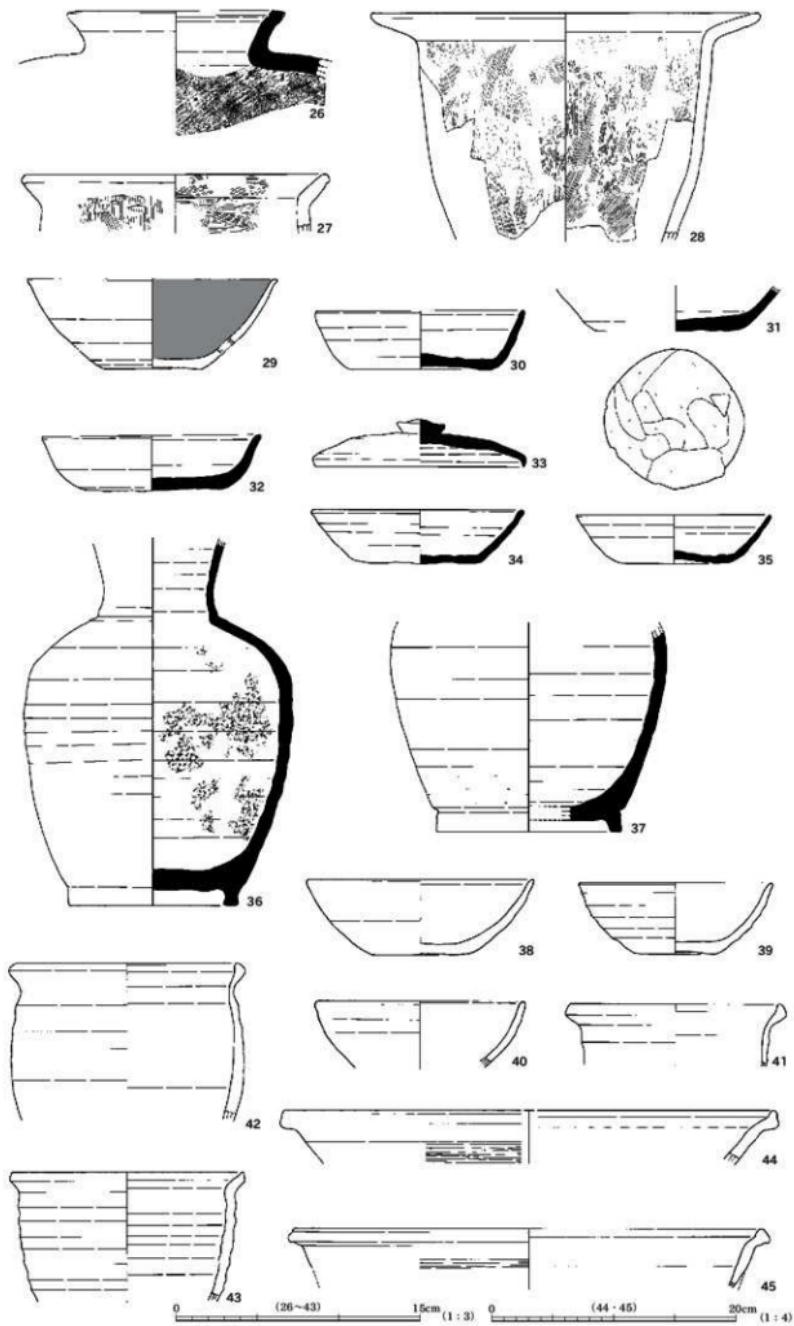
20cm

(1:4)

0

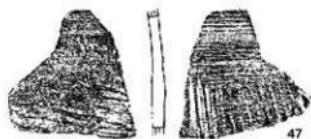
15cm

(1:3)





46



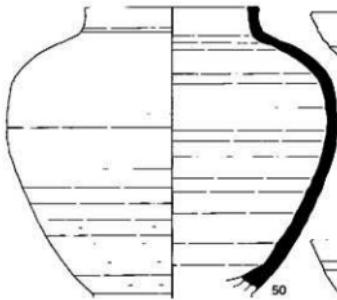
47



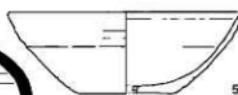
48



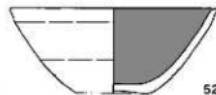
49



50



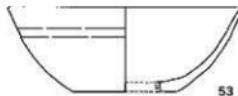
51



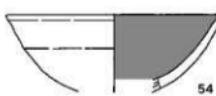
52

0 (46~57・60~63) 15cm (1:3)

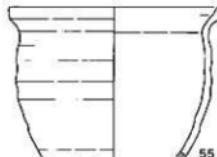
0 (58~59) 20cm (1:4)



53



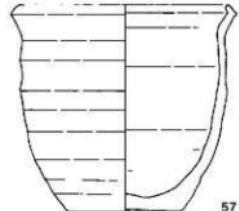
54



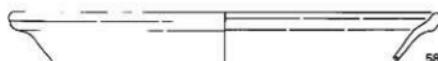
55



56



57



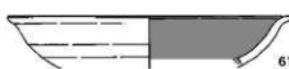
58



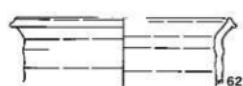
59



60



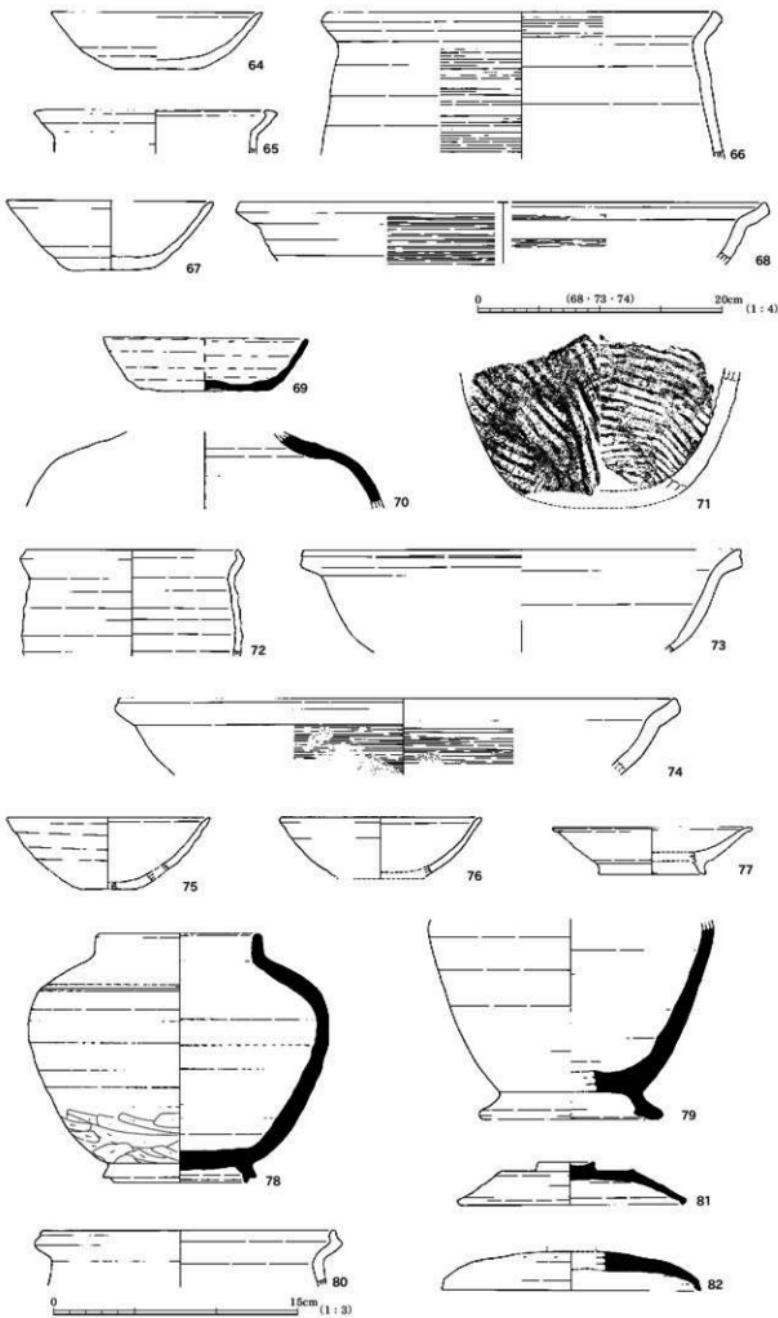
61

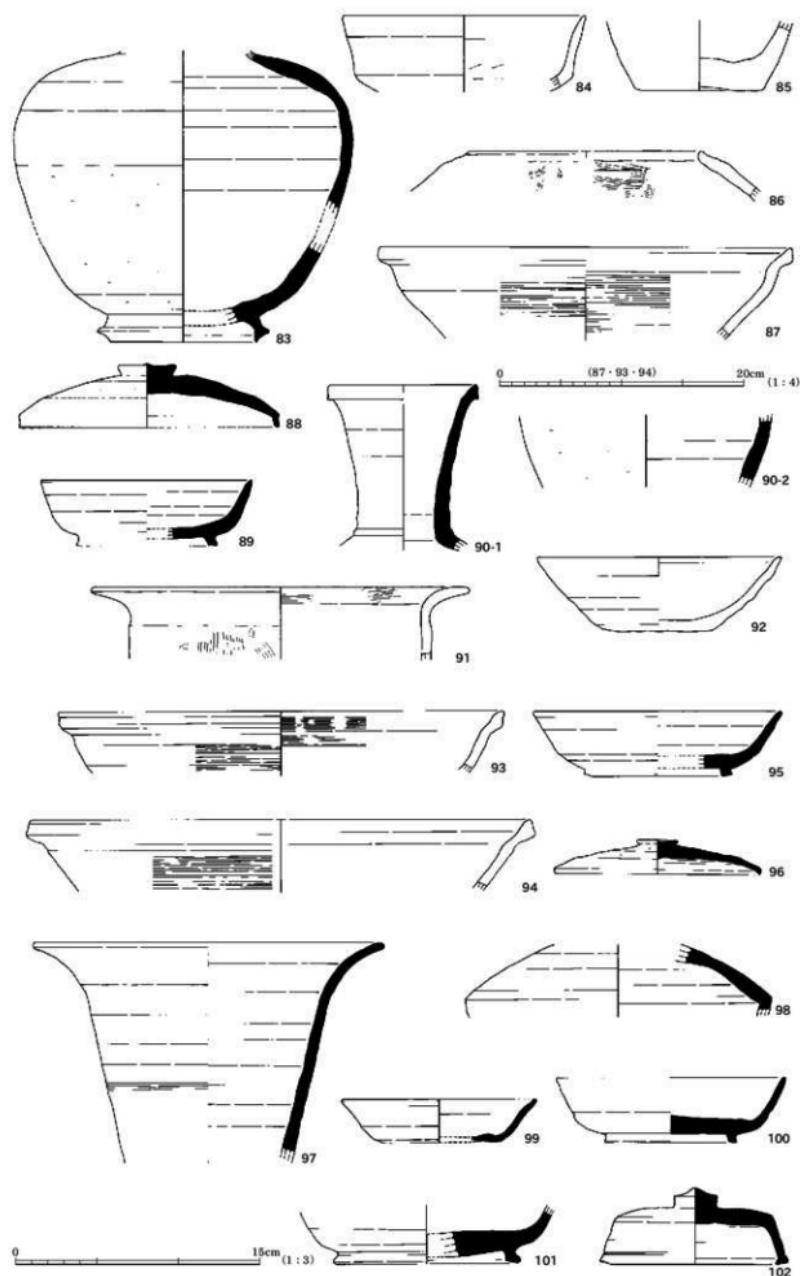


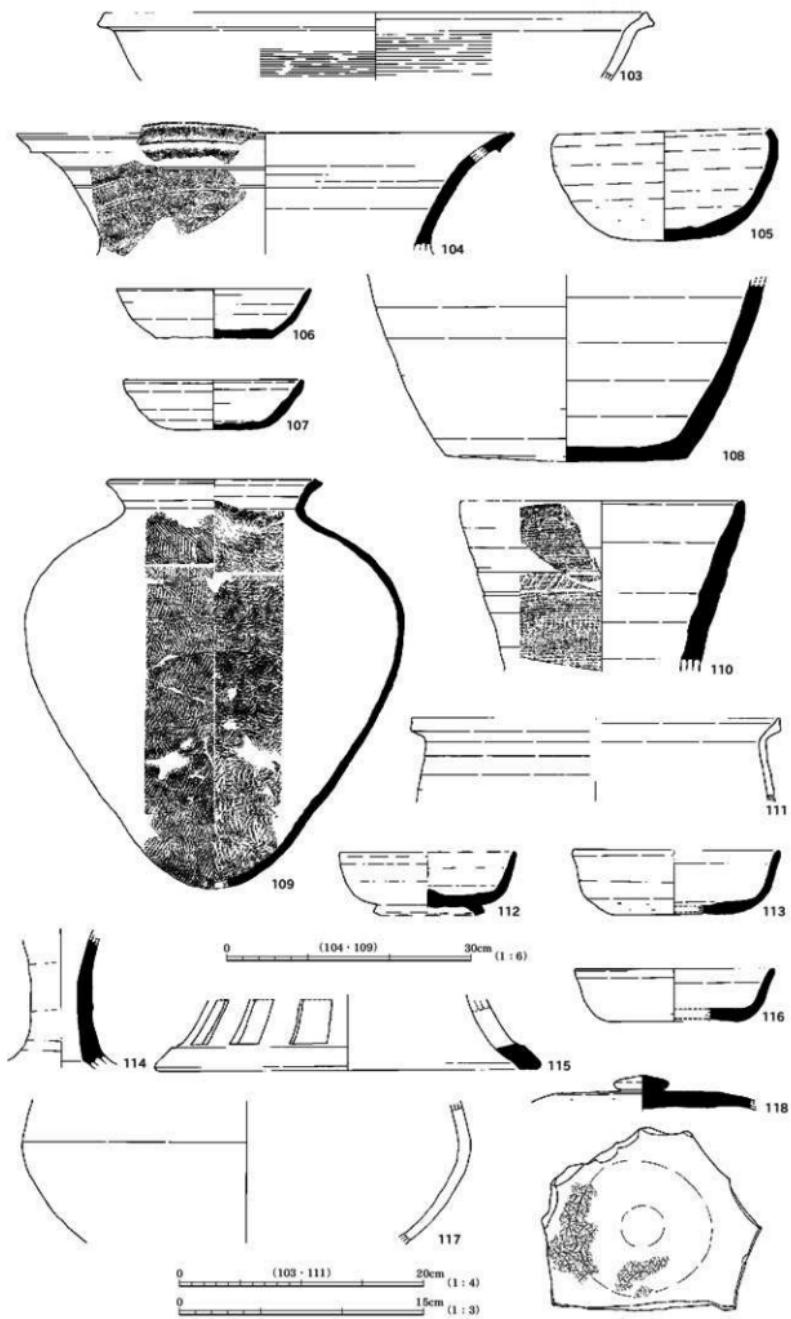
62

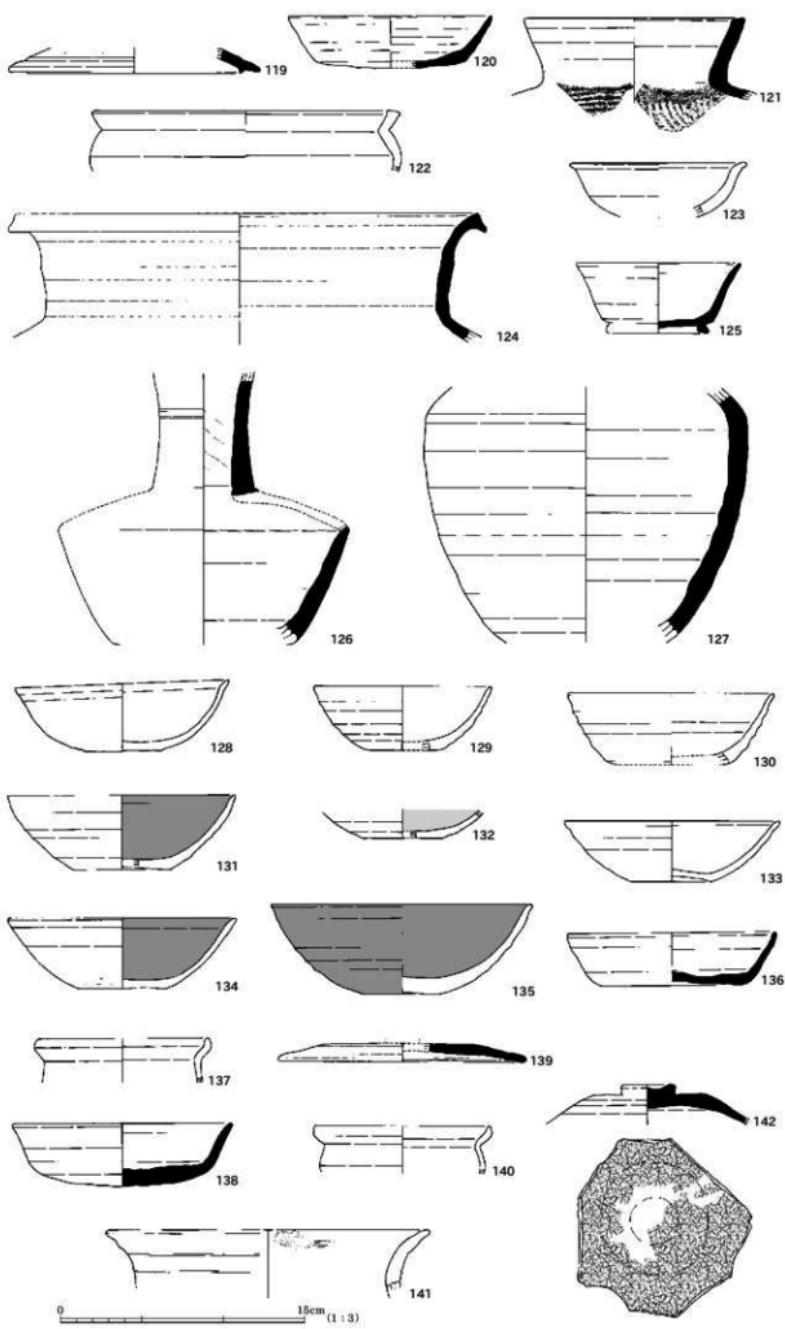


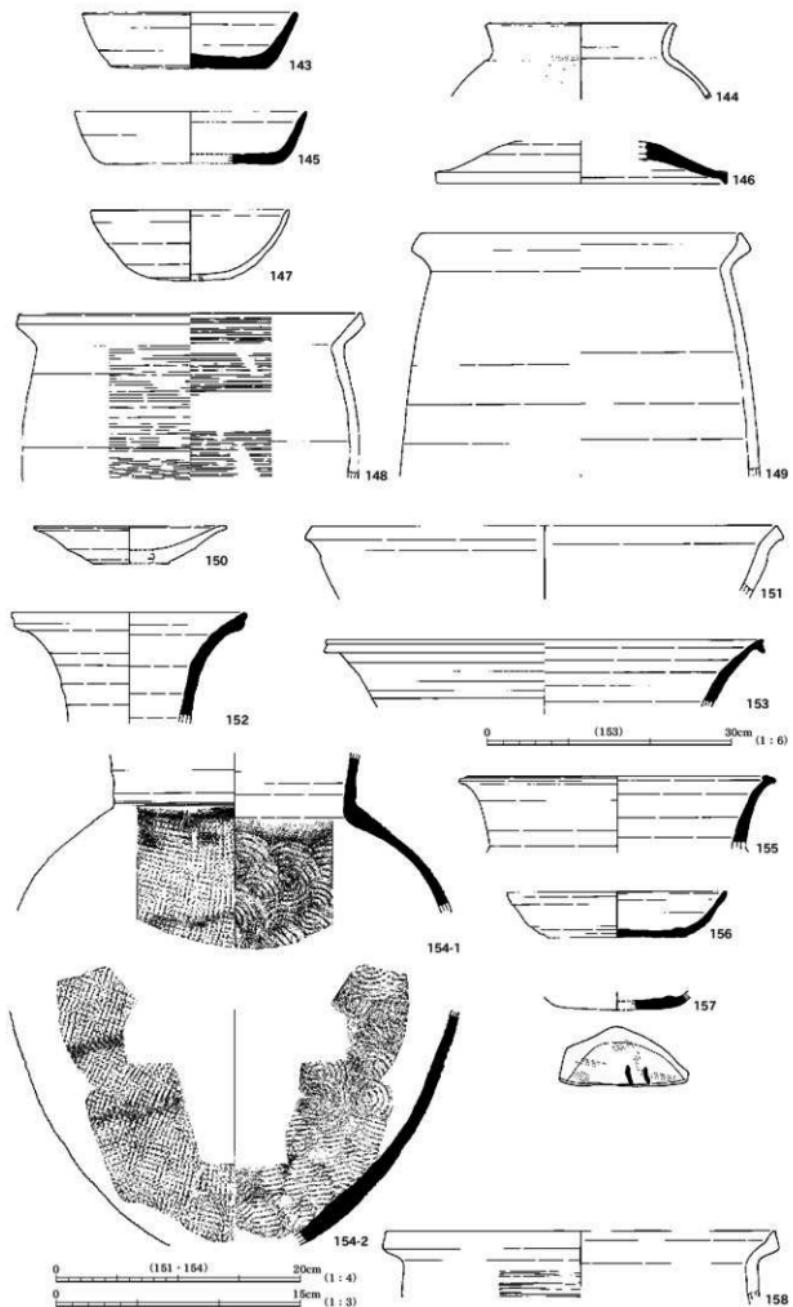
63

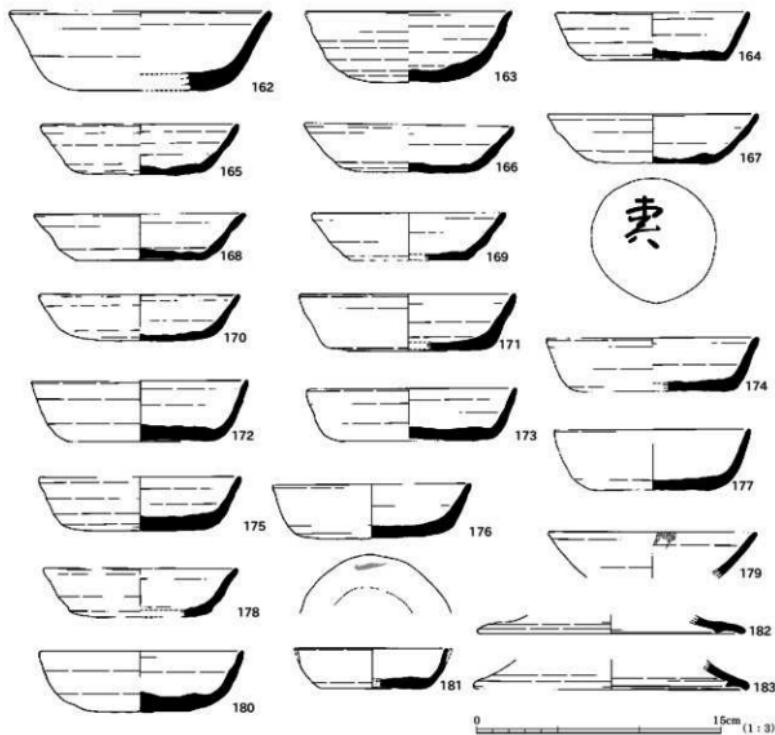
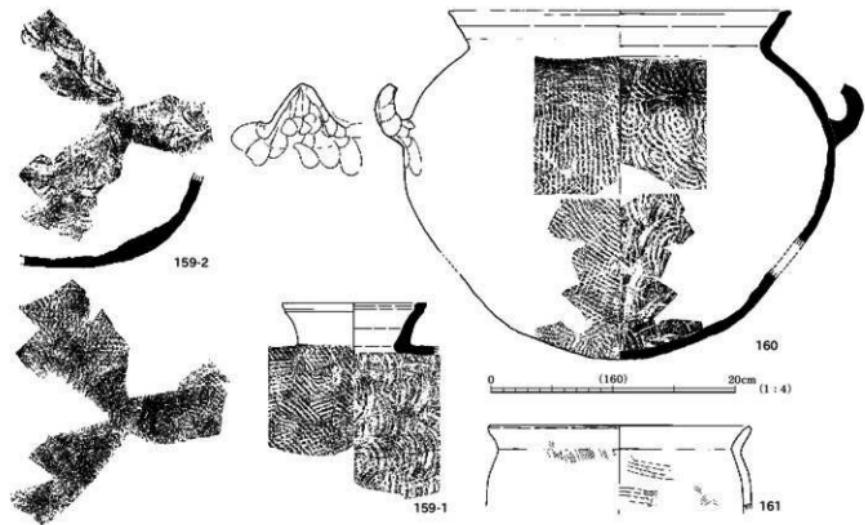




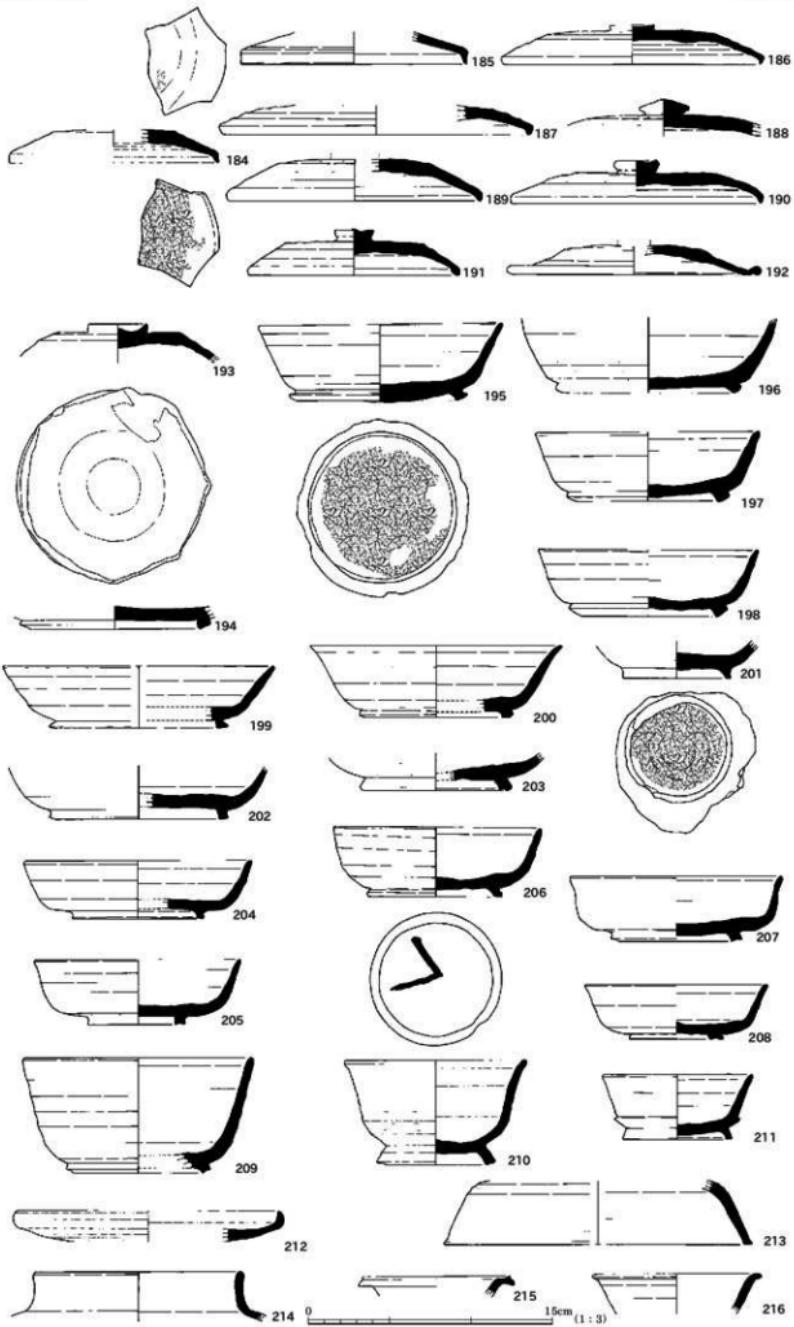


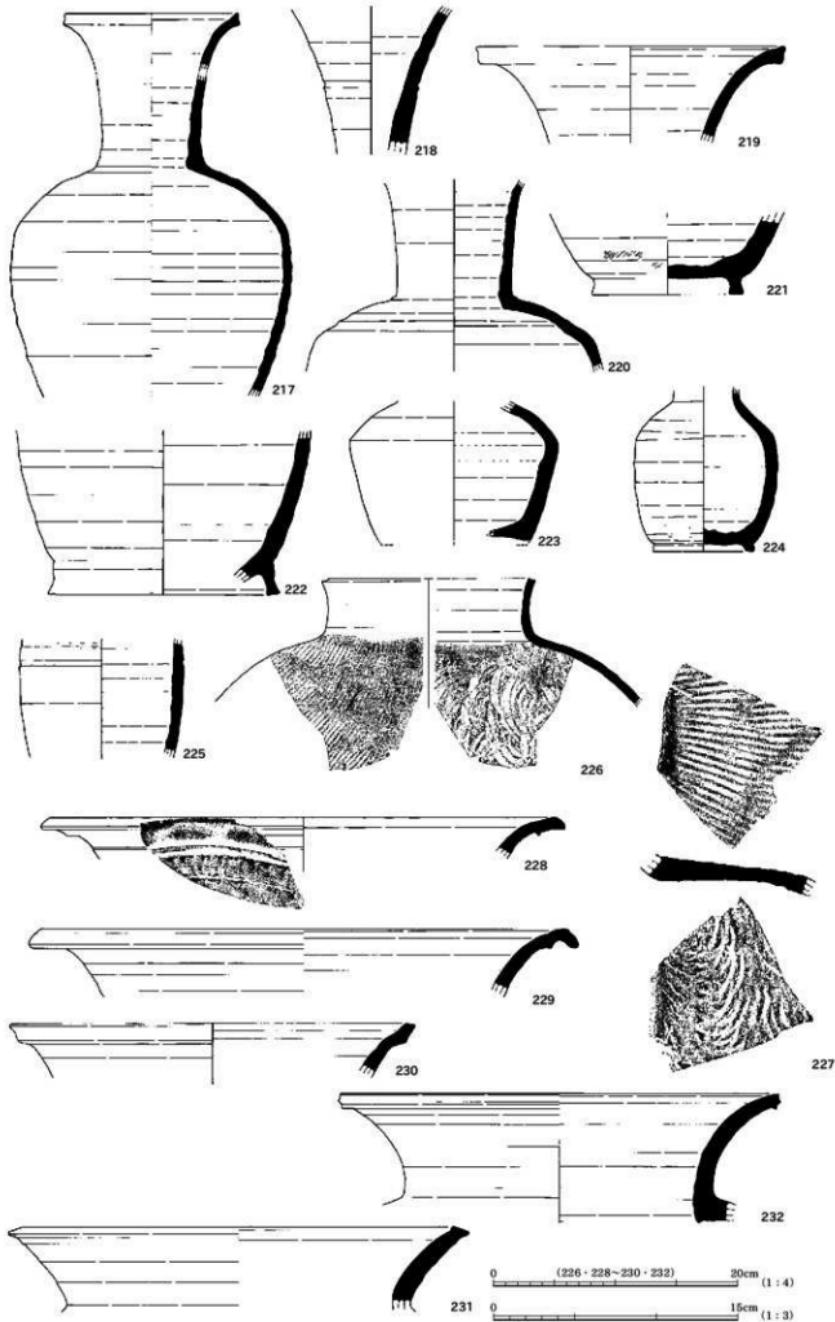


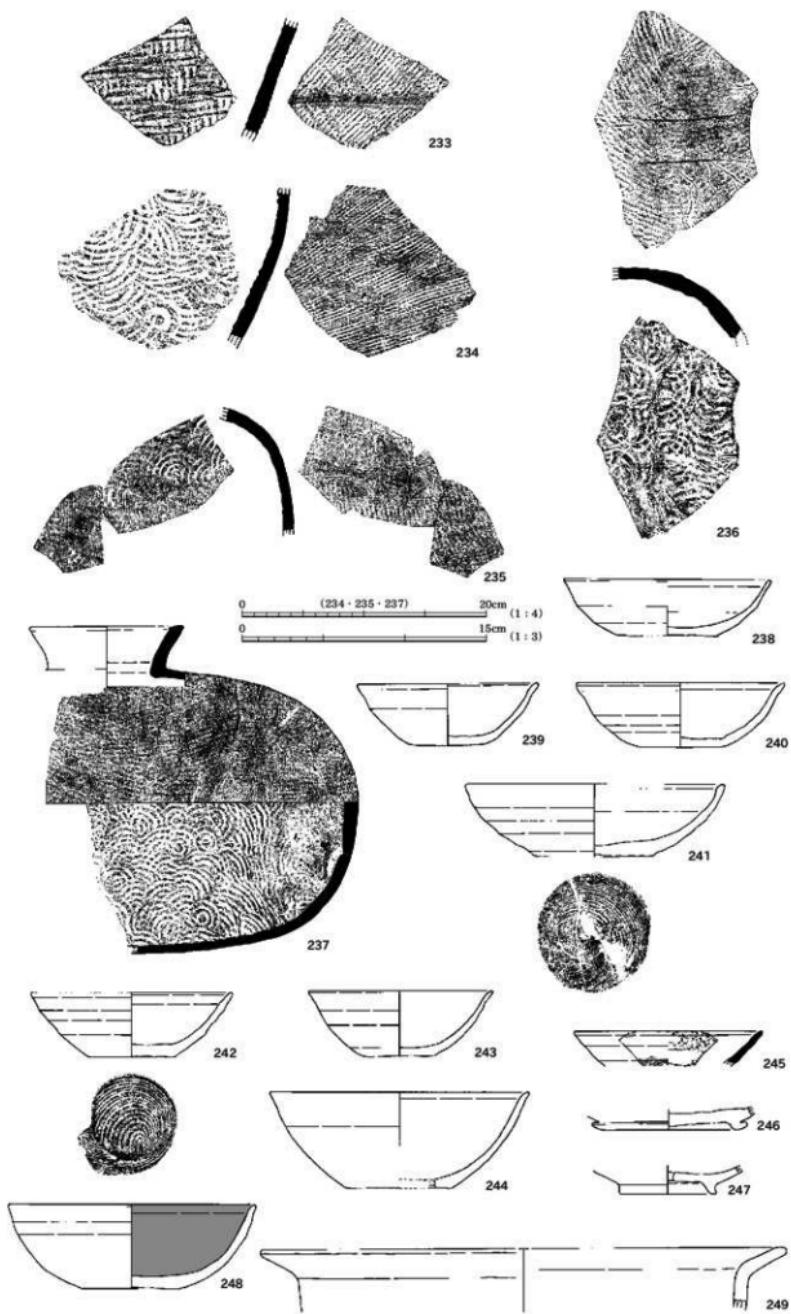


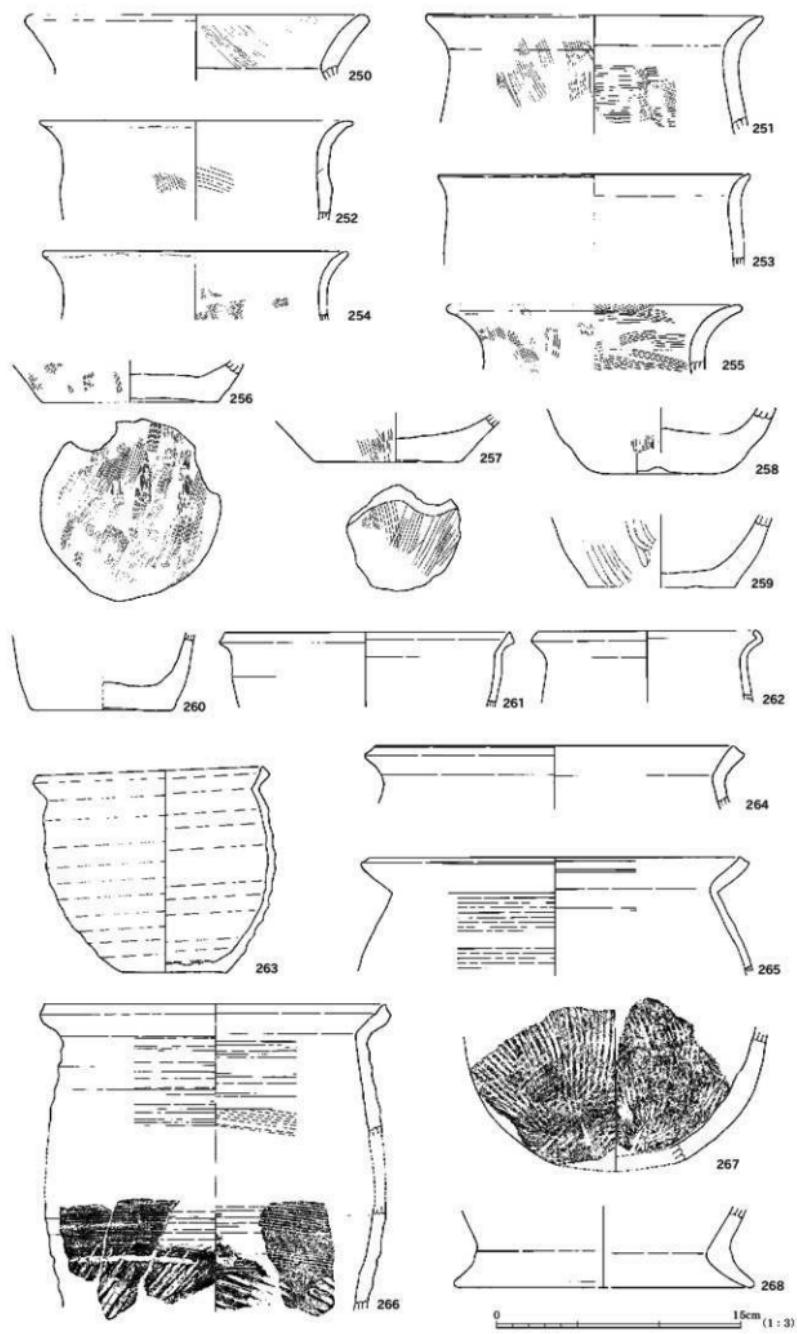


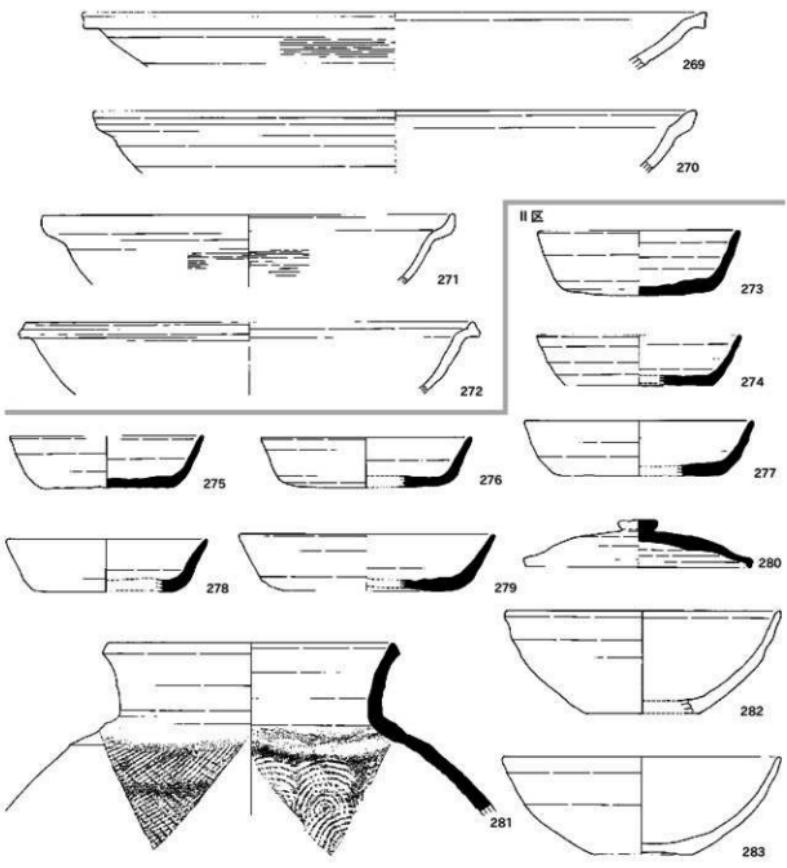
0 15cm (1 : 3)



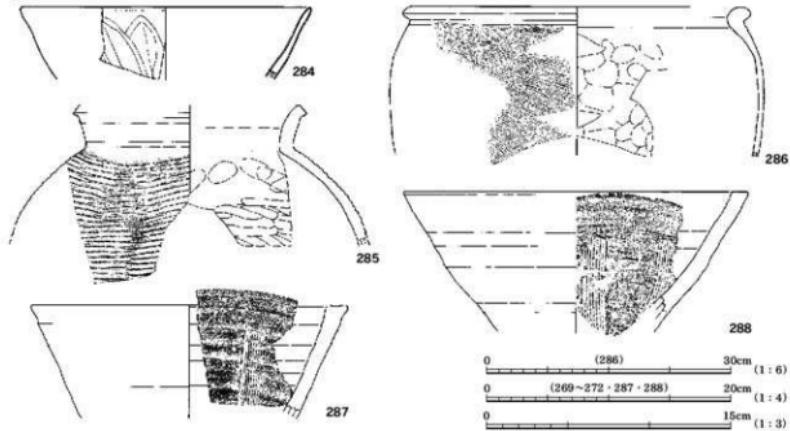




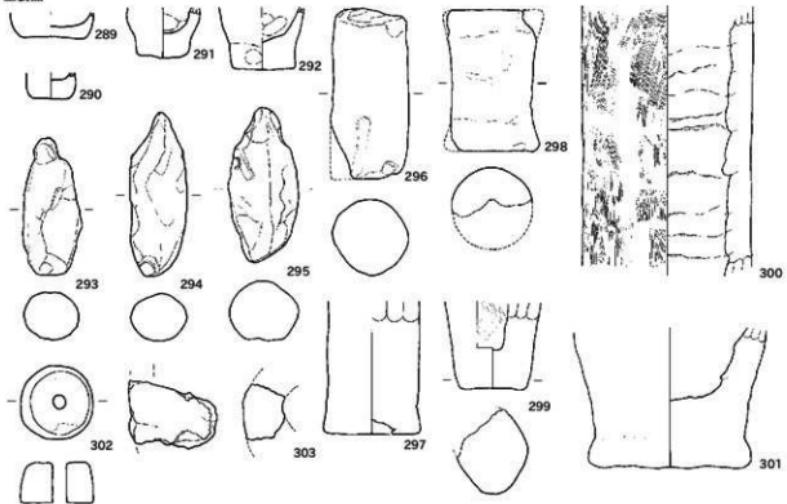




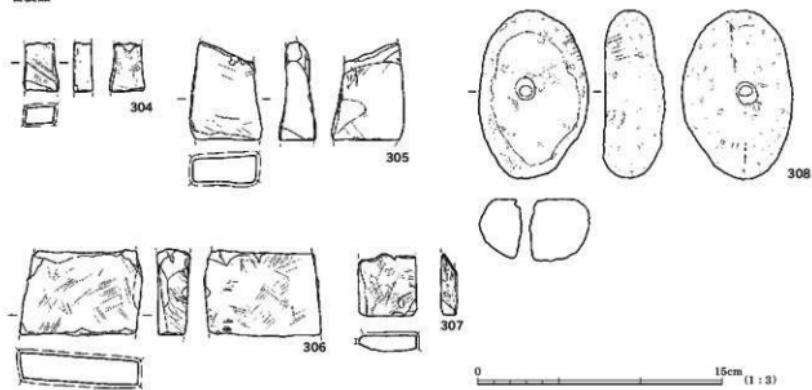
中世



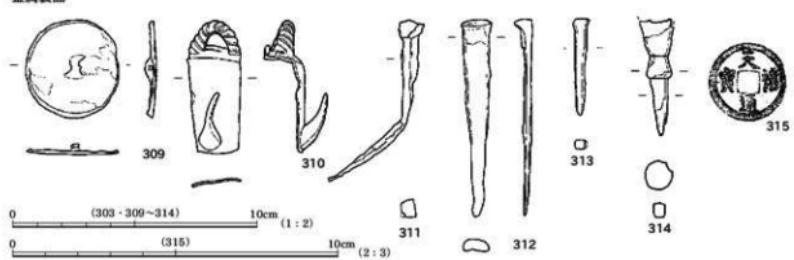
## 土製品

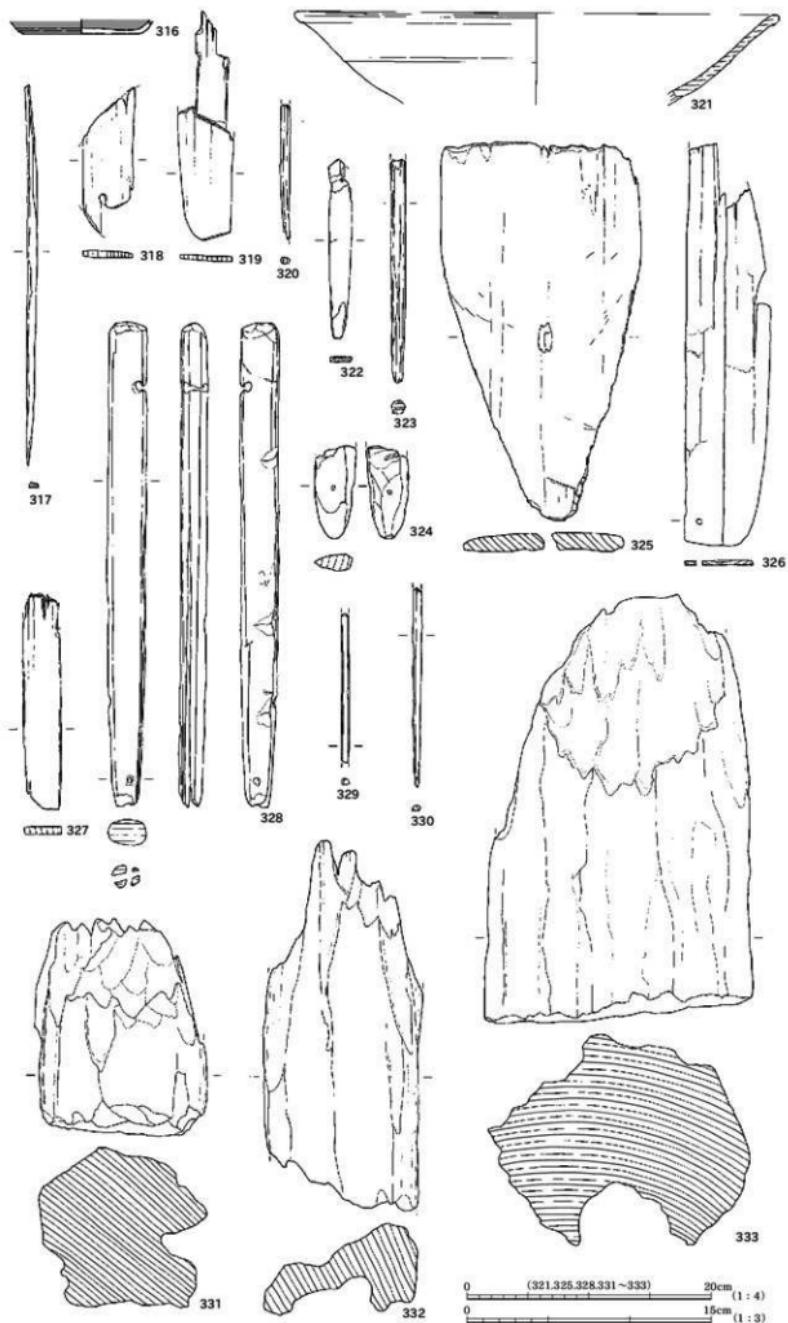


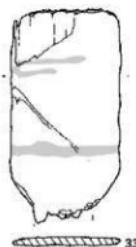
## 石製品



## 金属製品



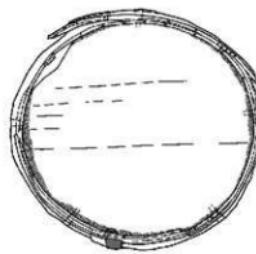




II 区



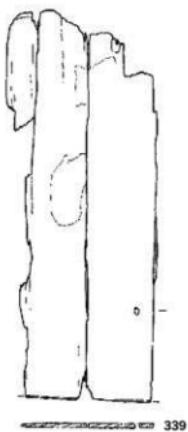
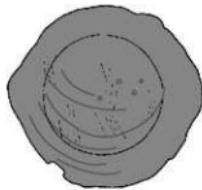
336



337



338



339



340



341



0 (340.341) 20cm (1 : 4)  
0 (334~339) 15cm (1 : 3)



上浦遺跡周辺の景観 北西から



平成2年度調査区全景



平成3・4年度調査区全景



基本層序 I区



基本層序 II区



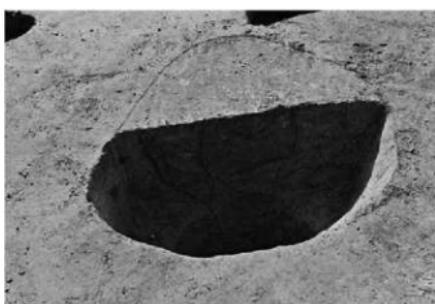
SB1 完掘 北西から



10D-P1 完掘 東から



SB2 完掘 北西から



7E-P6 断面 東から



SB3 完掘 南東から



6D-P6 断面 南東から



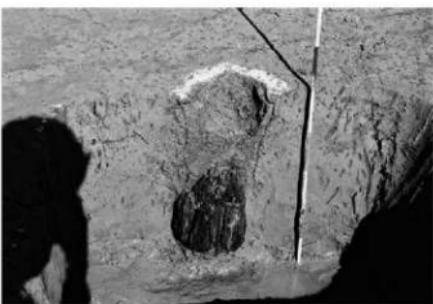
SB4 完掘 北西から



5D-P1 新面 南から



SB5 完掘 西から



9C-P6 断面 南から



SE1 完掘 北から



SK18 断面 東から



SK16 断面 東から



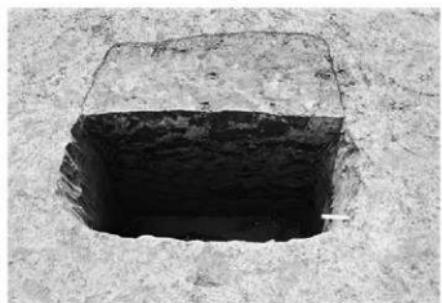
SK5・16 完掘 北から



SK15 断面 東から



SK15 完掘 西から



SK21 断面 西から



SK21 完掘 東から



SK74 断面 南から



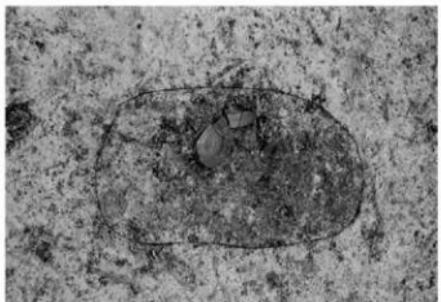
SK74 完掘 西から



SK20 断面 北から



SK64・65 完掘 東から



SK100 土器出土状況



SK2 断面 東から



SK1 新面 西から



SK1 完掘 西から



SK9 断面 東から



SK24 断面 南から



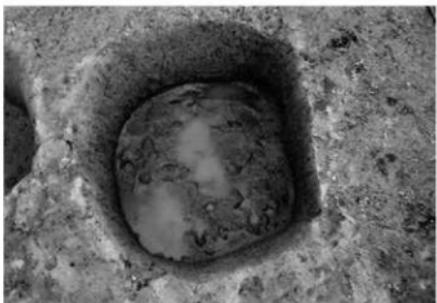
SK26 完掘 北西から



SK108 土器出土状況



SK93 断面 南から



SK93 完掘 南から



SK14 断面 東から



SK46 完掘 北から



SK42・112 完掘 西から



SK19 断面 東から



SK7 断面 東から



SK7 完掘 東から



SK45・7E-P24 断面 西から



SK45・7E-P24 完掘 南から



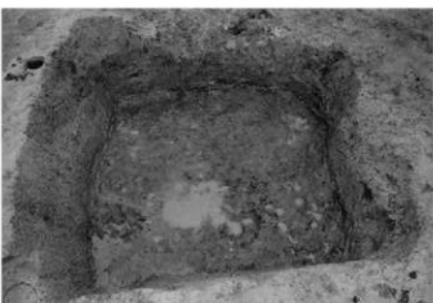
SK70 断面 北から



SK70 完掘 東から



SK89 断面 南から



SK89 完掘 西から



SK94 断面 西から



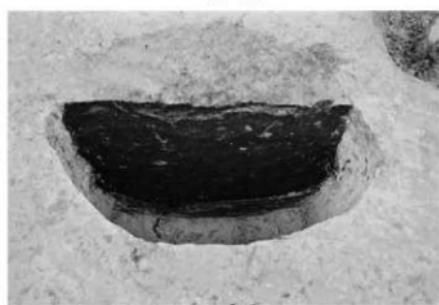
SK94 完掘 北から



SK36 断面 南東から



SK87 断面 南から



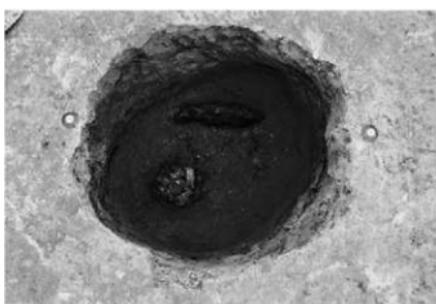
SK55 断面 北から



SK55 完掘 東から



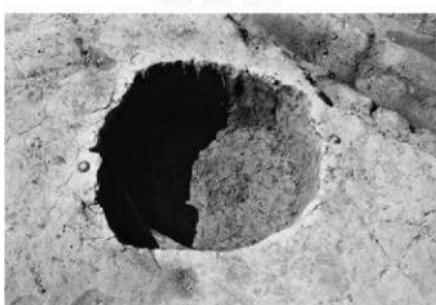
SK54 断面 北から



SK54 完掘 北から



SK56 断面 南西から



SK56 完掘 北東から



SK62 断面 西から



SK66 断面 西から



SK52 断面 北から



SK53 完整 東から



SK61 断面 南から



SK37 断面 南東から



SK53 断面 北から



SK53 完整 北から



SK34 断面 南から



SK34 完掘 南から



SK39 断面 北から



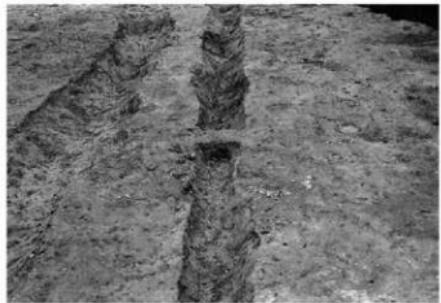
SK39 完掘 北から



11D・11E 溝検出状況 北西から



8B～8D 溝検出状況 南から



SD14 断面 南東から



SD9 断面 南東から



SD4・27 断面 西から



SD51 断面 西から



SD51・53 完掘 北西から



11E 溝検出状況 西から



11E 完掘 西から



SD2・3 断面 東から



SD2・3 桁出土状況 西から



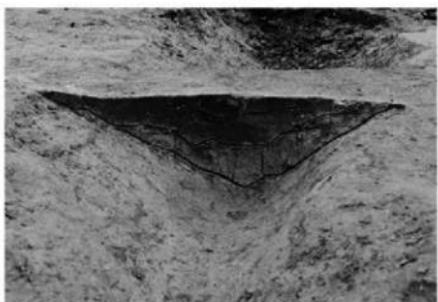
SD6 断面 西から



SD22・29 断面 西から



SD65・77 完掘 西から



SD65 断面 西から



SD77 断面 東から



SD65・79 断面 北西から



SD85 断面 南西から



SD89 断面 南西から



10B・10C 溝検出状況 西から



SD19・20 完掘 東から



SD19・26 完掘 西から



SD78 断面 南東から



SD61 断面 西から



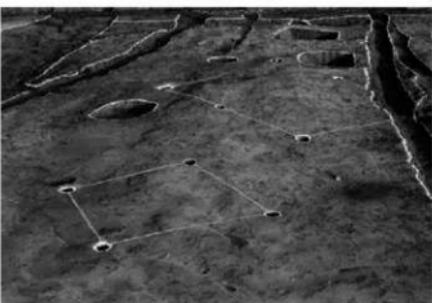
7D・7E 完掘 西から



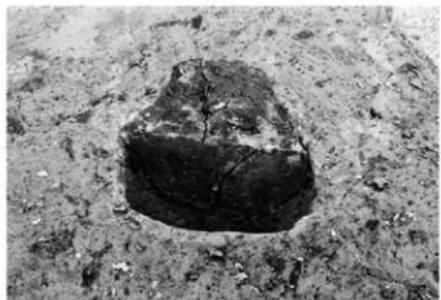
9D・9E 完掘 西から



4～8B・C 完掘 西から



S839・51 完掘 西から



SB39-P1 断面 南西から



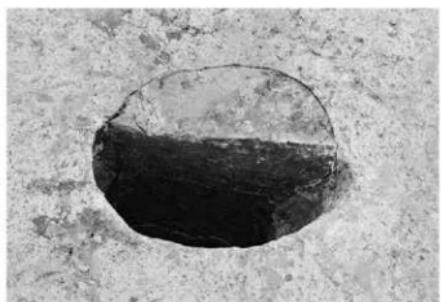
SB39-P4 柱根検出状況 南西から



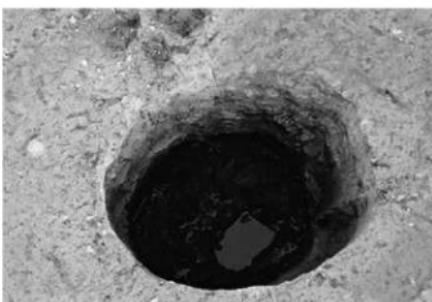
SB51-P3 断面 西から



SE36 完掘 南から



SE38 断面 西から



SE38 完掘 南から



SE44 断面 北西から



SE44 完掘 北西から



SK30 断面 東から



SK30 完成 東から



SK27 断面 東から



SK27 完成 東から



SK26 断面 南から



SK26 完成 南から



SK56 断面 東から



SK18・SD14 断面 東から



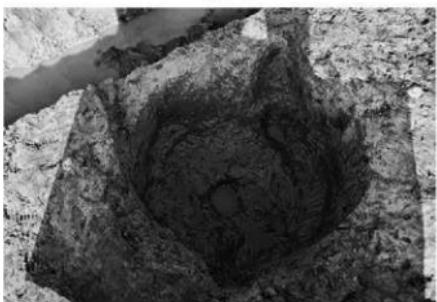
SK46 断面 南東から



SK46 完掘 西から



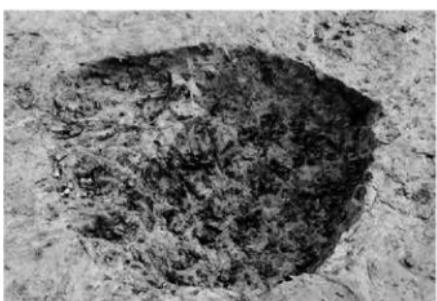
SK71 断面 南西から



SK71 完掘 南から



SK55 断面 西から



SK55 完掘 西から



SK107 断面 北東から



SK107 完掘 東から



SK123 完掘 南から



SK124 断面 東から



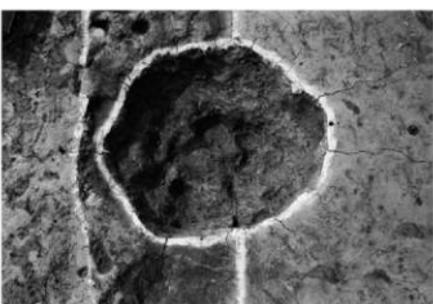
SK93 断面 西から



SK93 完掘 南から



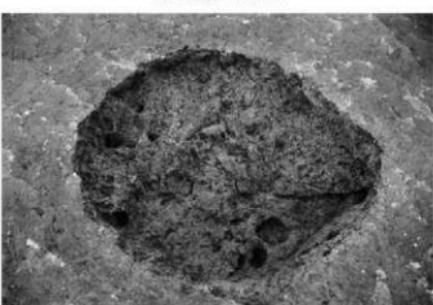
SK96 断面 西から



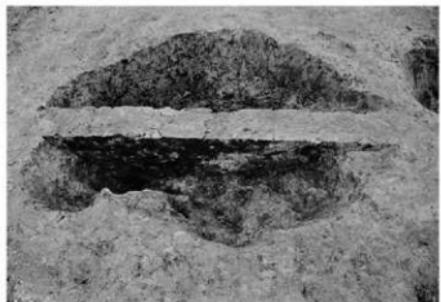
SK96 完掘 南東から



SK92 断面 南から



SK92 完掘 南から



SK87 断面 南から



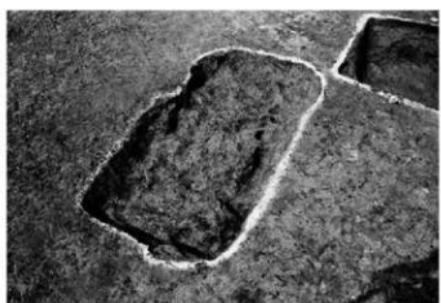
SK120 断面 西から



SK130 断面 東から



SK130 完掘 東から



SK128 完掘 南から



SK75 完掘 南から



SX54 断面 南西から



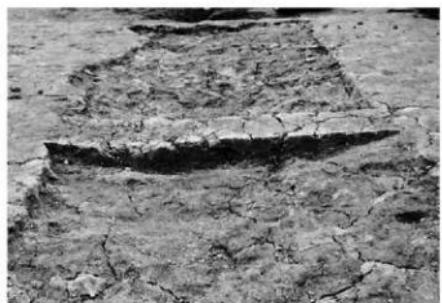
SX54 完掘 南西から



SX108 断面 東から



SD2 断面 西から



SD8 断面 西から



SD33・35・50 断面 東から



SD72・73 完掘 南西から



25・26グリッド 完掘



SD52 断面 西から



SD58 断面 西から



SD64 完掘 北から



SD64 断面 南から



SD115 完掘 南から



SD65 断面 南から



24・25 グリッド 完掘 南から



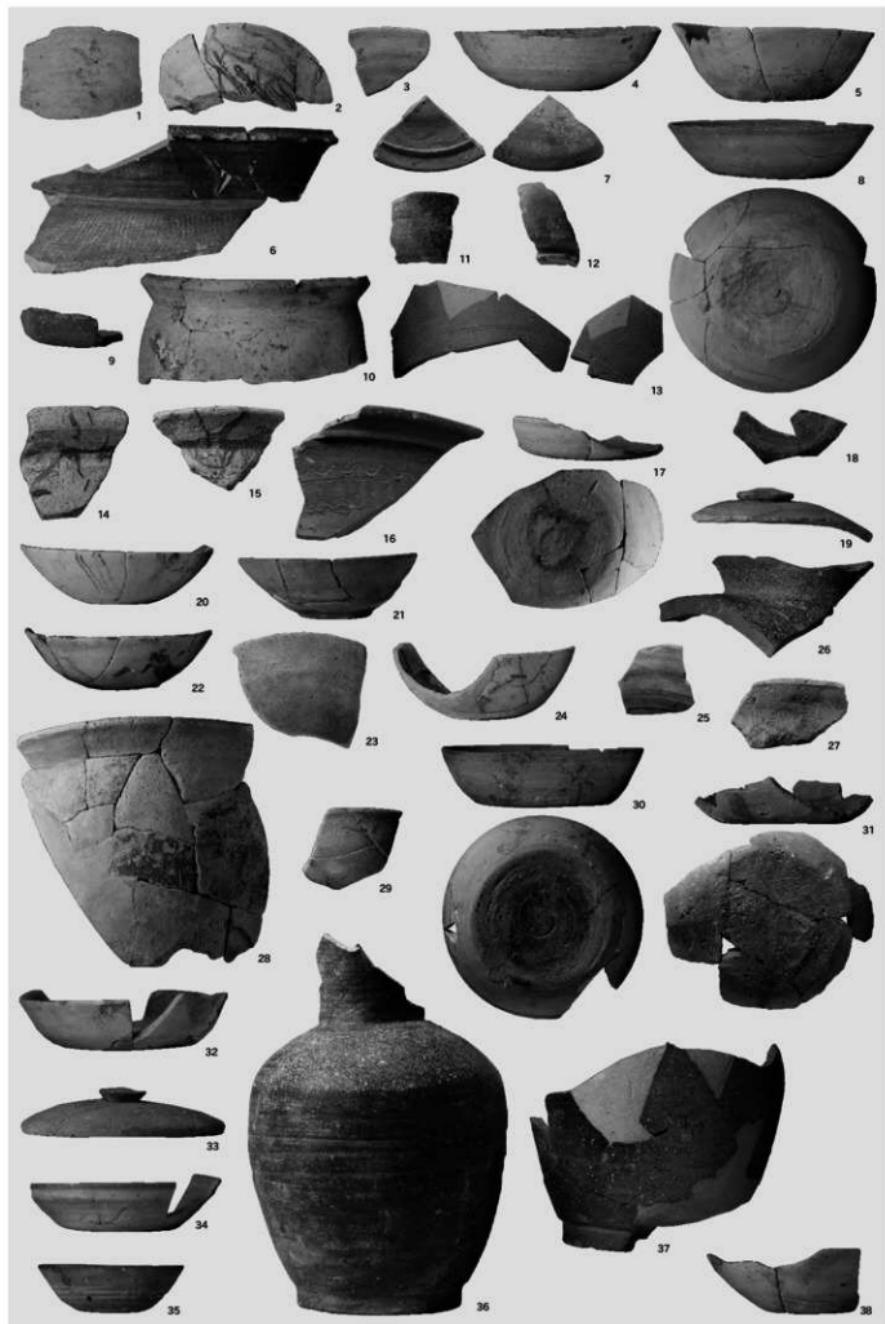
23～28 グリッド 完掘 東から

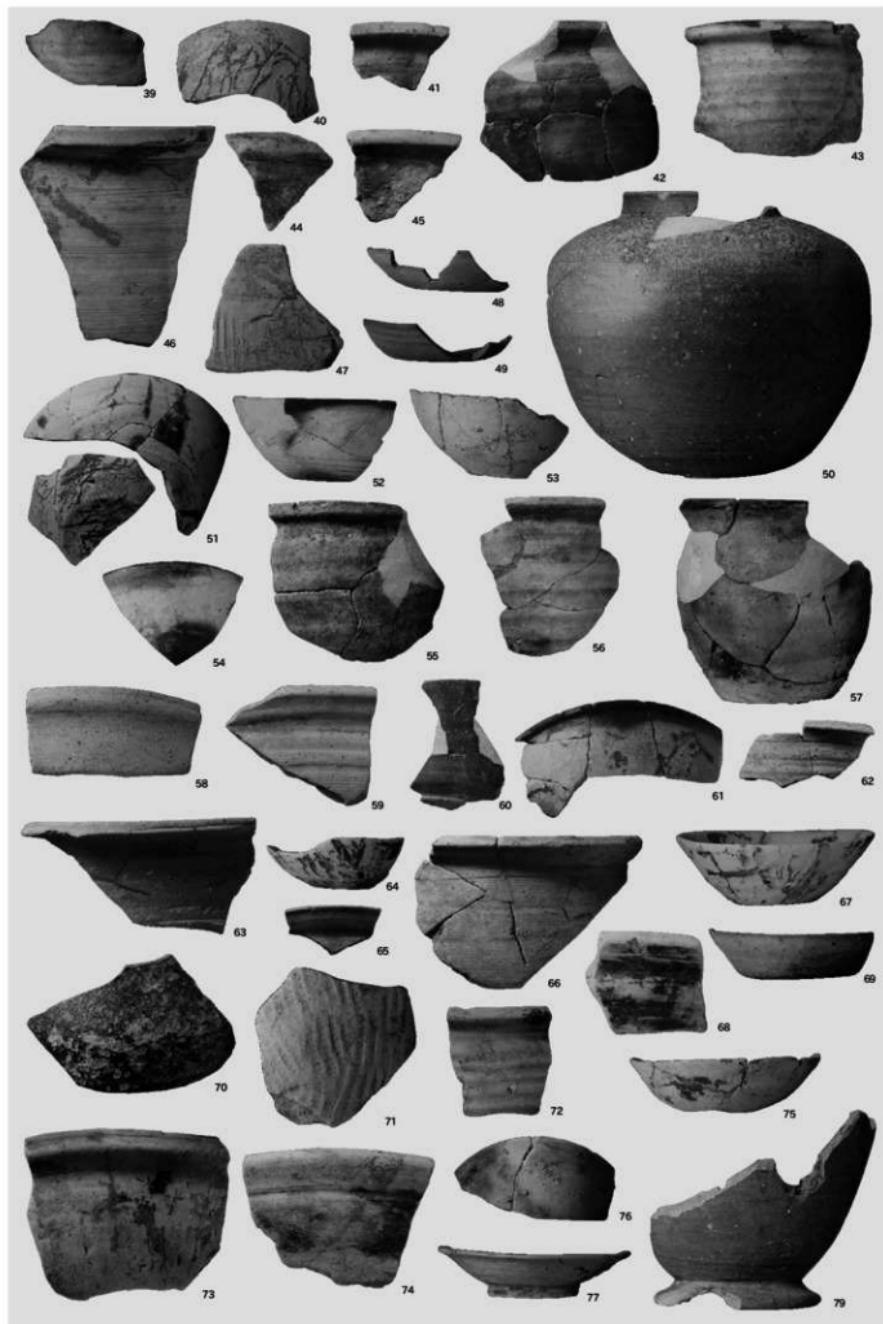


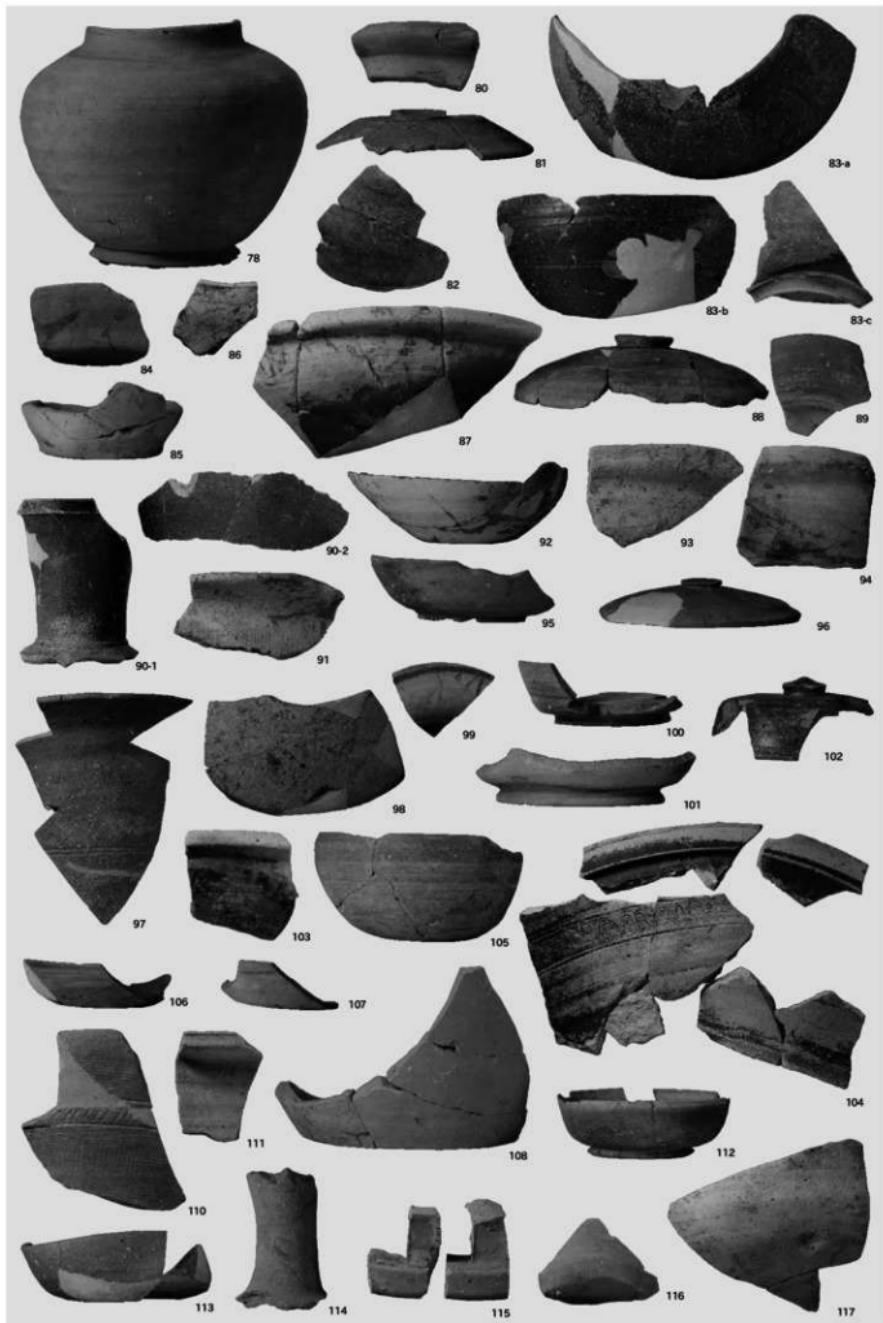
平成3年度調査区全景 西から

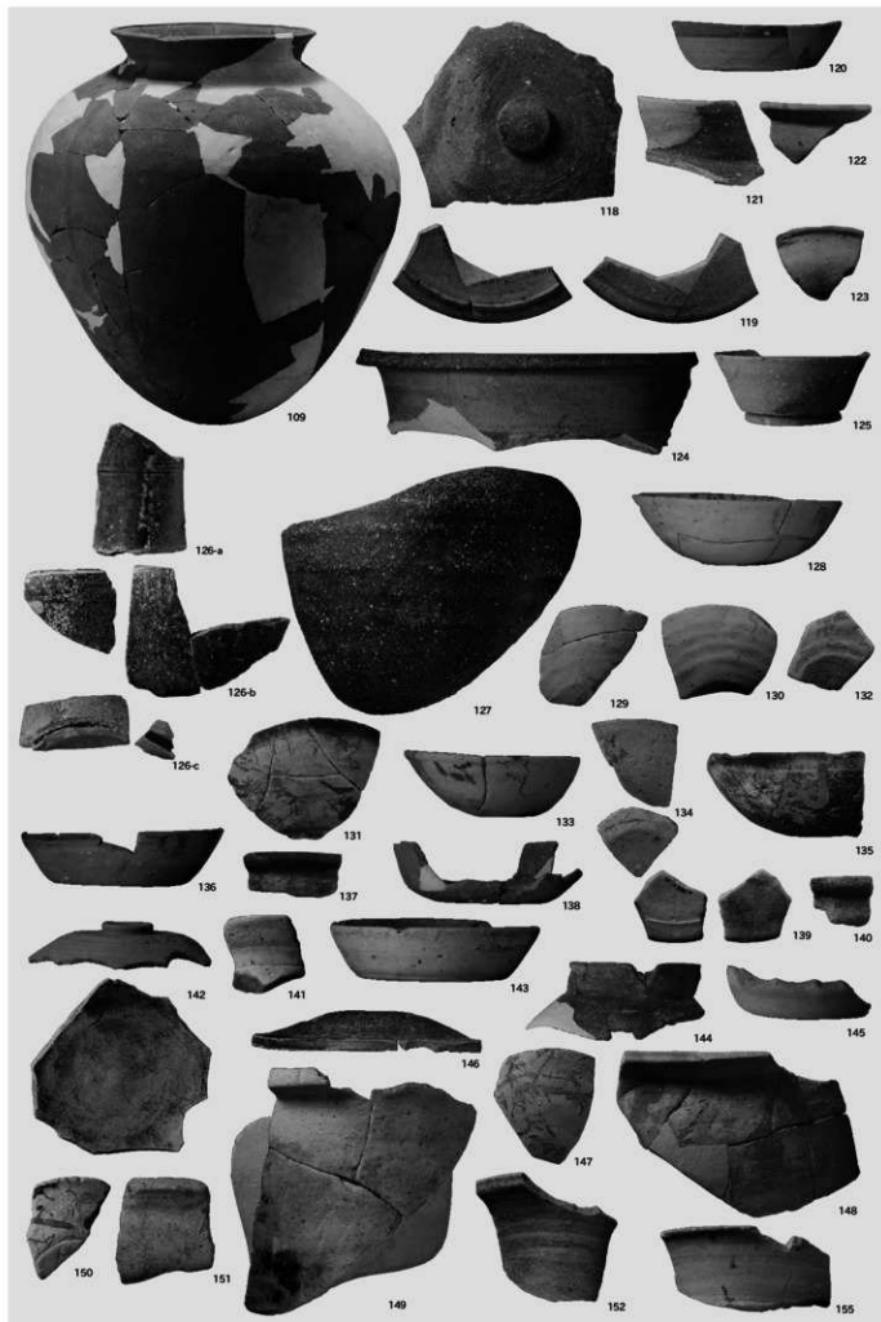


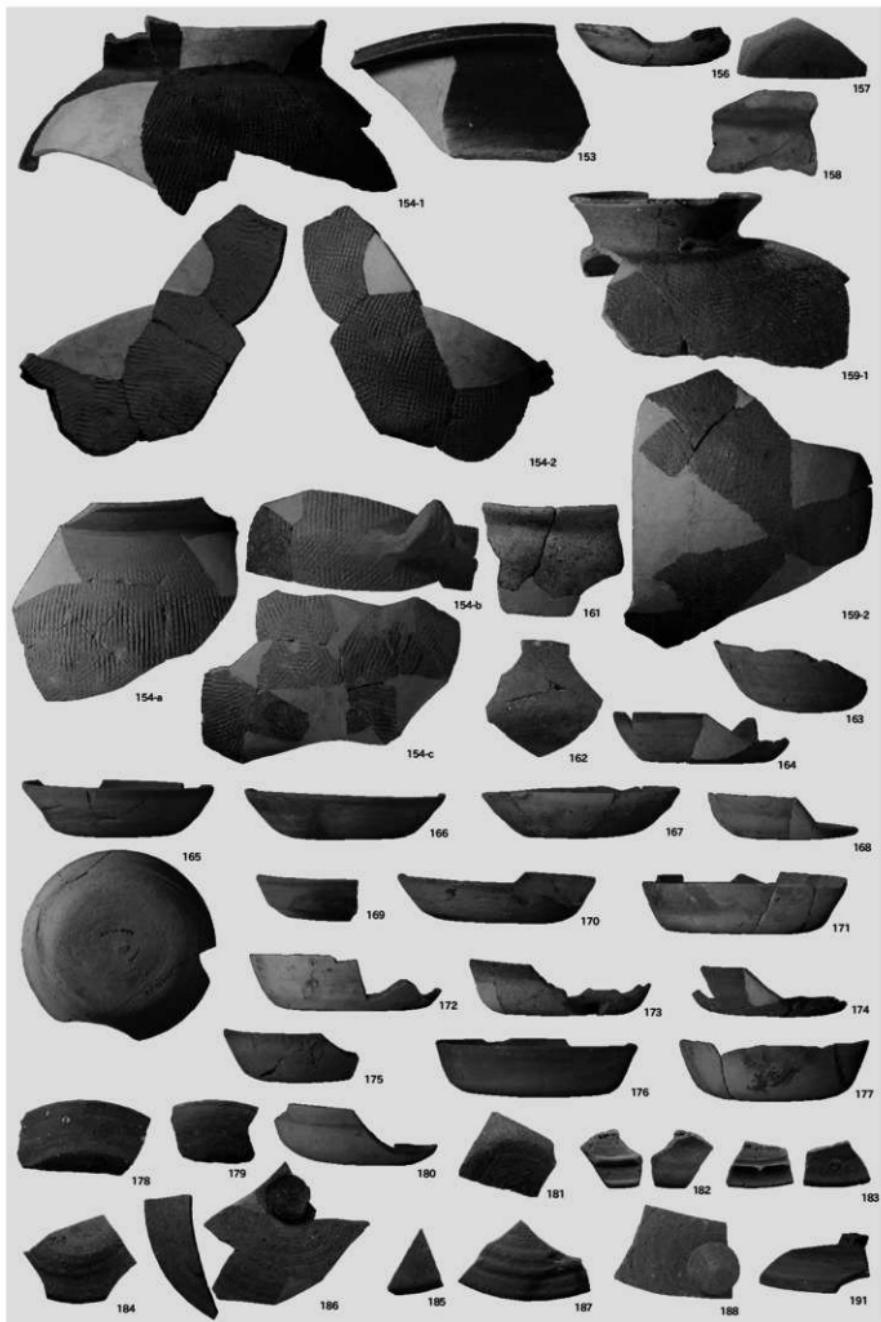
平成4年度調査区全景 東から



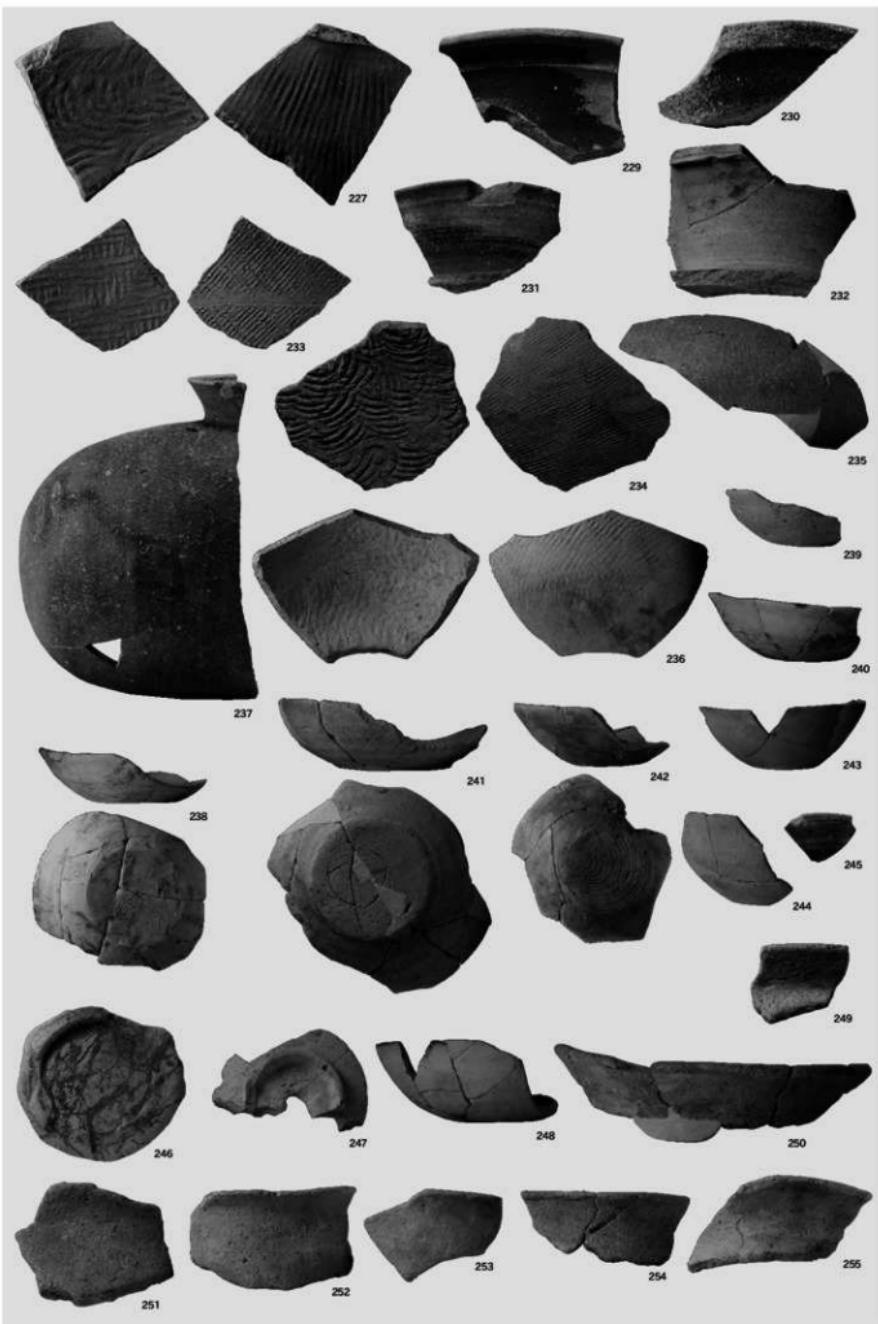






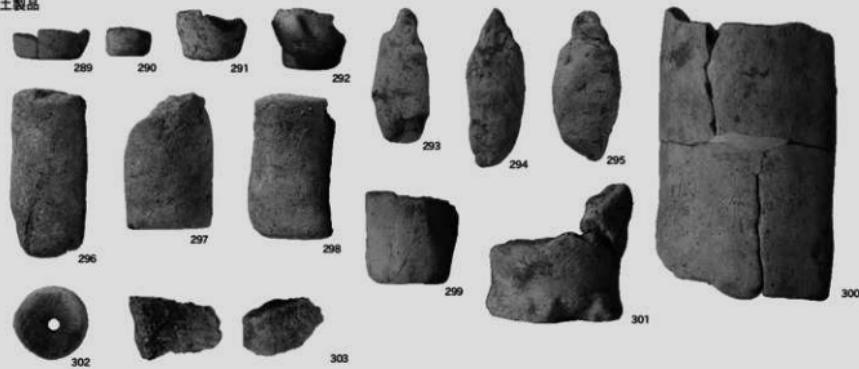








## 土製品



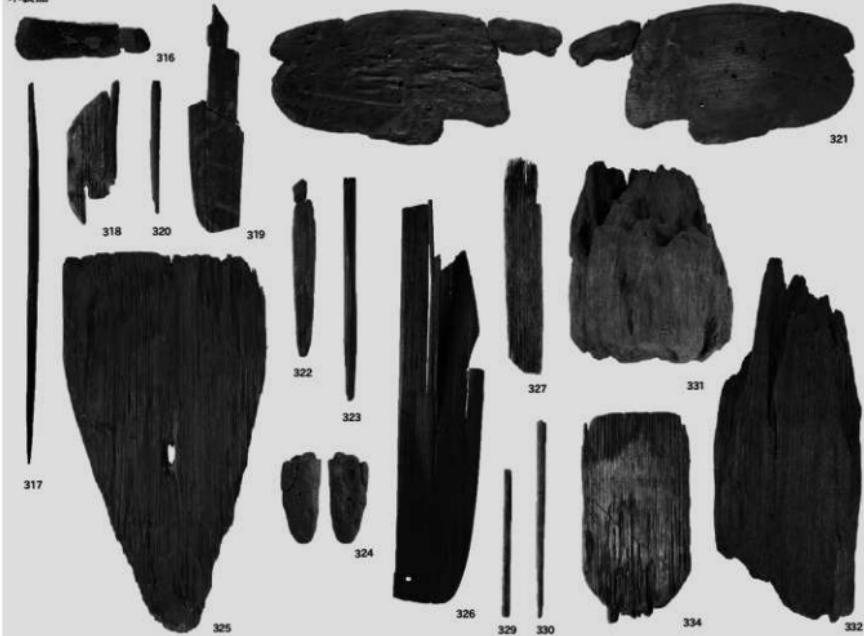
## 石製品



## 金属製品

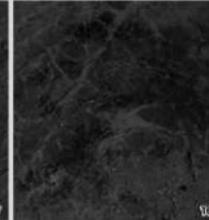
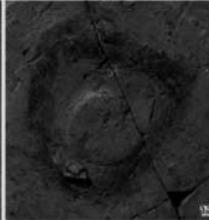
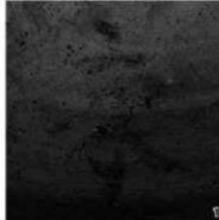


## 木製品



土師器  
底部

墨書き器拡大写真(縮尺任意)



## 報告書抄録

ふりがな	かみうらいせき						
書名	上浦遺跡						
副書名	磐越自動車道関係発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第118集						
編著者名	坂上有紀						
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団						
発行機関	新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟県新津市大字金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981						
発行年月日	平成15年3月7日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 分 秒	東経 度 分 秒	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
上浦遺跡	新潟県新津市 大字福島字 上浦 290番地。 学稲場433 番地ほか	15207	30 49分 00秒 (旧座標)	37度 06分 15秒 (旧座標)	139度 19900509～ 19901109～ 19910902～ 1130～ 19920716～ 0904	7,630 m <sup>2</sup> 6,910 m <sup>2</sup> 3,510 m <sup>2</sup>	道路(磐越自動車 道いわき～新潟 線)建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上浦遺跡	集落跡	奈良・平安 時代 7世 紀末～10 世紀前葉	掘立柱建物跡8・ 土坑・溝・凹地遺 構・歓状遺構・ビ ット多数	須恵器・土師器・土製 品・石製品・木製品・金 属製品	銅製素文鏡(古代) の出土		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第118集  
磐越自動車道関係発掘調査報告書

上 浦 遺 跡

平成15年3月6日 印刷  
平成15年3月7日 発行

編集・発行 新潟県教育委員会

〒956-8570 新潟県新潟市新光町4番地1  
電話 025 (285) 5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団  
〒956-0845 新潟県新津市大字金津93番地1  
電話 0250 (25) 3981  
FAX 0250 (25) 3986

印刷・製本 新高速印刷株式会社

〒950-0963 新潟市南出来島2丁目1-25  
電話 025 (285) 3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第118集

磐越自動車道関係発掘調査報告書

上浦遺跡

正誤表

頁	行	誤	正
31	下から10行目	径7mm	径9mm
図版42・72	遺物No.326	実測図・写真天地逆	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第118集『上浦遺跡』 正誤表追加

頁	位置	誤	正
抄録	北緯	37度49分00秒	37度49分04秒
抄録	東経	139度06分15秒	139度06分09秒